

熊本県八代地域諸方言の二型アクセント研究

A Study of Two-Pattern Accent Systems in Yatsushiro Area of Kumamoto Prefecture

山田高明

Takaaki YAMADA

1. はじめに

1.1 八代地域の概要と本稿の目的

八代市および八代郡（本稿では両地域を合わせた範囲を「八代地域」と呼び、そこで話されている方言を「八代諸方言」と呼ぶ）は熊本県の中南部に位置し、西部は八代海を隔てて天草市を臨み、東部は宮崎県に接する。人口は、八代市が2016年12月末現在で129922人¹、八代郡が2016年11月現在で12362人²であり、トマトや藺草などの農業が盛んである。本研究は熊本県八代地域において話される方言（以下、「八代諸方言」と呼ぶ）のアクセントを対象とするものである。

国土地理院承認 平14総検 第140号



八代地域を含む九州西南部一帯（長崎県、佐賀県の南部、熊本県の西南部、島嶼部を含む鹿児島県の大部分）には最大二つの音調型の対立を有する「二型アクセント」という共通のアクセント体系が分布している。以下、これを木部（2000）に倣い、「西南部九州二型アクセント」と呼ぶが、これら諸方言の内、鹿児島方言や長崎方言の二型アクセントについては比較的先行研究が多い一方で、熊本県、特に本土側の研究は極めて少なく、地域で記述に偏りがあるとい

う問題点がある。本稿では、八代諸方言について以下の三点を明らかにすることを目的とする。

¹ <http://www.city.yatsushiro.lg.jp/kiji0032006/index.html>（八代市ホームページ、住民登録による八代市の人口）（アクセス日：2017年1月6日）

² http://www.hikawacyou.hinokuni-net.jp/toukei3/pub/default.aspx?c_id=18（氷川町ホームページ、町の人口世帯数）（アクセス日：2017年1月6日）

1. 八代諸方言アクセントの音声的特徴を音響音声学的分析によって記述し、各方言のトーン・TBUの解釈を提案する。
2. 八代諸方言における単文節あるいは連文節構造のアクセント実現を明らかにする。
3. 以上のデータに基づいて、西南部九州二型アクセント諸方言が有する特性・特徴と八代諸方言におけるそれらとの対応を検討する。

1.2 先行研究

八代地域の二型アクセントに関する主な先行研究は管見の限り、平山（1937, 1951）と九州方言学会（1969）のみである。

平山（1937, 1951）は、現在の熊本県葦北郡と水俣市を中心に「葦北音調」あるいは「葦北アクセント」（以下では、「葦北音調」で統一する）と呼ばれる二型アクセントが聞かれることを記述しており、八代地域³も「葦北音調」の範囲に含まれるとしている。

平山（1937, 1951）のいう「葦北音調」の特徴は、まず、A型がアクセント単位の末尾で下降する点（B型はアクセント単位内で下降しない）、次に、アクセント単位冒頭からアクセント単位末に向けてピッチの漸次上昇を伴う点の二点にまとめられる。

前者のアクセント単位の末尾に下降があるという点では、鹿児島諸方言アクセントと共通しており、木部（2000, 2012）の分類では、「南部タイプ」（木部 2000, p.356）あるいは「鹿児島タイプ」（木部 2012）と呼ばれるものに該当する。鹿児島諸方言との大きな違いは後者で、例えば鹿児島市方言がアクセント単位冒頭から低平に続いた後に一音節卓立するタイプであるのに対して、「葦北音調」は先述のように冒頭からアクセント単位末までゆるやかなピッチの上昇を伴う

このピッチ上昇の度合にはいくつかヴァリエーションがあり、平山（1951, p.55）では、「 $\overline{\circ}\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\bullet\circ$ 」「 $\bullet\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\bullet\dots\bullet\bullet\bullet\circ$ 」「 $\overline{\circ}\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\circ\bullet\bullet\circ$ 」⁴といった上昇開始位置の異なる複数のパターンが示されている。

平山（1937, 1951）は上記のような「鹿児島タイプ」の二型アクセントとは異なるアクセント体系が八代地域周辺に聞かれることも記述している。それは、「 $\odot\bullet\circ\bullet\odot\bullet\circ\circ\bullet\odot\bullet\circ\dots\circ\circ$ 」⁵（平山 1937, p.130）と表記されるような、A型がアクセント単位頭2音

³ 平山（1937, 1951）によると、八代地域の調査地は「八代郡八代」「同太田郷」となっている。これはそれぞれ現在の八代市松江町、日置町を中心とする地域に相当すると考えられる。

⁴ ●は高音拍、○は低音拍を表す。

⁵ ⊙は中程度の音高の拍を表す。

節目で下降する二型アクセントである。木部の分類では、「北西部タイプ」(木部 2000, p.356)あるいは「長崎タイプ」(木部 2012)と呼ばれるものに該当する。この種の二型アクセントは、現八代市鏡町⁶で広く聞かれ、上記「葦北音調」との境界は「鏡町以北に求むべきものである」(平山 1937, p.131)とある。

一方、九州方言学会(1969)では八代市坂本町南部の鶴喰方言について、ここは元来二型アクセント体系であったが、後に型の対立を失い、「老少ともに●○、○●▽、または●●▽にまとめられる」(p.230、高音部を示す上線は黒丸に改めた)ような一型アクセント体系へ変化したと報告している。つまり、2拍語について単独形では1拍目から2拍目にピッチ下降、1拍の付属語がついた時には付属語が下がるか、あるいは文節全体が高く実現するような一型アクセントであるという。秋山・吉岡(1991)でも、「平板一型化」が見られる地域に「八代郡坂本村」をあげ、「このように二型地域の各地で、すでに一型化現象が顕著になっているのが熊本方言アクセントの動態である」(秋山・吉岡 1991, p.234)としている。

1.3 先行研究の問題点

平山(1937, 1951)では、八代地域のアクセント(「葦北音調」)について1拍語から4拍語のデータを基に比較的詳細な記述がなされている。一方で、八代北部に聞かれるという「長崎タイプ」の二型アクセントは、A型の特徴の簡単な記述にとどまっており、B型の特徴を含めてその体系の全貌が明らかでない。

また、音調の表記が高低二段観(○●、あるいは○[—]○)であり、具体的な音声的特徴を捉えられていないという問題点もあげられる。特に、鹿児島市方言の二型アクセントと異なり、多音節にわたって実現する音声的特徴が示唆される八代地域のアクセントでは、二段観あるいは三段観に基づく音調表示には限界がある。尤も、平山(1951)においても「鹿児島音調に聞かれる高低の差ほど明瞭でないという印象」(p.48)、「その山の頂点までだんだん緩く上昇させるという感じ」(p.49)など段階観を離れた記述は散見されるものの、語頭・文節頭からどのように上昇し、どこで下降し始めるのかといった具体的な特徴は不明である。以上の点は実際に音響音声学的な分析を改めてし直す必要がある。

また、上記とも関連して、種々の音節構造(軽音節、重音節、超重音節、あるいはこれらの組み合わせ)における音調の記述が乏しく、当該方言におけるトーン(アクセント)を担う単位(tone bearing unit, TBU)が不明である。西南部九州二型アクセント諸方言

⁶ 平山(1937, 1951)では「同郡鏡町」。

を TBU という視点から見たとき、鹿児島市方言（木部 2000）のように音節が TBU として設定される方言と、長崎市方言（坂口 2001、松浦 2014）のようにモーラが TBU とされる方言の大きく二つに分かれる。

(1) 鹿児島市方言と長崎市方言の TBU

- ・鹿児島方言の A 型（木部 2000, pp.8-9）：アクセント単位の次末音節の後で下降
ガ[ソ]リン、セ[メン]ト、カ[レン]ダー、エスカ[レー]ター、ガソリンス[タン]ド
- ・長崎方言の A 型（松浦 2014, p.13）：アクセント単位頭 2 モーラ目の後で下降
ガ[ラ]ス、コ[ッ]プ、ボ[ー]ル、キャ[ラ]メル、ピ[ス]トル、メ[ー]トル

しかしながら上記の理由で八代諸方言の TBU は未詳のままである。

最後に、提示されているアクセントデータが 1～4 拍の体言あるいは用言、またそれに 1 拍付属語が接続した形のみで、複合語や連文節構造でのアクセント実現が明らかでない。特に、九州方言学会（1969）による旧坂本村鶴喰方言の記述では、示されているデータが 2 拍名詞とそれに 1 拍付属語が接続した形式のみである。「一型化」の傾向を主張するのであれば、1 拍語やより長い拍数の語、あるいは複数の文節が連続する環境でも同様であることを示さなければならない。

先に触れた音調型以外にも、複合語・外来語のアクセントや文節境界でのピッチ実現などにおいて、西南部九州二型アクセント諸方言はそれぞれ異なる特徴が見られる。例えば複合語であると、鹿児島では複合語の前部要素の音調型が語全体の音調型になるという規則（平山 1951 のいう「一般複合上の法則」）がどのような語であっても広く適用されるが、長崎方言では「一般複合上の法則」に加えて前部要素の音調型と長さ（拍数）が関連することが知られている（松浦 2014）。八代諸方言についても、類別語彙に基づく単純語のアクセント記述に止まらず、様々な語種・環境でのアクセント実現を記述する必要がある。

1.4 調査概要

調査は 2014 年 10 月から 2016 年 12 月にかけて継続的に行った。

1.4.1 調査地点

本研究では平山（1951）において二型アクセントの分布域となっている八代西部地域から八代市大村町、八代市古^{ふるふもと}麓町、八代市坂本町上^{かみふかみ}深水、八代郡氷川町野^{のづ}津の 4 点を調査地点として選んだ。なお本研究では、八代市大村町および八代市古麓町において話される言語を「旧八代市方言」、坂本町上深水において話される言語を「上深水方言」、八代郡氷川

町野津において話される言語を「野津方言」と呼ぶ。

国土地理院承認 平14総復 第149号



1.4.2 話者

八代地域で言語形成期を過ぎた高年層から中年層の話者を対象とした。

旧八代市方言	UM 氏	1935 年生、女性、幼少期に大阪で生活した時期がある ⁷
	YS 氏	1952 年生、男性、八代市古麓町出身・在住、外住歴無し
上深水方言	SM 氏	1933 年生、女性、坂本町上深水出身・在住、外住歴無し
	SS 氏	1932 年生、男性、坂本町上深水出身・在住、外住歴無し
野津方言	FS 氏	1934 年生、女性、氷川町野津出身・在住、外住歴無し
	KY 氏	1925 年生、女性、氷川町野津出身・在住、外住歴無し

1.4.3 調査方法

調査は、調査票読み上げ調査と自然談話観察調査を各地点で行った。調査票の調査語彙は類別語彙 1 拍～3 拍名詞、外来語、複合語から成る。各調査語につき、単独形、調査語 + 付属語、「○○が来た」「古い○○」のようなフレーム文を用意し、それらを読み上げてもらった。適宜方言形に直してもらった。第 3 章から第 6 章において使用するデータは主に調査票読み上げ調査によって採取されたものを中心とするが、自然談話観察調査によって得られたデータも参考にする。

⁷ 同町の生え抜きの他の話者とのデータの比較の結果、話される方言や音声的特徴に相違は認められず、大阪方言の影響は無いと考える。

1.5 本稿で用いる音調表記に関する記号

本稿の以下の記述で用いる音調表記に関する記号を示す。

(2) 境界

| : 文節境界

(3) 単音節の声調

L : 低 H : 高 M : 中

(4) ピッチ変化

] : 音節間下降 [: 音節間上昇]]: 先行音節内下降 [[: 後続音節内上昇

(5) 可変長の音節連続に実現するメロディー⁸

H+ : 高平調 (L+ : 低平調)

LH+ : 早上がり。音節数が増えると後部の高平調が伸びる (声調拡散する)

L-H : 遅上がり。音節数が増えると、L と H の間で連続的に上昇する

H-L : 音節数が増えると、H と L の間で連続的に下降する

(6) 境界特徴

} : 下降境界特徴

(7) その他

○ : 音節、◌ : 無声化音節

2 西南部九州二型アクセントの記述理論

2.1 N型アクセント

N型アクセントとは、日本語諸方言アクセントの体系を記述するために用いられる概念であり、上野善道 (上野 1984, 2012) により提唱された。N型アクセントは、上野 (2012) において、「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数 (N) 以上に増えていかない体系」(p.45) と定義されている。「アクセント単位」とは、アクセントが実現する領域・ドメインのことであり、東京方言においてアクセント単位は専ら「語」であるのに対して、N型アクセント諸方言においては、付属語が独立したアクセント単位を成さず、前接する「語」と合わせた「文節」が一つのアクセント単位になり得る。

日本語諸方言のうち、隠岐島方言・福井県越前町小樟方言 (三型アクセント、つまり N=3)、鹿児島市方言・長崎市方言 (二型アクセント、N=2)、宮崎県都城市方言 (一型アクセント、N=1) などが N型アクセントである。対して、アクセント単位の長さに応じて

⁸ 児玉 (2014) による表記法を採用した。

アクセントの型の対立数が増加する体系は、「多型アクセント」と呼ばれる。これに該当するのが、東京方言や京都方言、広島方言などである。

2.2 語声調

語声調は早田輝洋（早田 1977, 1999）により提唱された概念であり、N型アクセントと同じくアクセント体系の記述に用いられる。

早田（1999）の用語法では、「アクセント」とはそれが当該単位のどこにあるか、つまり「位置」が重要であるものをさし、「トーン」とは当該単位に実現するのはどれか、つまり「種類」が重要であるものをさし、この両者を峻別する。この「トーン」のうち、単語単位でそのトーンが決定されるものが「語声調⁹」である。早田（1999）は、鹿児島方言は、「語末下降調」（従来 A 型と呼ばれるもの）と「語末上昇調」（従来 B 型と呼ばれるもの）の二つの声調を持つ語声調方言と捉えている。

2.3 N型アクセントと語声調の関係

N型アクセントと語声調とが指す範囲は一致する部分も多いが、相違もある。立場によってもその捉え方は多少異なるようだが、その大きな相違点の一つに「位置」の情報が重要か否か、言い換えると「(位置が固定した)アクセント核を想定するか否か」という問題がある。

早田による語声調論は先に述べたように、「位置」が重要な「アクセント」と「種類」が重要な「トーン」とを峻別する。そしてその「トーン」が単語単位に決定されるものを語声調と呼ぶ。従って、語声調論の枠組みにおいては、東京方言のように位置の決められたアクセント核を想定するアクセント体系は「トーン」ではなく「アクセント」に分類される。

一方、上野による N 型アクセントの枠組みでは、「音節声調」は「声調」として最初から別扱いし、それ以外（「語声調」、ストレスアクセント、ピッチアクセントなど）を緩くまとめて総称として「アクセント」と呼んでいる（上野 2013）。その「アクセント」の内、アクセント単位の長さに関わらず型の対立数が増えないものを「N型アクセント」と呼ぶ。従って、N型アクセントには（種類が重要な）語声調方言も（位置が重要な）アクセント核を想定する方言も（さらにストレスアクセント言語も）含みうるということになる。上野（2013）は、N型アクセントかつ語声調方言の例として鹿児島方言を、N型アクセントかつアクセント核を想定する方言の例として喜界島佐手久方言を挙げている。

⁹ 北京語の四声のように、トーンが音節単位で決まっている場合、それを「音節声調」と呼ぶ。

以上を上野の視点を借りて整理すると、N型アクセントと語声調は「N型アクセントと語声調」の関係にある、ということになる。

2.4 西南部九州二型アクセントと語声調

語声調理論においては、語（アクセント単位）は基底において「位置」の定まっていないトーン（声調）が指定されている、と考える。これに従うと、トーンのみが指定された基底形から実際の音声実現を導くプロセスの説明が必要になる。松浦（2014）や児玉（2010, 2012, 2016 など）では、西南部九州二型アクセント諸方言が語声調方言であるとして、長崎方言や鹿児島諸方言、天草方言におけるトーンと、そこから実現形を導くプロセスが提案されている。

例えば、松浦（2014）では Pierrehumbert and Beckman (1988) による「トーン連鎖モデル」の理論を用いてそのプロセスを説明する。松浦によると、長崎方言の二型アクセントにおいて基底で指定されているのは A 型：LH*L- / B 型：LH というメロディーの連鎖であり（松浦（2014）では両型の最初の L を句音調として更に分離している）、それぞれが指定のモーラに結合されることによって実現形が導かれるという。

(1) 松浦（2014）による長崎方言の音声表示

A 型：第 1 モーラ = L、第 2 モーラ = H*、最終モーラ = L-

B 型：第 1 モーラ = L、第 2 モーラ = H、（または最終モーラにも H）

一方児玉は、語声調を「多音節声調のメロディー型と境界特徴の組み合わせ」(児玉 2015) と定義しており、この「メロディー」と「境界特徴」によって示されるトーンが基底において指定されているとする。児玉（2014）は境界特徴を「実現する位置が必ずしも固定せず、アクセント核とはみなし難い、境界部での上昇あるいは下降のピッチ変化」と定義する。そして児玉はこのトーンに対して、種々の音節構造に応じたトーンの配分条件を設けることによって、実現形を導くプロセスを想定している。以下に、児玉が提案する鹿児島方言（児玉 2012）のトーンと天草本渡方言（児玉 2016）のトーンおよび配分条件を示す。

(2) 鹿児島方言のトーン（児玉 2012）

A 型：L+HL / B 型：L+H}

(3) 天草本渡方言のトーンと配分条件（児玉 2016）

- ・ トーン

A 型 : nF.(nF)F+ / B 型 : nF+}

(句音調が加わった形 A 型 : L(.)H.F+ / B 型 : L.H+} ~ L+.H})¹⁰

- ・ 配分条件

「A 型の L(H)は、頭音節が有声長音節であれば、この音節の上昇調として実現する。そうでなければ 2 音節にわたる。1 音節あるいは 2 音節のアクセント単位で F+ を置く音節がなく、後続のアクセント単位がある場合は、F は次アクセント単位の冒頭で境界下降として実現する。下降を実現できる次アクセント単位がなければ F は末音節内部で実現する。B 型の L は、1 音節にわたって実現する。1 音節の B 型アクセント単位では、H が音節の終端部の急激な上昇で実現し、”}”は次アクセント単位の冒頭での急な下降として実現する。3 音節以上の B 型アクセント単位では、”}”が末音節の L として実現してもよい」(児玉 2016, p.69)

本稿では、八代諸方言アクセントの音声実現の観察の結果、当該方言に位置の固定したアクセント核は想定しえないと判断した¹¹。従って、八代諸方言は長崎方言や鹿児島方言などと同様に、アクセント核を想定しない語声調方言である、という立場をとる。

次章以降においては、主に児玉の枠組みを援用しつつ、八代諸方言アクセントにおいて基底で定められているトーンとそこから実現形を導くプロセスを提案していく。

3. 旧八代市方言の分析

本章では、旧八代市方言(八代市大村町、同市古麓町)のアクセントの特徴を記述する。筆者の調査の結果、旧八代市方言は二つのアクセント型の対立を持つ明瞭な二型アクセント体系であった。以下では、まず A 型、次いで B 型の音声的特徴を記述したのち、それらをもとに旧八代市方言アクセントの解釈を行う。

3.1 A 型の音声実現の記述

3.1.1 語末・文節末のピッチ下降

¹⁰ ピリオド “.” は音節境界、nF は非下降部、F は下降部を示す(児玉 2016)。

¹¹ アクセント核体系を採らない判断の根拠は、詳しくは第 3 章以降のデータで示すが、例えば八代諸方言においてピッチ下降を伴って実現する A 型に、ア]ネ～ア[ネ]]「姉」、ウ[タ]ガ～ウタ[ガ]]「歌が」のような下降開始位置のヴァリエーションが観察されることが挙げられる。ヴァリエーションの内どちらか一方、例えばア]ネ、ウ[タ]ガを基本形として、/ア'ネ/、/ウタ'ガ/のようにアクセント核 (') を置いた場合、後者の変異形に対してはアクセント核が移動する条件(例えば母音の無声化などの音声学的条件)が想定されなければならない。しかし、上記の例についてはそのような移動の条件を考えることができない。このような例は寧ろ、トーンが実現する際のヴァリエーションの一つであって、当該諸方言が語声調方言であることを示す好例の一つだと考える。

A型1音節語は、音節内下降として実現し、後述のB型のピッチ上昇と対立する。また、平山（1951）が葦北音調のA型1音節語について「母音が引き延ばされて準二音節の形式をとる」（平山 1951, p.47）と記述しているように、旧八代市方言のA型1音節語でも母音の延伸が見られる（カー]]「蚊」、チー]]「血」など）。

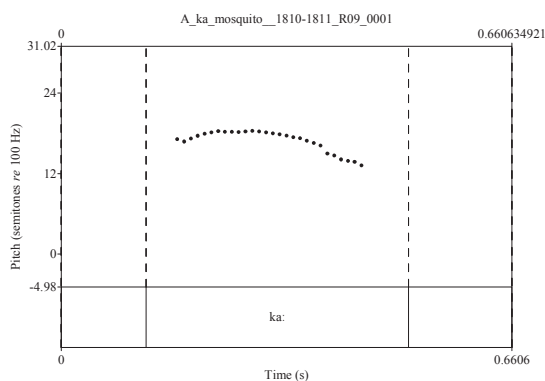


図 3-1. カー]]「蚊」

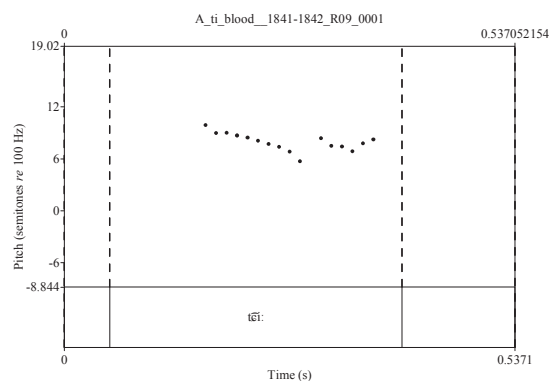


図 3-2. チー]]「血」

A型2音節語は、1音節目から2音節目にかけてピッチ下降が観察され、聴覚的には〇〇、あるいは〇〇]]として知覚される。下降開始位置は必ずしも音節境界ではなく、頭音節の内部でピッチ下降が始まるもの、2音節目でピッチ下降が始まるものなどのヴァリエーションが観察される。また、2音節目の母音が無声化する場合はピッチ下降は頭音節内で実現し（〇]]〇）、逆に頭音節が母音の無声化を起こす場合は末音節にピッチ下降が現れる。ア[ネ]]「姉」や、ヒト]]「人」、カ]]キ「柿」など、音節内のピッチ下降（〇]]）がある場合には当該音節の母音は1音節語同様多少延伸して発音される（ex. アネー、ヒトー、カキー）。

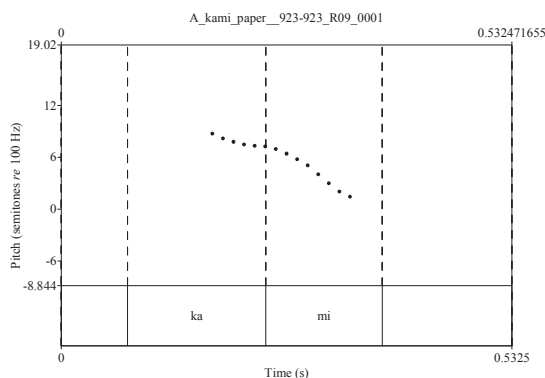


図 3-3. カ]]ミ「紙」

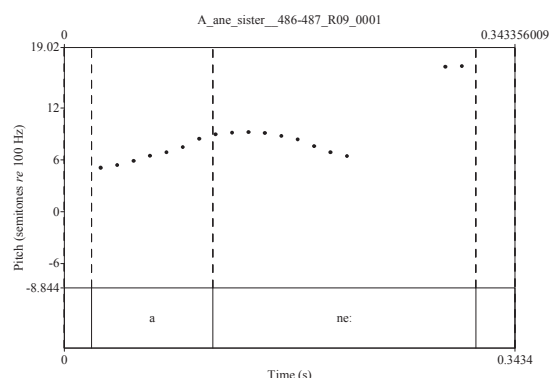


図 3-4. ア[ネ]]「姉」

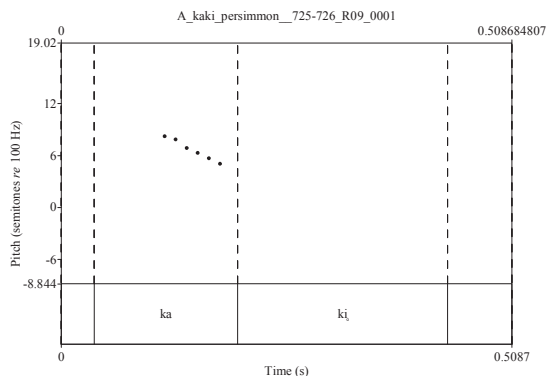


図 3-5. カ]き「柿」

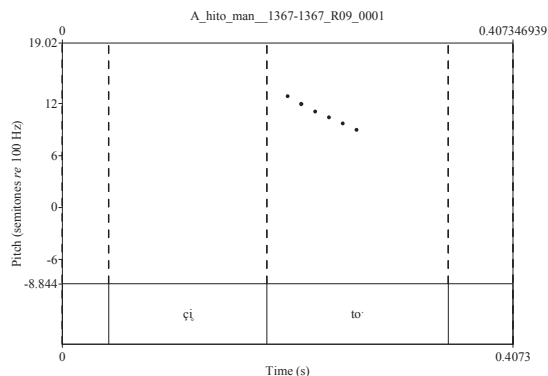


図 3-6. ヒト]「人」

3 音節語では、次末音節から末音節にかけてピッチ下降が現れる。聴覚的には、○○]○あるいは○]○○のように 2 音節目内部、1 音節目の直後に下降が知覚されるものと、○○]○のように次末音節の後で下降するように知覚されるものとの二つのパターンがある。前者の場合には、ピッチ下降は次末音節始端から始まる。後者では、末音節境界でピッチが下降する。このようなパターンの違いは自由変異的なゆれであり、弁別的な特徴ではない。前者のパターンを取る語には、語末が狭母音 /i, u/ である語が多い(イ]ワシ「鯛」、タ]タミ「畳」、カ]ザリ「飾り」など)。

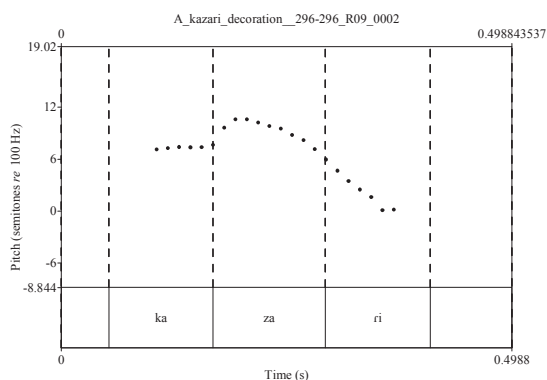


図 3-7. カ[ザ]り「飾り」

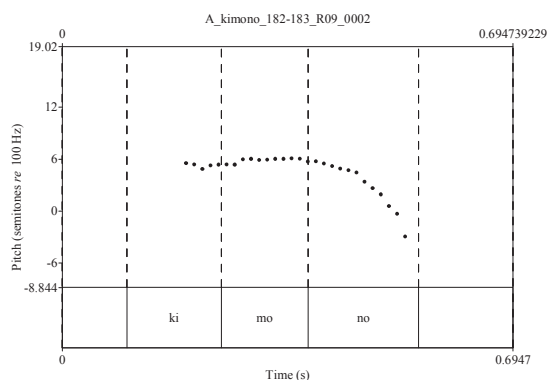


図 3-8. タ[タ]ミ「畳」

4 音節以上の A 型では、ピッチ下降の位置は語の末尾、つまり次末音節から末音節にかけて現れる。3 音節語同様、下降開始位置は必ずしも固定しておらず、次末音節内部から始まるものや、末音節境界で始まるものなどのヴァリエーションが見られる。

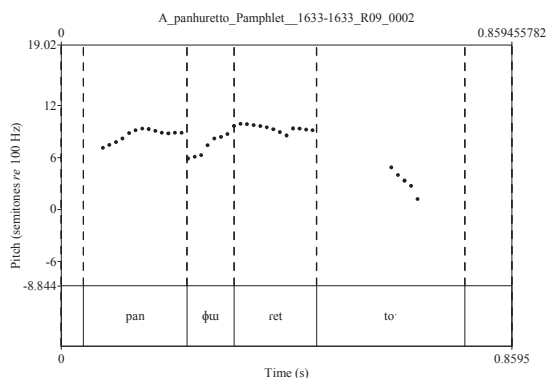


図 3-9. [[パンフレット]ト「パンフレット」

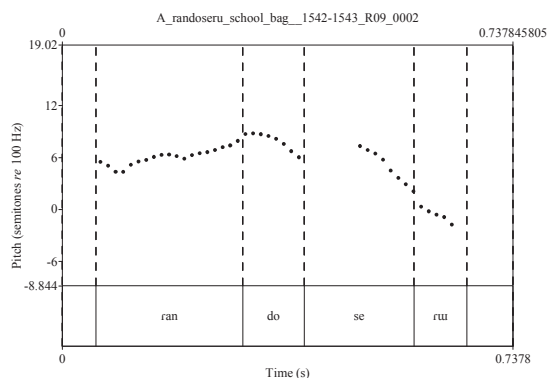


図 3-10. [[ランドセル]ル「ランドセル」

次に、A 型名詞に付属語が接続する場合について見てみたい。(1) に示すように、主格のガや対格のバ、主格・属格のノ、方向格などのニ、といった 1 音節付属語、あるいはカラ (異形態として、カイ、カッなどがある) やマデといった 2 音節付属語、副助詞バッカリ (異形態にバッカ、バカイ) が接続すると、ピッチの下降は**文節**の次末音節から末音節にかけて生じる。この場合も単独形と同様、下降開始位置は固定しておらず、自由変異的なゆれが見られる。1 音節付属語やカラ・マデといった 2 音節付属語、副助詞バッカリは固有のアクセントを持っておらず、直前の語を含む文節がアクセント単位となっている(木部 (2000, 2012) のいう従属式の付属語)。

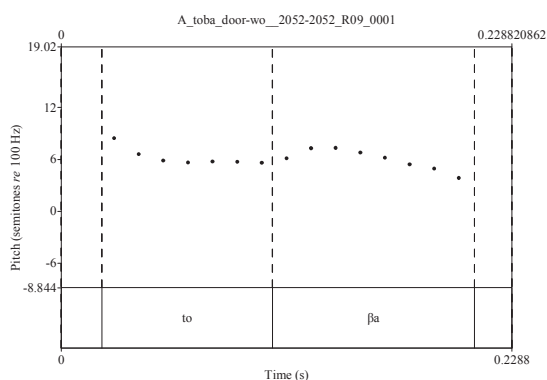


図 3-11. ト]バ「戸を」

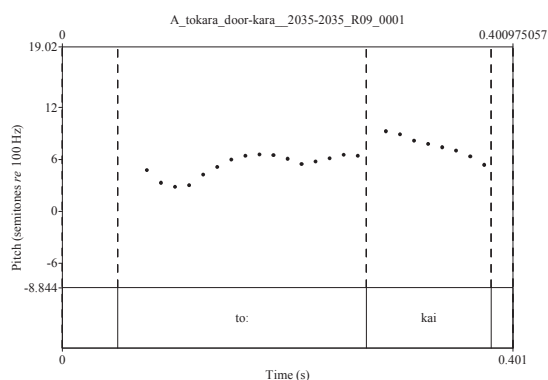


図 3-12. ト[カイ]]「戸から」

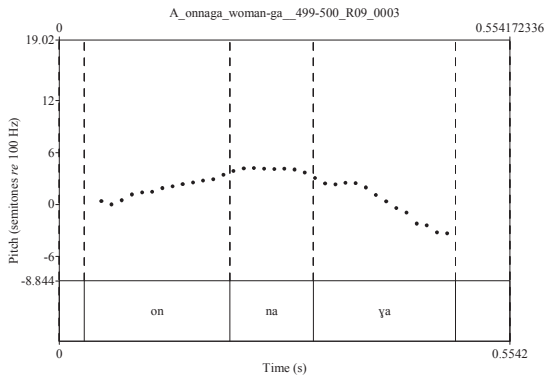


図 3-13. [[オンナ]ガ]「女が」

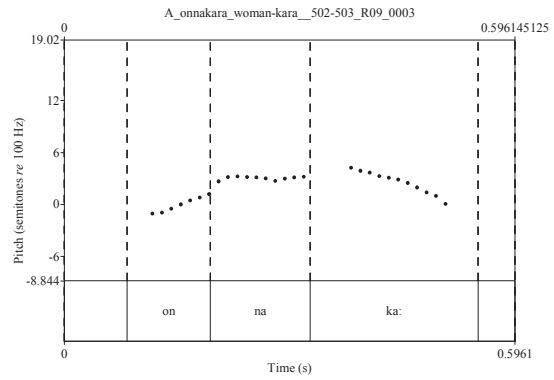


図 3-14. [[オンナカー]]「女から」

(1) 旧八代市方言 A型付属語接続形

トー]]「戸」：ト]ガ「戸が」、ト[カ]ラ～ト[カイ]]「戸から」

カー]]「蚊」：カ]ガ「蚊が」、カ[マ]デ「蚊まで」、[[カーバツカ]リ「蚊ばかり」

カワ「川」：カ[ワ]ニ「川に」、カワマ]デ「川まで」

イワ「岩」：イワ]バ「岩を」、イワバカ]リ「岩ばかり」

オン]ナ「女」：オンナ]ガ「女が」、オンナカ]ラ「女から」、オンナマ]デ「女まで」

更に、重音節 (CVV、CVC) を含む A 型名詞・文節のピッチ下降の実現について見てみる。アクセント単位が重音節で終わる場合、A 型のピッチ下降は当該音節内で実現する。ただし、下降開始位置には多少のゆれがあり、下降開始が早まれば聴覚的には○○…○]○として、下降開始が遅ければ○○…○○]]として知覚される (レッ]スン ～ レッスン]]「レッスン」)。

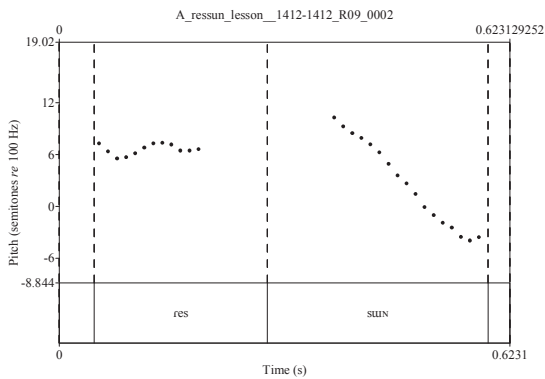


図 3-15. レッ]スン「レッスン」

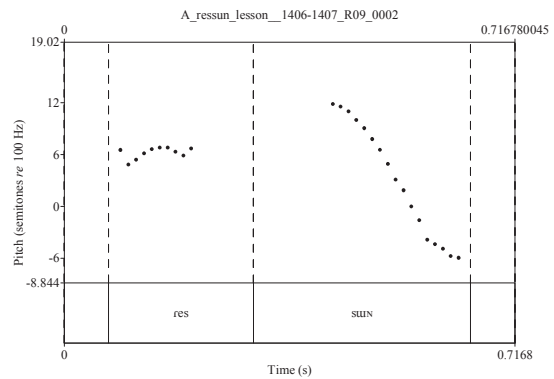


図 3-16. レッ[スン]]「レッスン」

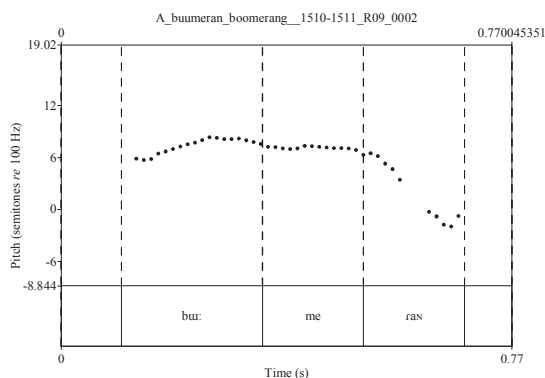


図 3-17. [[ブーメ]ラン「ブーメラン」

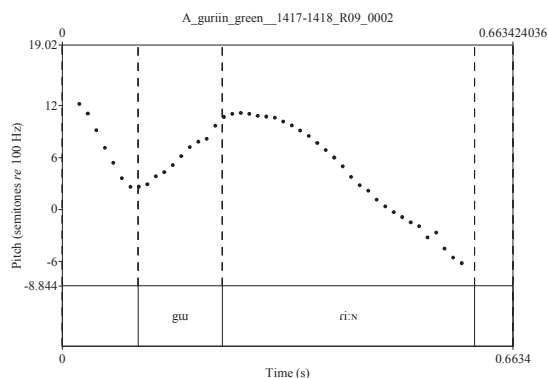


図 3-18. グ[リーン]「グリーン」

3.1.2 語頭・文節頭のピッチ上昇

A 型では、語末・文節末のピッチ下降に先立ってピッチ上昇が聞かれる。

A 型 1 音節語では音節内のピッチ下降の前に先立って、短いピッチ上昇が生じることがある (図 3-1. カー]「蚊」 vs. 図 3-2. チー]「血」)。

A 型の 2 音節語、3 音節語、あるいは同じ音節数の A 型文節にはピッチ下降位置にいくつかのヴァリエーションがあった (○]○~○○], ○]○○~○○]○~○○○]) が、それぞれについてピッチ下降の前に語頭・文節頭からのピッチ下降開始の直前までのピッチ上昇が観察される。○]○や○]○○など、1 音節目の直後でピッチが下がるように聞こえるいわゆる「頭高型」のようなパターンでも、頭音節内でピッチ上昇した後、次の音節との境界でピッチ下降するパターンをとる。

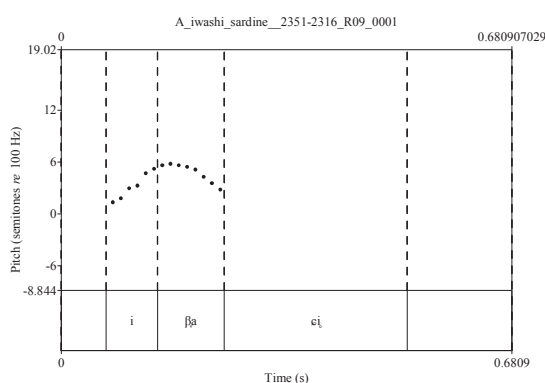


図 3-19. イ]ワシ「鰯」

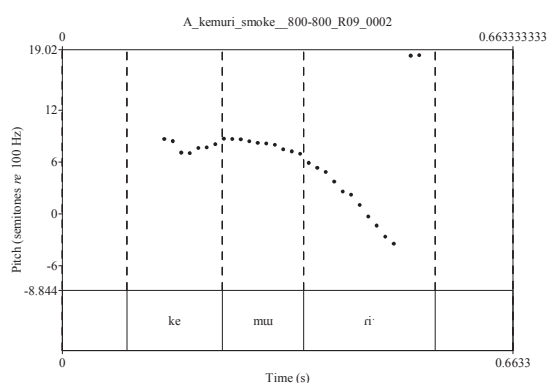


図 3-20. ケ[ム]リ]「煙」

4 音節以上の比較的長い語あるいは文節では、ピッチ上昇は「早上がり」「遅上がり」などのパターンを取る。前者は、語頭・文節頭 1 音節目から 2 音節目でピッチ上昇した後下

降位置まで平進するパターンで、ピッチのピーク位置は語頭・文節頭付近にある。後者は、語頭・文節頭からピッチ下降開始位置まで連続的にピッチが上昇していくパターンで、ピッチのピーク位置は語末・文節末の下降直前にある。短い語・文節のピッチ上昇、あるいは「早上がり」パターンのピッチ上昇は、上昇位置が明確に知覚できる一方、「遅上がり」パターンは多音節に渡って連続的にピッチが上昇するため、どこで（どの音節で）上昇しているのか知覚が難しく、またその音調も表記（HL式、○●式、ブラケット式（[,]））しにくいという問題点がある。そこで本論文では試みに、「遅上がり」パターンのような語頭・文節頭から下降開始位置の直前まで連続的に、かつ多音節に渡るピッチ上昇を「<」として表記してみたい。

(2) 語頭、文節頭からの多音節に渡る漸次的なピッチ上昇：<

ex.) [[パン[フレッ]ト → <パンフレッ]ト「パンフレット」、
 [ト[ランプ[アソ]ビ → <トランプアソ]ビ「トランプ遊び」

・「早上がり」パターン

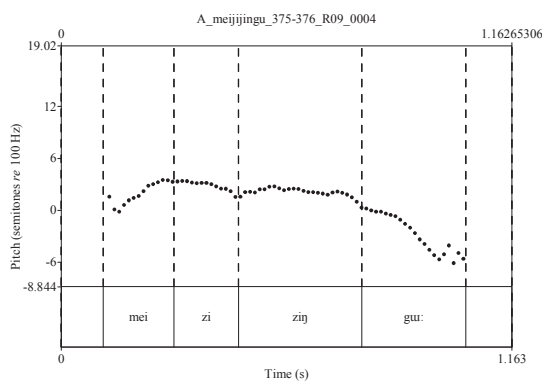


図 3-21. [[メイジジン]ゲー「明治神宮」

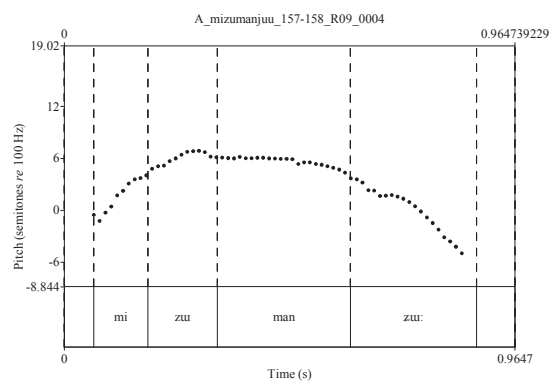


図 3-22. ミ[ズマン]ジュ「水まんじゅう」

・「遅上がり」パターン

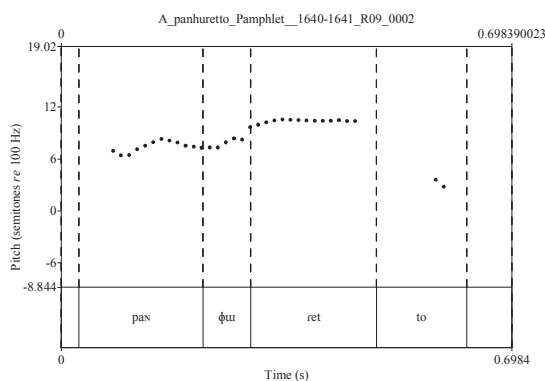


図 3-23. <パンフレッ]ト「パンフレット」

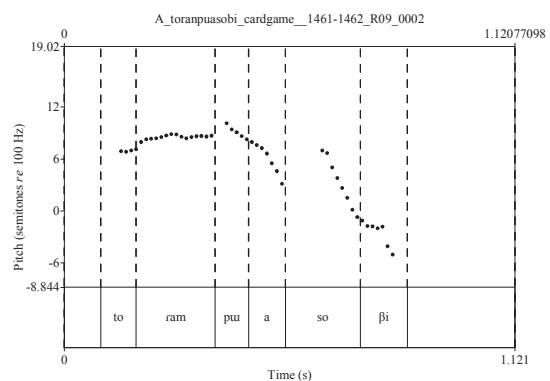


図 3-24. <トランプアソ]ビ「トランプ遊び」

以上が、旧八代市方言の A 型の音声特徴である。それらは以下のようにまとめられる。

・旧八代市方言 A 型の音声特徴

語・文節の頭音節からのゆるやかなピッチ上昇（「早上がり」「遅上がり」）の後、次末音節から末音節にかけてピッチが下降する。下降開始位置は必ずしも固定してはいない。1 音節語では、音節内でピッチ下降する。

3.2 B 型の音声実現の記述

3.2.1 語頭・文節頭からのピッチ上昇

B 型 1 音節語は、音節内でピッチが上昇し、先述のピッチ下降を伴う A 型 1 音節語と対立する。

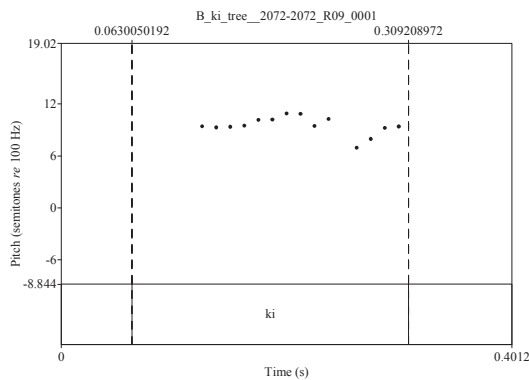


図 3-25. [[キ「木」

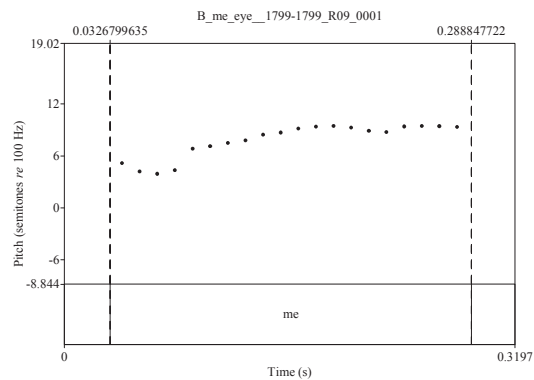


図 3-26. [[メ「目」

2 音節語では、1 音節目から 2 音節目にかけてピッチ上昇が見られる。[[マツ「松」のように末音節の母音が無声化する場合には、頭音節内でピッチの上昇が実現する。ただし、古麓町の話者は、末音節（2 音節目）が狭母音 /i, u/ の場合に、末音節に多少のピッチ下降を伴って○]○のように発音することがある（ア]ニ「兄」、ア]リ「蟻」、サ]ル「猿」etc.）。この場合、単独形では同様に下降を伴う A 型 2 音節語と対立が中和してしまうが、後述する付属語が接続した場合には、ア[ニガ「兄が」、サ[ルガ「猿が」のようにほかの B 型同様下降を伴わないパターンをとり、常に下降を伴う A 型（ex. ア]メ、ア[メ]ガ「飴、飴が」）とは異なる音声実現になる。

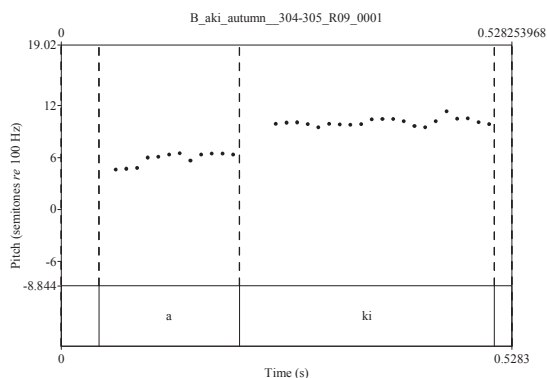


図 3-27. ア[キ「秋」

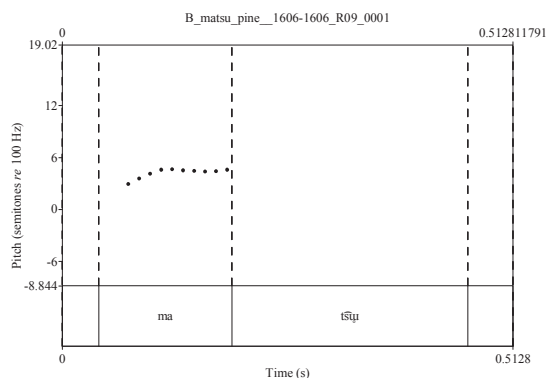


図 3-28. [[マツ「松」

・末音節が狭母音の場合にピッチ下降を伴う場合

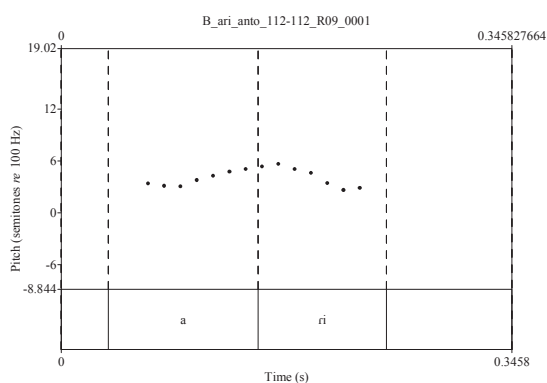


図 3-29. ア]リ「蟻」

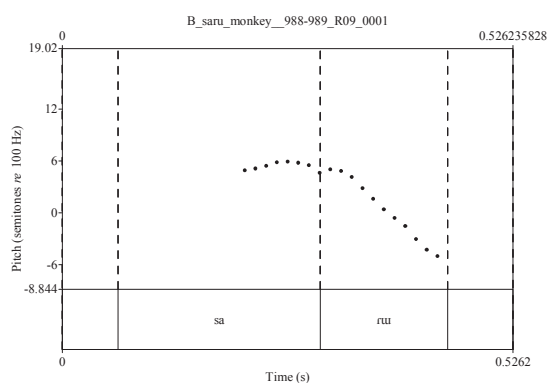


図 3-30. サ]ル「猿」

3 音節語以上の比較的長い語、あるいは後述する文節では、頭音節から末音節にかけてのピッチ上昇が観察される。このピッチ上昇は A 型同様、いくつか上昇の仕方にヴァリエーションがあり、大きく「早上がり」パターン：語頭・文節頭 1 音節目から 2 音節目でピッチ上昇した後末音節まで高平に平進するパターン、「遅上がり」パターン：語頭・文節頭から末音節まで連続的にピッチが上昇していくパターン、の二つに分けることができる。後者の「遅上がり」パターンについては、語頭・文節頭からの連続的なピッチ上昇を A 型同様「<」で表記することを試みる。

また、2 音節語同様、3 音節以上の長い語でも末音節が狭母音で終わる場合に、末音節での多少のピッチ下降が観察される（ミミ]ズ「蚯蚓」、タマゴヤ]キ「卵焼き」、ハナラ]ビ「歯並び」）。この場合でも、助詞が接続すると○[○…○▽という音調になり、A 型とは中和しない。

・「早上がり」パターン

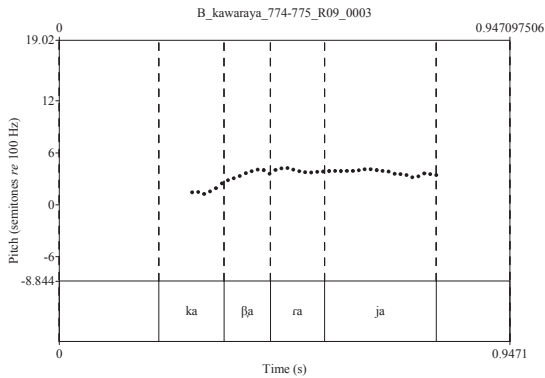


図 3-31. カ[ワラヤ「瓦屋」

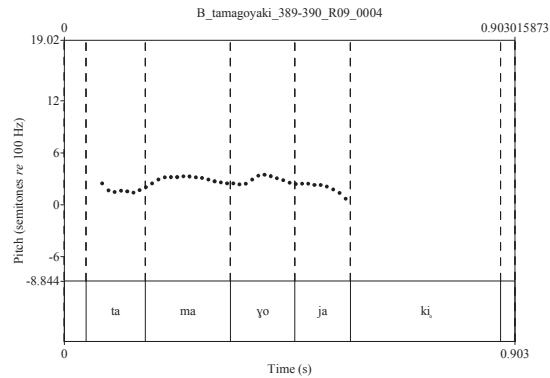


図 3-32. タ[マゴヤキ「卵焼き」

・「遅上がり」パターン

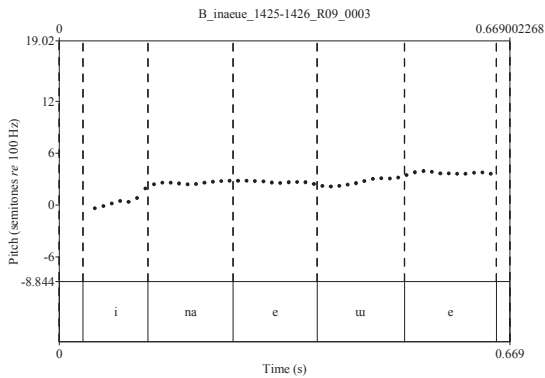


図 3-33. <イナエウエ「蘭苗植え」

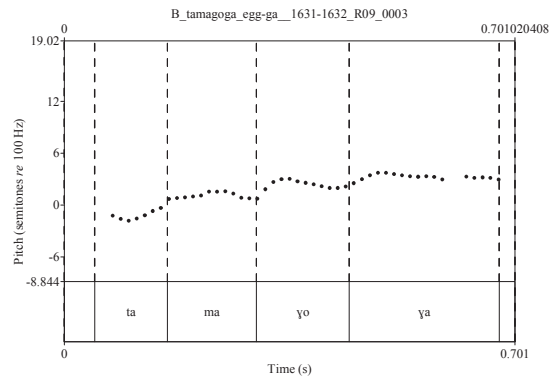


図 3-34. <タマゴガ「卵が」

以上、B 型名詞単独形を中心に B 型の音声特徴を記述した。次に、B 型名詞に付属語が接続する場合について詳しく見てみたい。主格のガや対格のバ、主格・属格のノ、方向格などのニ、といった 1 音節付属語、あるいはカラやマデといった 2 音節付属語、副助詞のバカリ（バツカリ、バカイ、バツカッ）が接続すると、ピッチの上昇は**文節**の頭音節から末音節までの範囲で実現する。これら B 型文節の実際の音声実現は、同じ音節数の語のそれと同様で、いくつかのピッチ上昇のヴァリエーション（早上がり、遅上がり）が観察される。

(3) 旧八代市方言 B 型付属語接続形

- [[エ「絵」：エ[ガ「絵が」、<エーバツカッ「絵ばかり」
- ア[メ「雨」：<アメガ「雨が」、<アメマデ「雨まで」
- イ[ケ「池」：<イケニ「池に」、<イケカラ「池から」
- <オトコ「男」：<オトコガ「男が」、<オトコカラ「男から」
- ミ[ミ]ズ～<ミミズ「蚯蚓」：<ミミズバ「蚯蚓を」、<ミミズバカイ「蚯蚓ばかり」

3.2.2 文節境界のピッチ下降

以上見たように、旧八代市方言の B 型は語あるいは文節内部において、急激なピッチ下降を伴わず、頭音節から末音節にかけてピッチ上昇が見られる。しかし、当該文節に後続の文節が連続する環境（連文節環境）では、文節境界付近においてピッチ下降が現れうる。このピッチ下降は、先行文節の末音節内部あるいは文節境界で開始し、後続文節の頭音節まで続く。従って、後続する文節は先行の文節よりも低いピッチで始まり、A 型 B 型の語頭・文節頭に見られるピッチ上昇も低く抑えられ、ほぼ平坦に実現する。

- ・ B 型文節境界下降：先行文節末音節内部で下降開始する例（右図 3-36）

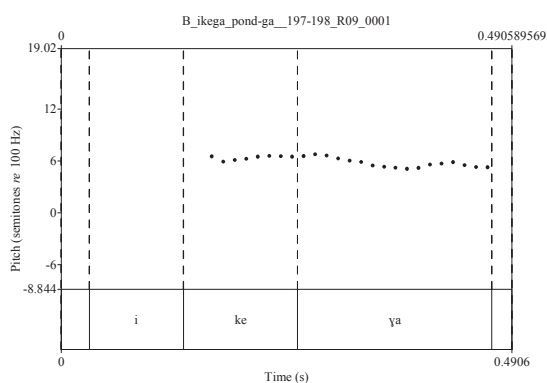


図 3-35. イ[ケガ「池が」

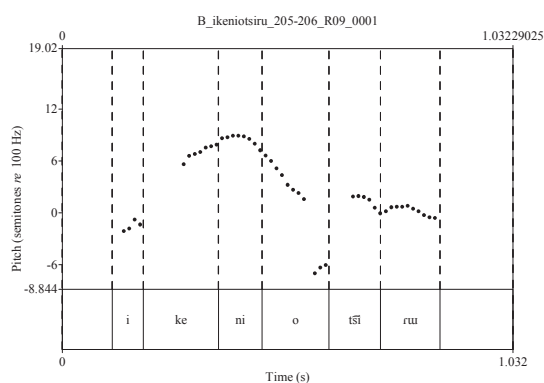


図 3-36. <イケニ|オチル「池に落ちる」

- ・ B 型文節境界下降：文節境界で下降開始する例（右図 3-38）

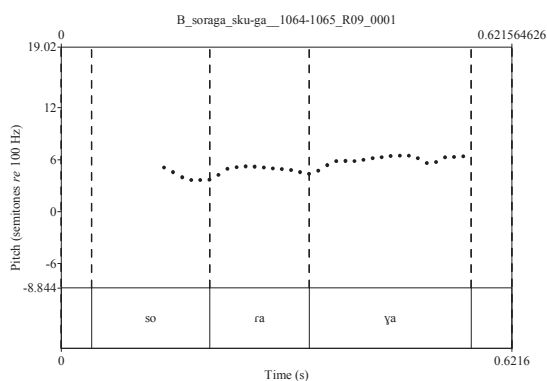


図 3-37. <ソラガ「空が」

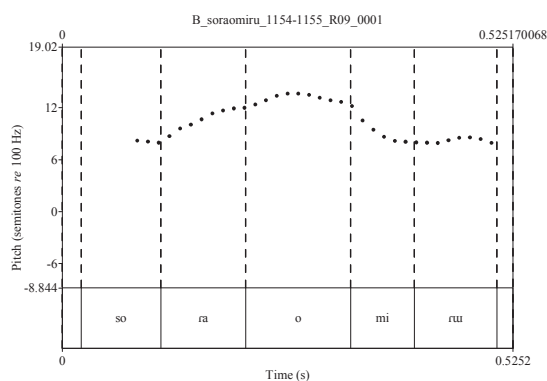


図 3-38. <ソラオ|ミル「空を見る」

以上で見た旧八代市方言 B 型の音声特徴は以下のようにまとめられる。

- ・ 旧八代市方言 B 型の音声特徴

語・文節の頭音節から末音節にかけてピッチ上昇（「早上がり」「遅上がり」）を伴い、後

続する文節がある場合は文節境界付近でピッチが下降する。1音節語では上昇調になる。

3.3 旧八代市方言アクセントの解釈

3.3.1 文節性

以上示したように、旧八代市方言は二つの型が対立する明瞭な二型アクセント体系である。この二つの型が付与されるアクセント上のドメイン（アクセント単位）は、先に示した(1)(3)のアクセントデータから**文節**であり、すなわち上野(1984, 2012)が言うところの「N型アクセントの一般特性」の内の「文節性」を有するといえる。同時に、「p拍の自立語（名詞）にq拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の(p+q)拍名詞の音調型と同じになる(Np+Pq=Np+q)」(上野 2012, p.48)が成立している(ト]ガ「戸が」= カ]ワ「川」、カ]ワ]ニ「川に」= ム]ス]メ「娘」、エ]ガ「絵が」= ア]メ「雨」、<ア]メ]マ]デ「雨まで」= <カ]ワ]ラ]ヤ「瓦屋」)ことから、同じくN型アクセントの一般特性の一つである「系列化」も成立しているといえる。

(1) 旧八代市方言 A 型付属語接続形

- トー]]「戸」: ト]ガ「戸が」、ト[カ]ラ～ト[カイ]]「戸から」
- カー]]「蚊」: カ]ガ「蚊が」、カ[マ]デ「蚊まで」、[[カー]バ]ッカ]リ「蚊ばかり」
- カ]ワ「川」: カ]ワ]ニ「飴に」、カ]ワ]マ]デ「川まで」
- イ]ワ「岩」: イ]ワ]バ「岩を」、イ]ワ]バ]カ]リ「岩ばかり」
- オン]ナ「女」: オン]ナ]ガ「女が」、オン]ナ]カ]ラ「女から」、オン]ナ]マ]デ「女まで」

(3) 旧八代市方言 B 型付属語接続形

- [[エ「絵」: エ]ガ「絵が」、<エー]バ]ッカ]ッ「絵ばかり」
- ア]メ「雨」: <ア]メ]ガ「雨が」、<ア]メ]マ]デ「雨まで」
- イ]ケ「池」: <イ]ケ]ニ「池に」、<イ]ケ]カ]ラ「池から」
- <オ]ト]コ「男」: <オ]ト]コ]ガ「男が」、<オ]ト]コ]カ]ラ「男から」
- ミ]ミ]ズ～<ミ]ミ]ズ「蚯蚓」: <ミ]ミ]ズ]バ「蚯蚓を」、<ミ]ミ]ズ]バ]カ]イ「蚯蚓ばかり」

3.3.2 トーンを担う単位

旧八代市方言のA型は、次末音節から末音節にかけてピッチの下降を有する。単音節(CV)が連続する語(飴、岩、畳、毛抜き、歯並び etc.)ではこれをモーラに言い換えて、「次末モーラから末モーラにかけてピッチ下降」としても説明できる。しかし、先に見たように、重音節(CVC)で終わるA型の場合、次末音節から末音節にかけて下降するように知覚されるもの(レッ]スン、[[ブー]メ]ラン)と、末音節(重音節)内で下降するように知覚

されるもの（レッシン}}）とでゆれがあった。後者（レッシン}}）はモーラ解釈でも説明できるが（レッシン）、前者はモーラで数えると次々末モーラから次末モーラで下降することになり、例外となる。一方、音節で解釈した場合、ア]ネ～ア[ネ]]「姉」などの単音節での下降の遅れの事実と合わせて、「次末音節あるいは末音節で下降する」ということでまとめて説明できる。B型のピッチ上昇、あるいはA型のピッチ上昇の音声特徴も音節で解釈して問題はない（頭音節が重音節の場合、頭音節全体が上昇調になる）。

以上より、旧八代市方言のトーンを担う単位は**音節**であるといえる。

3.3.3 旧八代市方言のトーン

以上の分析をまとめて、旧八代市方言の二型アクセントの解釈を示す。旧八代方言において基底で指定されているのは次の二つのトーンであると考えられる。}”はアクセント単位末に設定される下降境界特徴、また、L・H は連続的なピッチ上昇、+は音節数が増えるに従って直前の声調が伸びる（自律分節音韻論にいう「声調拡散」）ことを表す（児玉 2014）。

(4) A型 : LHL / B型 : LH}

※早上がり A型 : LH+L / B型 : LH+} ～ 遅上がり A型 : L-HL / B型 : L-H}

A型B型両方に共通して見られるアクセント単位頭からアクセント単位末尾部にかけてのピッチ上昇のヴァリエーションは、LH という声調配列の配分の差によって表すことができる。つまり、アクセント単位頭の音節（1音節目～2音節目付近）にLHが配分され、その後HがLもしくは}の直前まで拡散（spread）したものが「早上がり」パターンとして実現し、対して、Hがアクセント単位末尾部に配分されたものが多音節に渡って連続的に上昇する「遅上がり」パターンとなる。「早上がり」パターンにおいて、アクセント単位がCVCV（軽音節 + 軽音節）で始まるならば段階的な上昇調（○[○…）として、頭音節が重音節であればその音節の上昇調（[[パンフレット「パンフレット」、[[ランドセル「ランドセル」etc.）として実現する。

A型1音節語やA型で「頭高型」に知覚されるタイプの頭音節始端に見られる短いピッチ上昇は、このLHが圧縮して実現したものだと捉える。A型アクセント単位末に見られる下降開始位置のヴァリエーション（ア]ネ～ア[ネ]]「姉」、イ]ワシ「鯛」～タ[タ]]ミ「畳」～キ[モ]ノ「着物」）は、HLという声調配列の配分の差で示される。ア]ネ～ア[ネ]]「姉」を例にとると、HLが各音節にそれぞれ配分された場合が前者であり、HLが末音節にまとめて配分された場合が後者であると考えられる。

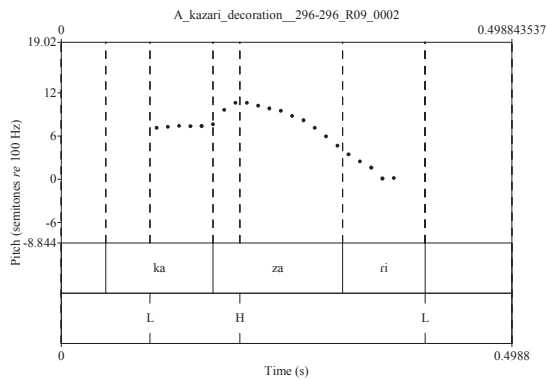


図 3-39. カ[ザ]リ「飾り」

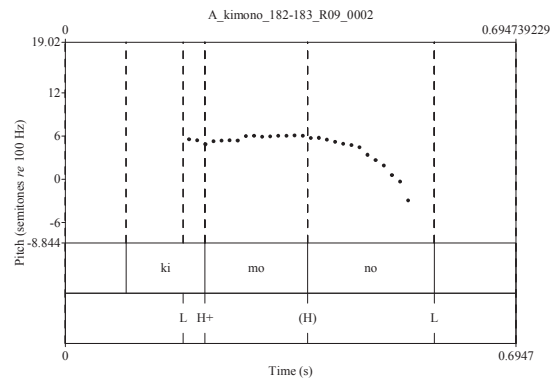


図 3-40. キ[モ]ノ「着物」

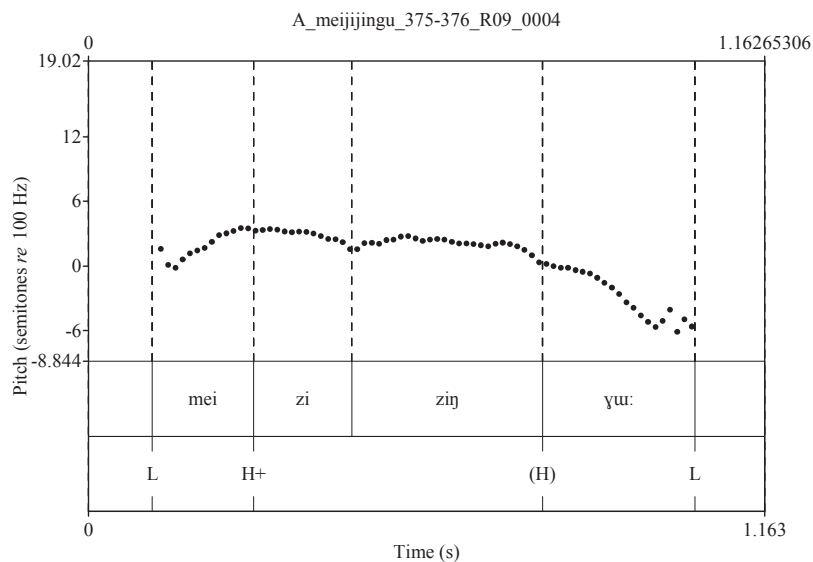


図 3-41. [[メイジジン]グー「明治神宮」

B 型のアクセント単位頭から末尾までのピッチ上昇については先に述べた通りで、B 型アクセント単位には境界部に下降境界特徴 “}” がある。これは後続する文節があれば、文節境界でのピッチ下降として実現する。B 型文節境界のピッチ下降に見られるいくつかの実現形、つまり先行文節末音節内部で下降開始する例と文節境界で開始する例というのは、「実現する位置が必ずしも固定せず、アクセント核とはみなしがたい」（児玉 2014）という境界特徴の性質によるもので、境界特徴がやや早まって実現したものが前者、境界部で実現したものが後者である、と考える。

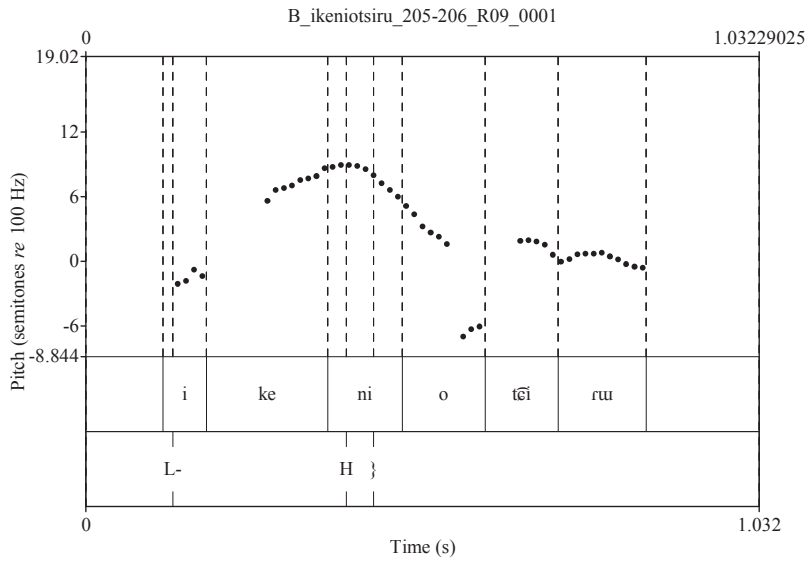


図 3-42. <イケニ|オチル「池に落ちる」

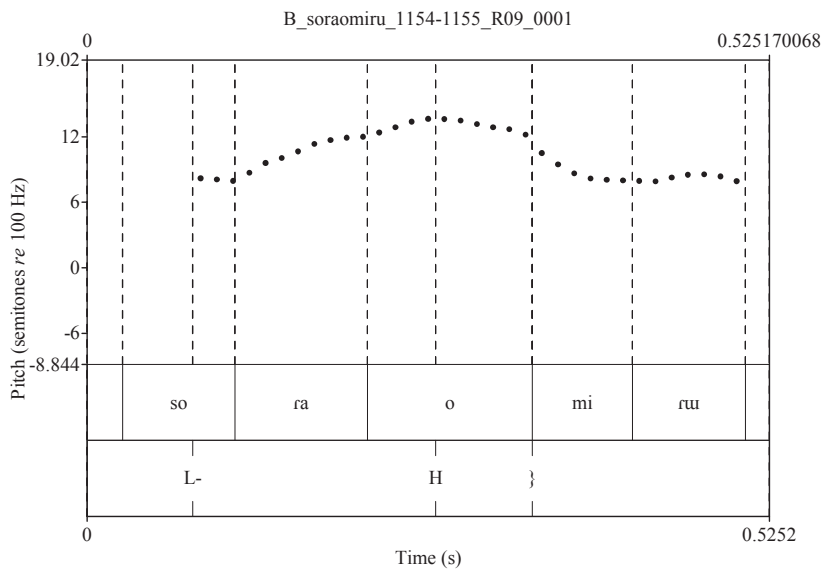


図 3-43. <ソラオ|ミル「空を見る」

以上が、旧八代市方言アクセントの解釈である。

4. 八代市坂本町上深水方言の分析

本章では、八代市坂本町上深水方言のアクセントの特徴を記述していく。坂本町は秋山・吉岡（1991）によって二型アクセントの一型化が見られる地域として挙げられていたが、筆者の調査の結果、上深水方言は二つのアクセント型の対立を持つ明瞭な二型アクセント体系であった。以下では、まずA型、次いでB型の音声的特徴を記述したのち、それらをもとに上深水方言アクセントの解釈を行う。

4.1 A 型の音声実現の記述

4.1.1 語末・文節末のピッチ下降

A 型の 1 音節語は、音節全体でピッチが下降し、後述の B 型 1 音節語の上昇調・平調と対立する。また、平山（1951）の「葦北音調」にも同様の記述があるように、A 型 1 音節語では、母音の延伸が見られる（カー〕「蚊」、[[ナー〕「名」など）。

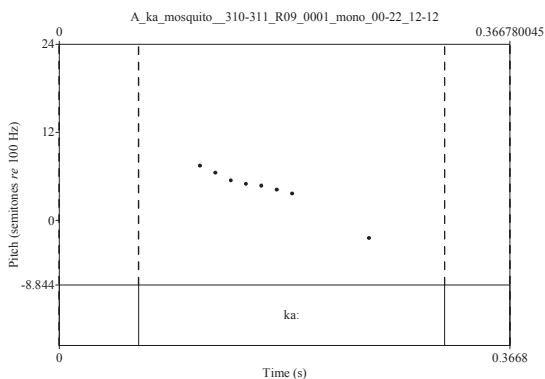


図 4-1. カー〕「蚊」

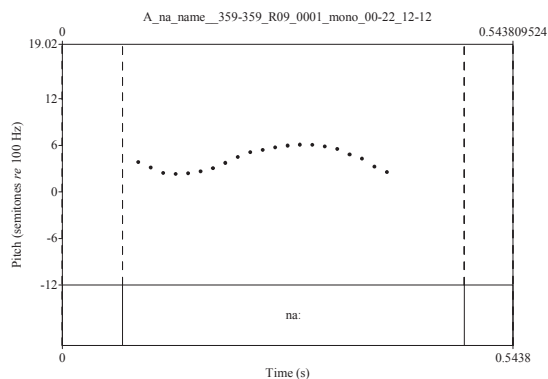


図 4-2. [[ナー〕「名」

2 音節語では、ピッチの下降開始位置について、聴覚的には○〕○と○○〕で知覚されるようなゆれが聞かれる。音声波形では、前者は 1 音節目内部あるいは音節境界に下降があり、後者は 2 音節目内部に下降がある。これら下降開始位置の違いは弁別的なものではなく、自由変異的なものである。また、末音節の母音が無声化した場合はピッチ下降は頭音節内で実現し（○〕○）、逆に頭音節が母音の無声化を起こした場合は末音節にピッチ下降が現れる。

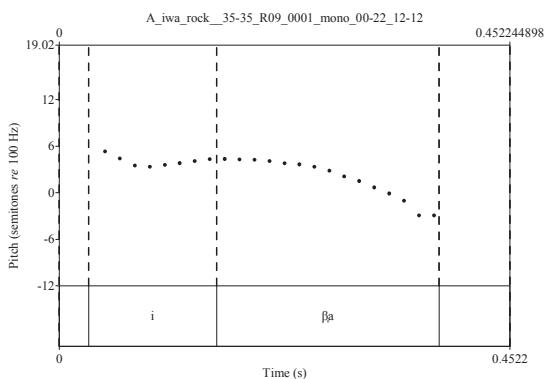


図 4-3. イ〕ワ「岩」

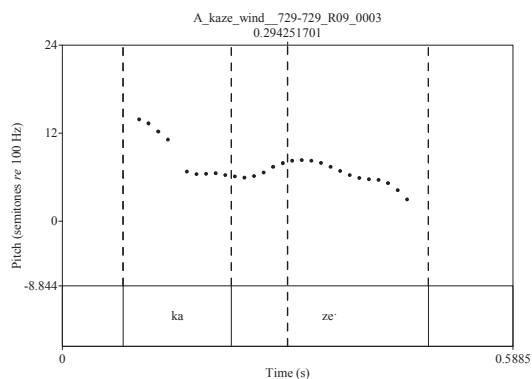


図 4-4. カ〔ゼ〕〕「風」

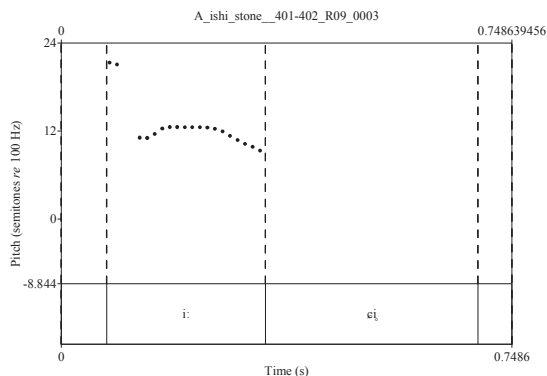


図 4-5. [[イー]シ]「石」

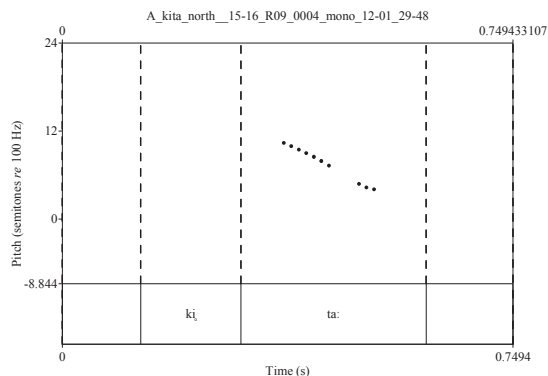


図 4-6. キタ]「北」

語の長さが 3 音節以上になると、ピッチ下降の位置は語の末尾、つまり次末音節あるいは末音節で実現する。2 音節語同様、下降開始位置は必ずしも固定しておらず、いくつかのヴァリエーションが確認できる。1. 次末音節の冒頭から下降が始まり、聴覚的には〇]〇〇として知覚されるもの、2. 次末音節の内部から末音節にかけて下降し、聴覚的には〇]〇〇として知覚されるもの、などがある。これら下降開始位置の差は弁別的なものではなく、自由変異的な特徴である。(タ]タミ~タ[タ]ミ「畳」)。ただし、「畳」の他、「鯛」や「東」「毛抜き」「鮑」など、〇]〇〇となる語は末音節の母音が /i/ であることが多い。

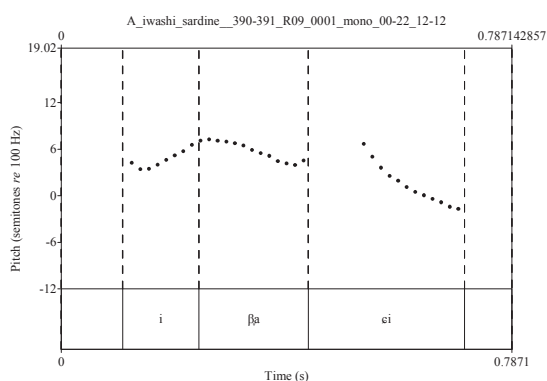


図 4-7. イ]ワシ「鯛」

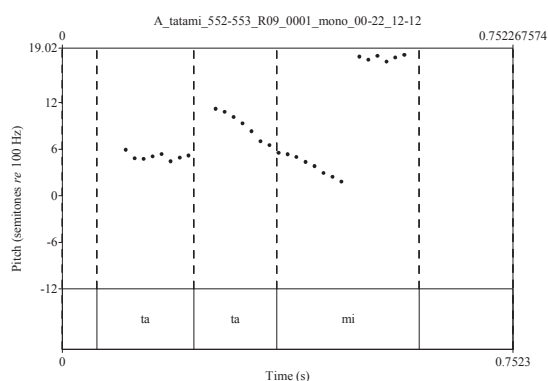


図 4-8. タ[タ]ミ「畳」

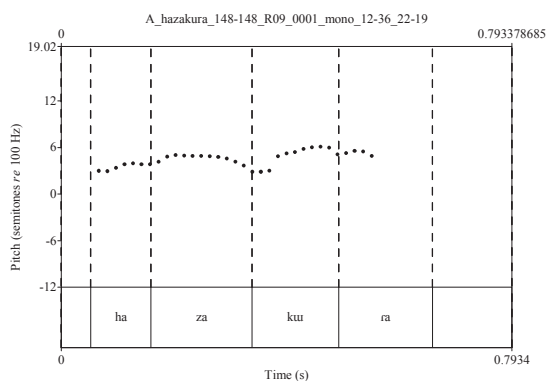


図 4-9. ハ[ザ]ク]ラ「葉桜」

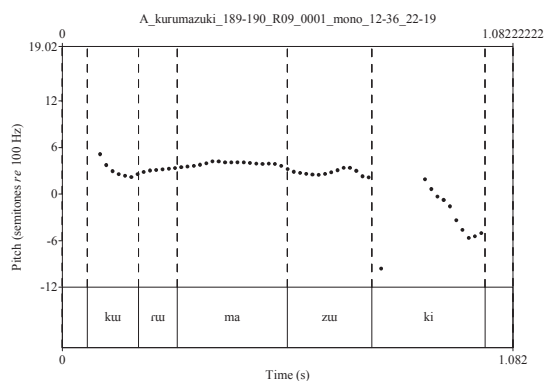


図 4-10. ク[ルマズ]キ「車好き」

次に、A型名詞に付属語が接続する場合について。(1)に示すように、主格のガや対格のバ、主格・属格のノ、方向格などのニ、といった1音節付属語、あるいはカラやマデといった2音節付属語が接続すると、ピッチの下降は**文節**の次末音節から末音節にかけて生じる。この場合も単独形と同様、下降開始位置は固定しておらず、自由変異的なゆれが見られる。

一方で、副助詞のバツカリは「蚊ばかり」「岩ばかり」の例のように、語にピッチ下降が現れ、さらにバツカリでも独立してピッチの上昇や下降が生じる。これは後述するように、1音節付属語やカラ・マデといった2音節付属語は固有のアクセントを持っておらず（従属式の付属語）、直前の語を含む文節がアクセント単位となっているのに対して、バツカリは固有のアクセント（A型）を持っており（独立式の付属語）、直前の語と独立してアクセント単位を成すことを示している。

(1) 上深水方言 A型付属語接続形

トー]]「戸」：ト]ガ「戸が」、ト[カ]ラ「戸から」

カー]]「蚊」：カ]ガ「蚊が」、カ[マ]デ「蚊まで」、カー]] バツ[カ]リ「蚊ばかり」

ア]メ「飴」：ア[メ]バ「飴を」、アメ[マ]デ「飴まで」

イ]ワ「岩」：イ[ワ]ガ「岩が」、イ]ワ バツ[カ]リ「岩ばかり」

オン]ナ「女」：オンナ]ガ「女が」、オンナカ]ラ「女から」

更に、重音節（CVV、CVC）を含むA型名詞・文節のピッチ下降の実現について見てみたい。アクセント単位が重音節で終わる場合、A型では、a.末音節内での下降、b.次末音節と末音節の間での下降、の2パターンがある。

(2) アクセント単位末に重音節を持つA型

a. 末音節内でピッチ下降

シュー[セン]]「終戦」、ヤ[ブン]]「藪の」、ショク[リン]]「植林」、

ズトン]]「人の」、ダイ[ジャン]]「大蛇の」

b. 次末音節と末音節の間でピッチ下降

キ]モン「着物」、ヤブ[ク]ラン「藪の」、ウ]エン「上の」、フン[ナ]モン「古物」

4.1.2 語頭・文節頭からのピッチ上昇

A型では、語末・文節末のピッチ下降に先立ってピッチ上昇が聞かれる。

A型1音節語は音節内下降として実現することは先に見た通りだが、このピッチ下降に先立って短いピッチ上昇が生じることがある(図4-2. [[ナー]]「名」 vs. 図4-1. カー]]「蚊」)。

A型の2音節語、3音節語、あるいは同じ音節数のA型文節にはピッチ下降位置に関していくつかのヴァリエーションがある(○]○~○○]], ○]○○~○○]○~○○○]])が、語頭・文節頭からピッチ下降開始の直前までにピッチ上昇を伴う点では共通している。

○]○や○]○○など、1音節目の直後でピッチが下がるように聞こえるいわゆる「頭高型」のようなパターンでも、頭音節内にピッチの上昇が生じていることが音声波形により確認できる。

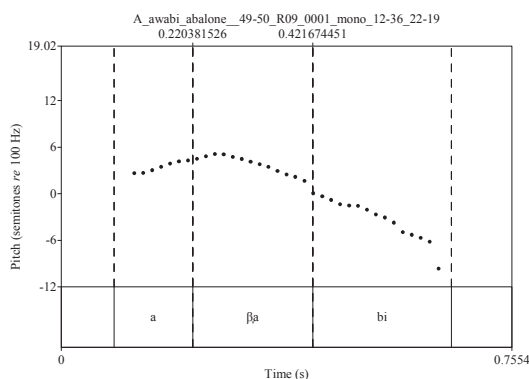


図4-11. ア]ワビ「鮑」

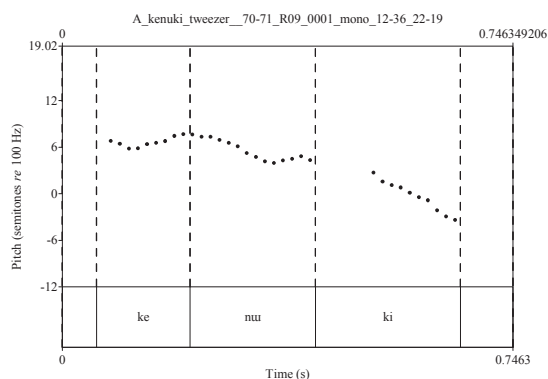


図4-12. ケ]ヌキ「毛抜き」

また、撥音や促音などを含む重音節に始まる語では、頭音節全体で上昇調が実現する([[オン]ナ「女」、[[ミツ]ツ「三つ」、[[ムツ]ツ「六つ」)。[[ムツ]ツ「六つ」のように、末音節の母音が無声化を起こしたときは、頭音節内でピッチの上昇下降が実現する。

4音節以上の語あるいは文節では、下降の位置が後ろにずれていく(語頭・文節頭から語末・文節末の距離が長くなる)ため、それに応じてピッチ上昇の区間が長くなるが、この時のピッチ上昇のパターンあるいはピッチのピーク位置は一樣ではなく、いくつかヴァリエーションが認められる。つまり、1) 語頭・文節頭1音節目から2音節目でピッチ上昇した後下降位置まで平進するパターン(早上がり、ピッチのピークは語頭・文節頭)、2) 語頭・文節頭からピッチ下降開始位置まで連続的にピッチが上昇していくパターン(遅上がり、ピッチのピーク位置は語末・文節末)、3) 目立ったピッチ上昇もなく語末・文節末

まで平進するパターン。「遅上がり」パターンには、語頭・文節頭から漸次的にピッチ上昇したのち、次末音節でさらにピッチが卓立上昇するパターンも見られ、特に自然談話ではよく観察される。

試みに、次末音節で生じるピッチの卓立上昇とそれに先立つ（どの音節で上昇しているのかなど）上昇位置が決められない多音節に渡るピッチ上昇とを区別して、以下のように表記を行ってみる。この表記は、後者の上昇位置が一意に決めがたいことへの対処と、表記の煩雑さの軽減を意図している。

(3) 次末音節での卓立ピッチ上昇：[、語頭・文節頭からの漸次的なピッチ上昇：<

ex.) $\overset{\wedge}{\text{ハ}}[\underset{\wedge}{\text{ザ}}[\underset{\wedge}{\text{ク}}]\text{ラ}$ → <ハザ[ク]ラ「葉桜」、 $\overset{\wedge}{\text{カ}}[\underset{\wedge}{\text{ゴ}}[\underset{\wedge}{\text{シ}}[\underset{\wedge}{\text{マ}}]]\text{ケン}$ → <カゴシ[マ]ケン
「鹿児島県」

・「早上がり」パターン

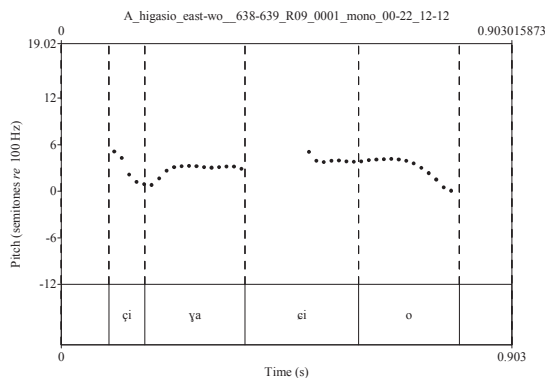


図 4-13. ヒ[ガシ]オ「東を」

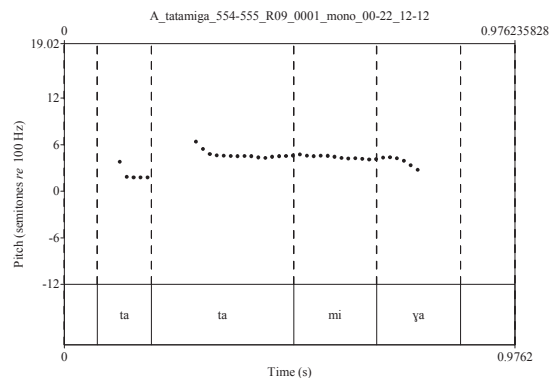


図 4-14. タ[タミ]ガ「畳が」

・「遅上がり」パターン

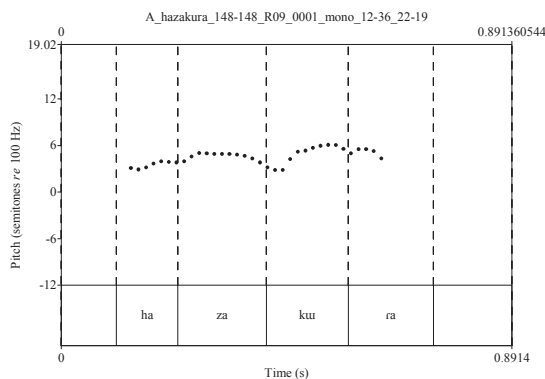


図 4-15. <ハザ[ク]ラ「葉桜」

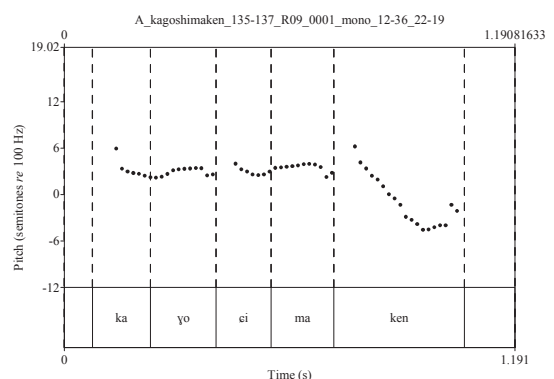


図 4-16. <カゴシ[マ]ケン「鹿児島県」

以上より、A型の音声実現の特徴をまとめると次のようになる。

・上深水方言のA型の音声特徴

語頭・文節頭からのピッチ上昇（「早上がり」「遅上がり」etc.）の後、次末音節から末音節にかけてピッチが下降する。ピッチ上昇については、下降開始の直前の音節で卓立上昇が現れうる。

4.2 B型の音声実現の記述

4.2.1 語頭・文節頭からのピッチ上昇

B型1音節語は、音節内上昇調あるいは平調として実現し、先述のピッチ下降を伴うA型1音節語と対立する。

・B型1音節語 上昇調

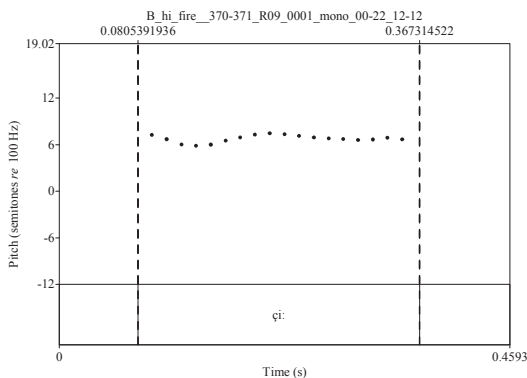


図 4-17. [[ヒー「火」

・B型1音節語 平調

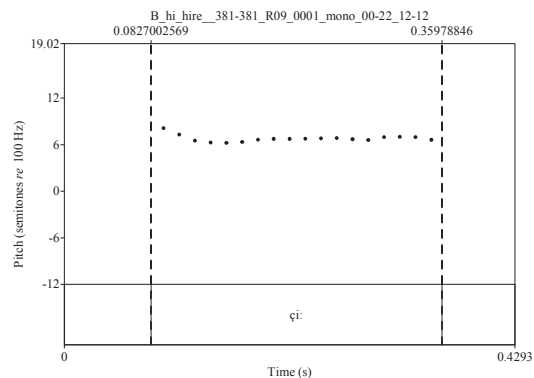


図 4-18. ヒー「火」

2音節語では、1音節目から2音節目にかけてピッチ上昇が見られる。[[マツ「松」のように末音節の母音が無声化する場合には、頭音節内でピッチの上昇が実現する。

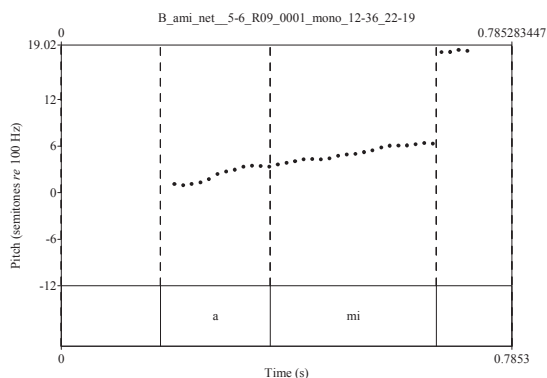


図 4-19. ア[ミ「網」

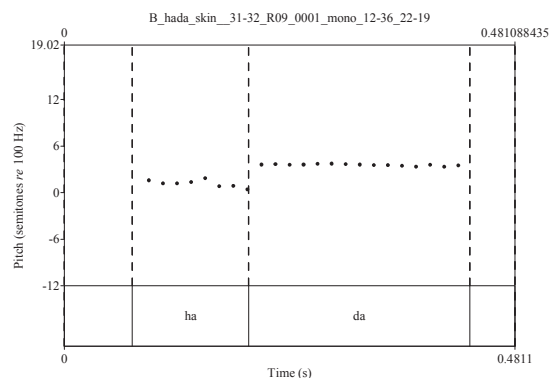


図 4-20. ハ[ダ「肌」

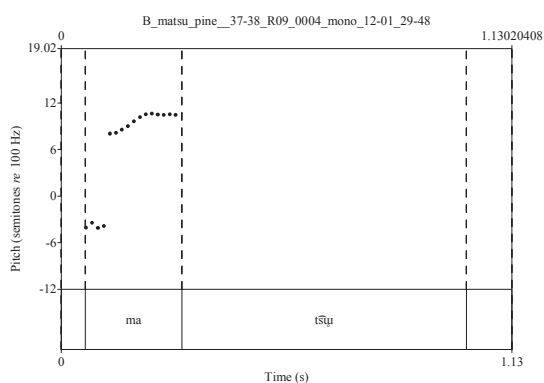


図 4-21. [[マツ「松」

3 音節以上の語あるいは文節では、全体の音節数が長くなるにしたがってピッチが上昇しうる区間（頭音節から末音節）も長くなるが、このときに A 型の長い語・文節と同様に上昇のパターンにいくつかのヴァリエーションが観察される。つまり、「早上がり」「遅上がり」「平進」などである。特に自然談話においては、鹿児島方言の B 型（○○○…○[○、アクセント単位頭から低平に続いた後、末音節でピッチが卓立上昇）のような、末音節でピッチが卓立するように知覚される「遅上がり」パターンが特徴的に聞かれる。鹿児島方言の卓立上昇と異なるのは、末音節の卓立の前にも漸次的な上昇を伴っていて低平ではない点である。ここで、A 型同様、末音節での卓立的なピッチ上昇とそれに先立つ連続的な多音節に渡るピッチ上昇とを区別して、前者を「[」、後者を「<」とする表記を導入することとする。

- (4) 末音節での卓立ピッチ上昇：[、語頭・文節頭からの漸次的なピッチ上昇：<
 ex.) カ[ガ[ミ → <カガ[ミ「鏡」、ム[ギ[ゴ[ハン → <ムギゴ[ハン「麦ご飯」

・「遅上がり（卓立）」パターン

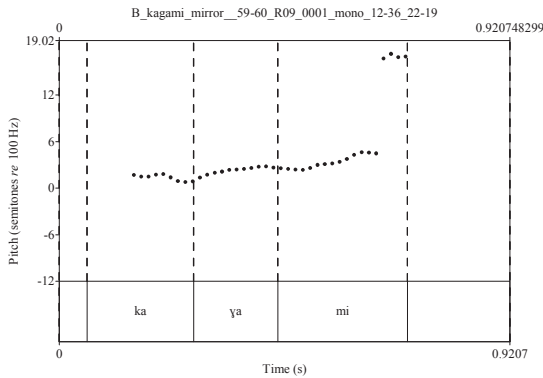


図 4-22. <カガ[ミ「鏡」

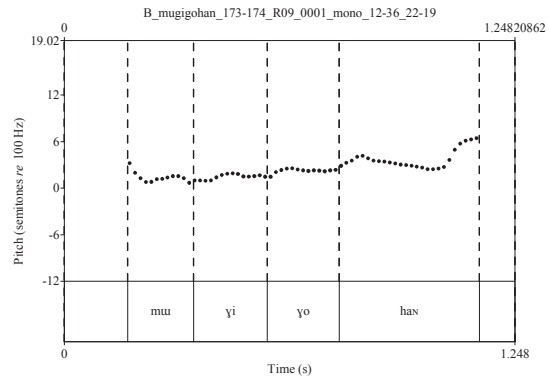


図 4-23. <ムギゴ[ハン「麦ご飯」

・「早上がり」パターン

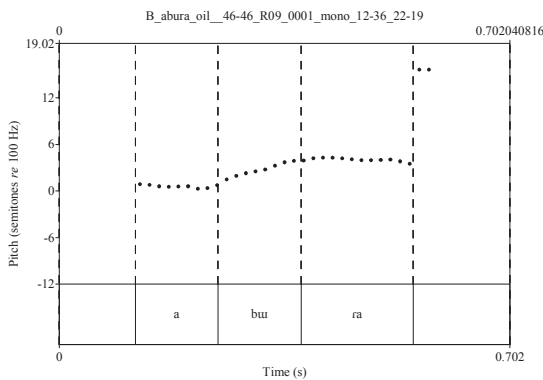


図 4-24. ア[ブラ「油」

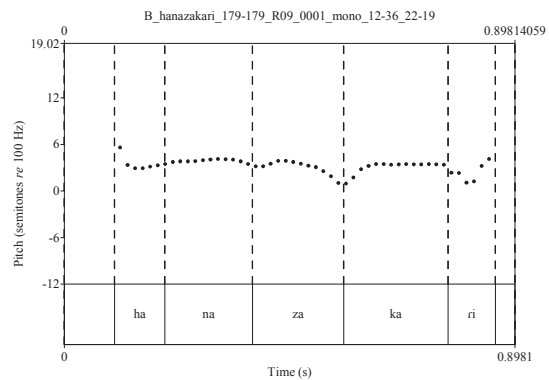


図 4-25. ハ[ナザカリ「花盛り」

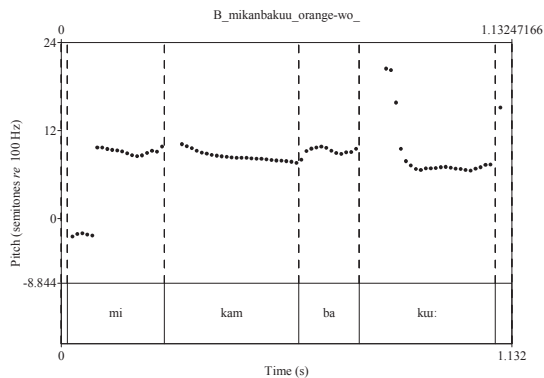
さらに上深水方言では、後述の付属語接続形を含む 3 音節以上の B 型の語・文節において、卓立上昇する末音節の直前でピッチの半下降が起き、いわゆる重起伏調（一つのアクセント単位内に、ピッチのピーク位置が二つ生じているような音調）のように知覚されることがある。ただし、この半下降は<○○…○[○で表されるような B 型上昇調の実現形の一つであり、弁別的な特徴ではない（ミ!カン[バ]|クー vs. <ミカン[バ]|クー「蜜柑を食べる」）

(5) 卓立音節直前の半下降 (!) の例

オ!ヤ[ガ]|キタ「親が来た」、カ!タ[ガ]|イタイ「肩が痛い」

ミ!カン[バ]|クー「蜜柑を食う」、ボン!ダ[ゴ「盆団子」、オテ!ラ[ノ「お寺の」

・半下降を伴う例



・半下降を伴わない例（漸次上昇）

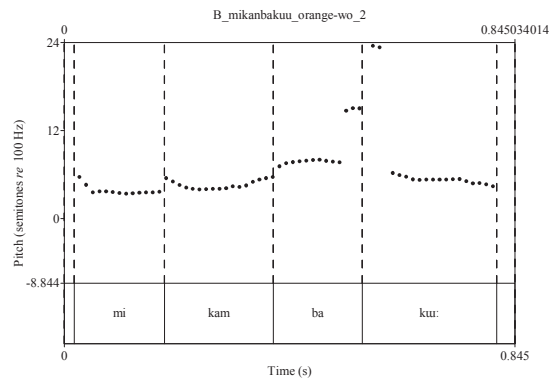


図 4-26. ミ!カン[バ] | クー「蜜柑を食べる」 図 4-27. <ミカン[バ] | クー「蜜柑を食べる」

以上、B 型名詞単独形を中心に記述したが、B 型名詞に付属語が接続する場合について詳しく見てみたい。主格のガや対格のバ、主格・属格のノ、方向格などのニ、といった 1 音節付属語、あるいはカラやマデといった 2 音節付属語が接続すると、ピッチの上昇は**文節**の末音節までの範囲で実現する。これら B 型文節の実際の音声実現は、同じ音節数の語のそれと同様で、いくつかのピッチ上昇のヴァリエーション（早上がり、遅上がり、卓立上昇、半下降など）が観察される。

(6) 上深水方言 B 型付属語接続形

[[ター「田」：タ[ガ「田が」、<タカ[ラ「田から」

ア[メ「雨」：<アメ[ガ「雨が」、<アママ[デ「雨まで」

マ[ド「窓」：<マド[バ「窓を」、<マドカ[ラ「窓から」

<スズ[メ「雀」：<スズメ[ガ「雀が」、<スズメマ[デ「雀まで」

<オト[コ「男」：<オトコ[ニ「男に」、<オトコ[カッ「男から」

※B 型の半下降

カ!タ[ガ ~ <カタ[ガ「肩が」、ミ!カン[ガ ~ <ミカン[ガ「蜜柑が」

4.2.2 文節境界のピッチ下降

上深水方言の B 型は語・文節内部において、上昇パターンの一変種たる（卓立の前の）「半下降」を除いて、急激なピッチ下降を伴わず、頭音節から末音節にかけてピッチ上昇が見られることは以上で示した。しかし、当該文節に後続の文節が連続する場合には、文

節境界付近においてピッチ下降が現れうる。このピッチ下降は、先行文節の末音節終端あるいは文節境界で開始し、後続文節の頭音節まで続く。そのため、後続する文節は先行の文節よりも低いピッチで始まり、A型B型の語頭・文節頭に見られるピッチ上昇は低く抑えられ、ほぼ平坦に実現する。

・ B型文節境界下降：先行文節末音節内部で下降開始する例（図 4-29）

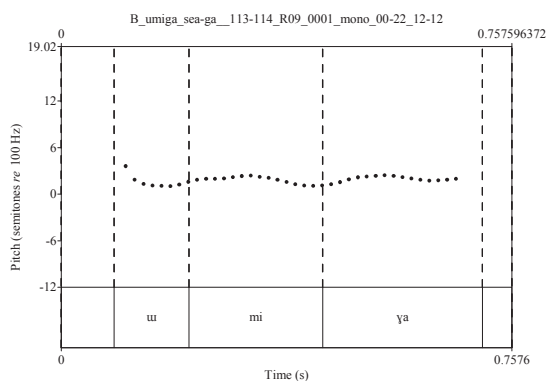


図 4-28. ウ[ミガ「海が」

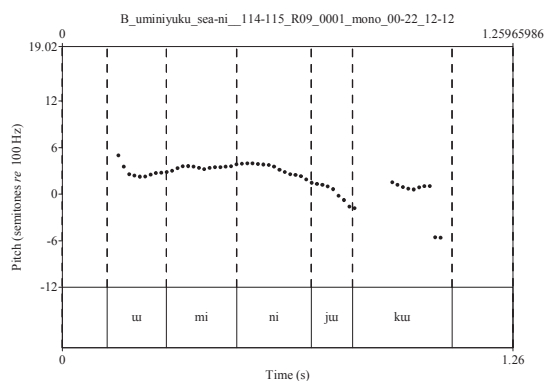


図 4-29. ウ[ミニ]|ユク「海に行く」

・ B型文節境界下降：文節境界で下降開始する例（図 4-31）

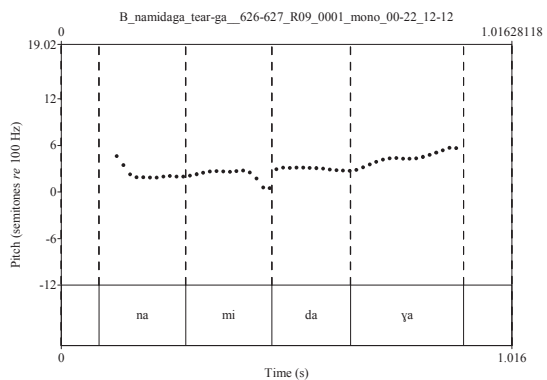


図 4-30. <ナミダ[ガ「涙が」

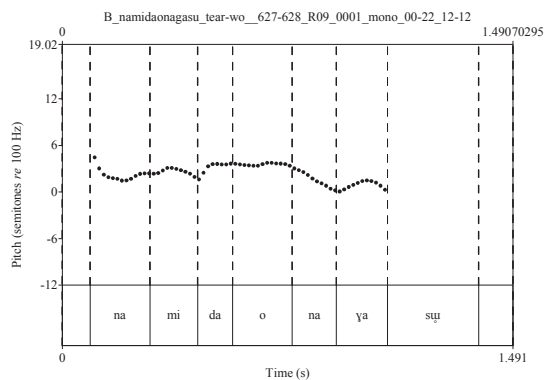


図 4-31. <ナミダ[オ]|ナガス

以上示した上深水方言の B 型の音声特徴をまとめると次のようになる。

・ 上深水方言の B 型の音声特徴

語・文節の頭音節から末音節にかけてピッチ上昇（「早上がり」「遅上がり」）を伴い、後続する文節がある場合は文節境界付近でピッチが下降する。ピッチ上昇については、末音節でさらに卓立上昇を伴うこと、卓立上昇の前にピッチの半下降が生じることがある。1

音節語では上昇調あるいは平調として実現する。

4.3 上深水方言アクセントの解釈

4.3.1 文節性

以上示したように、上深水方言は二つの型が対立する明瞭な二型アクセント体系であり、九州方言研究会（1969）あるいは秋山・吉岡（1991）が指摘するような「一型化」は認められなかった。(1) (6) で示したように、単独形で見られる A 型 B 型それぞれの特徴が文節全体に同様に現れていることから、上深水方言において二つの音調型が付与されるアクセント上のドメイン（アクセント単位）は**文節**であり、従って、上野（1984, 2012）が言うところの「N 型アクセントの一般特性」の内の「文節性」を有する。同時に、「p 拍の自立語（名詞）に q 拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の (p+q) 拍名詞の音調型と同じになる (Np+Pq=Np+q)」（上野 2012, p.48）が成立している（カ]ガ「蚊が」 = ア]メ「飴」、ア[メ]バ「飴を」 = ム[ス]メ「娘」、<ムスメ[マ]デ = <カゴシ[マ]ケン「鹿児島」、キ[ガ]「木が」 = ア[メ]「雨」、<アメマ[デ]「雨まで」 = <ムギゴ[ハン]「麦ごはん」）ことから、同じく N 型アクセントの一般特性の一つである「系列化」が成立するといえる。

(1) 上深水方言 A 型付属語接続形

トー]] 「戸」：ト]ガ「戸が」、ト[カ]ラ「戸から」
カー]] 「蚊」：カ]ガ「蚊が」、カ[マ]デ「蚊まで」、カー]] バッ[カ]リ「蚊ばかり」
ア]メ「飴」：ア[メ]バ「飴を」、アメ[マ]デ「飴まで」
イ]ワ「岩」：イ[ワ]ガ「岩が」、イ]ワ バッ[カ]リ「岩ばかり」
オン]ナ「女」：オンナ]ガ「女が」、オンナカ]ラ「女から」

(6) 上深水方言 B 型付属語接続形

[[ター「田」：タ[ガ]「田が」、<タカ[ラ]「田から」
ア[メ]「雨」：<アメ[ガ]「雨が」、<アメマ[デ]「雨まで」
マ[ド]「窓」：<マド[バ]「窓を」、<マドカ[ラ]「窓から」
<スズ[メ]「雀」：<スズメ[ガ]「雀が」、<スズメマ[デ]「雀まで」
<オト[コ]「男」：<オトコ[ニ]「男に」、<オトコ[カ]ッ「男から」

4.3.2 トーンを担う単位

先に見たように、語あるいは文節が重音節 (CVC) で終わる場合、A 型では、末音節内での下降するように知覚されるもの (シュー[セン]「終戦」、ヤ[ブン]「藪の」と、次末音節と末音節の境界で下降するように知覚されるもの (キ)モン「着物」、ヤブ[ク]ラン「藪の」) の 2 パターンがあった。また、B 型では一貫して末音節全体が高く聞こえる (ミ[カン]「蜜柑」、<アタ[マン]「頭の」、<ジューゴヤ[サン]「十五夜さん」)。

さらに、アクセント単位の次末音節が重音節である場合、下降の前のピッチの卓立上昇は、次末音節頭から開始するものと次末音節内から開始の 2 パターンの両方が聞かれた (キョ[ネン]ノ～キョ[ネン]ノ「去年の」、カン[グン]ノ～カン[グン]ノ「官軍の」)。

以上のような事実をトーンを担う単位 (TBU) がモーラだとして解釈すると、軽音節 + 軽音節で終わる語を含めて上深水方言のアクセント現象を一般化して説明できない。TBU を音節と考えた場合、ヤブ[ク]ラン「藪の」と<ジューゴヤ[サン]「十五夜さん」、そして軽音節+軽音節で終わる場合については「A 型は次末音節から末音節にかけて下降、B 型は末音節で上昇あるいは平調に続く」と説明できる。ヤ[ブン]「藪の」は一見モーラカウント (次末モーラから末モーラ間で下降) のようにも解釈できる。ただ、上深水方言においては軽音節+軽音節で終わる場合でも下降位置が自由変異的に揺れること (ex. ア]メ～ア[メ]「飴」、ア[ネ]ガ～アネ[ガ]「姉が」) があることを考慮すると、ヤ[ブン]とキ]モンの違いは当該方言の A 型アクセント単位末におけるピッチ下降の実現のバリエーションととらえることができる。キョ[ネン]ノ～キョ[ネン]ノ「去年の」は、音節内部での上昇開始のバリエーションと解釈すれば音節でも説明がつく。

以上より、上深水方言の TBU は音節とするのが妥当だと考えられる。

4.3.3 上深水方言のトーン

以上の分析をまとめて、上深水方言の二型アクセントの解釈を示す。上深水方言において基底で指定されているのは次の二つのトーンであると考えられる。"}"はアクセント単位末に設定される下降境界特徴、また、L-H は連続的なピッチ上昇、+は音節数が増えるに従って直前の声調が伸びる (自律分節音韻論にいう「声調拡散」) ことを表す (児玉 2014)。

(7) A 型 : LHL / B 型 : LH}

※早上がり A 型 : LH+L / B 型 : LH+} (平調 A 型 : (L)H+L / B 型 : (L)H+}

遅上がり (卓立) A 型 : L-(M)HL / B 型 : L-(M)H}

A型B型両方に共通して見られるアクセント単位頭からアクセント単位末尾部にかけてのピッチ上昇のヴァリエーションは、LH という声調配列の配分の差によって表すことができる。つまり、アクセント単位頭の音節（1音節目～2音節目付近）にLHが配分され、その後Hがアクセント単位末まで拡散（spread）したものが「早上がり」パターンとして実現する。この最初のLの実現が弱かった場合、あるいは配分されなかった場合にはアクセント単位頭からHが続き、平調となる。対して、Hがアクセント単位末尾部に配分されたものが、多音節に渡って連続的に上昇する「遅上がり」パターンとなる。さらにこの「遅上がり」パターンの内、最初の上昇の度合がより緩やか（仮に”L-(M)”とする）であれば、二段階のピッチ上昇を有する卓立型の「遅上がり」パターンとなる。3音節以上のB型アクセント単位で観察される卓立の直前の半下降は、このMからHへの上昇をより明確にするためにHの直前が沈み込んだものと考えている¹²。いずれにせよ、この半下降はアクセント単位の末尾に卓立的なHがあることによって引き起こされるアクセント現象だと解釈する。

A型1音節語やA型で「頭高型」に知覚されるタイプの頭音節始端に見られる短いピッチ上昇は、このLHが圧縮して実現したものだと捉える。A型アクセント単位末に見られる〇|〇～〇[〇]]のような下降開始位置のヴァリエーションは、HLという声調配列の配分の差で示される。つまり、HLが各音節に配分された場合が前者であり、末音節内にHLが配分されたものが後者であると考えられる。

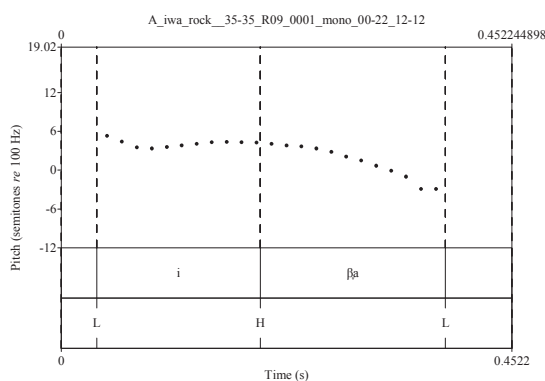


図 4-32. イ[ワ]「岩」

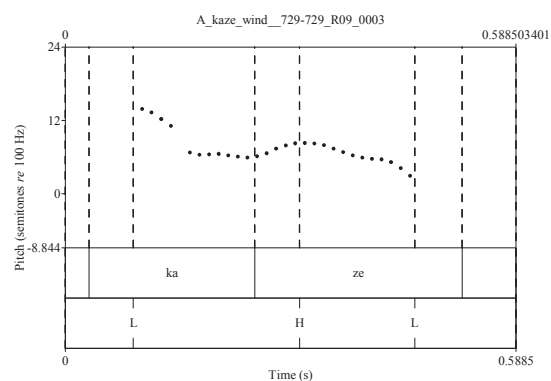


図 4-33. カ[ゼ]「風」

¹² 上野（2011）による川上（1965）の「語頭隆起」の説明の解説（「LLH>LLH>MLHではなく、LLH>MMH>MLHだというのである」（上野 2011, p.4）と同様のプロセスを想定している。

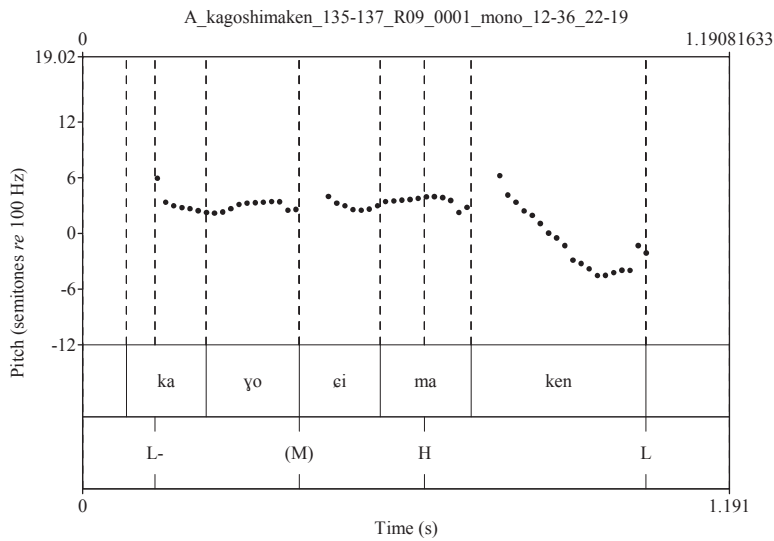


図 4-34. <カゴシ[マ]ケン「鹿児島県」

B 型のアクセント単位頭から末尾までのピッチ上昇については A 型と同様に先に述べた通りで、B 型アクセント単位には境界部に下降境界特徴 “}” がある。これは後続する文節があれば、文節境界でのピッチ下降として実現する。B 型文節境界のピッチ下降に見られるいくつかの実現形、つまり先行文節末音節内部で下降開始する例と文節境界で開始する例については、旧八代市方言と同様の解釈を考える。つまり、それは「実現する位置が必ずしも固定せず、アクセント核とはみなしがたい」（児玉 2014）という境界特徴の性質によるもので、境界特徴がやや早まって実現したものが前者、境界部で実現したものが後者である、という解釈である。

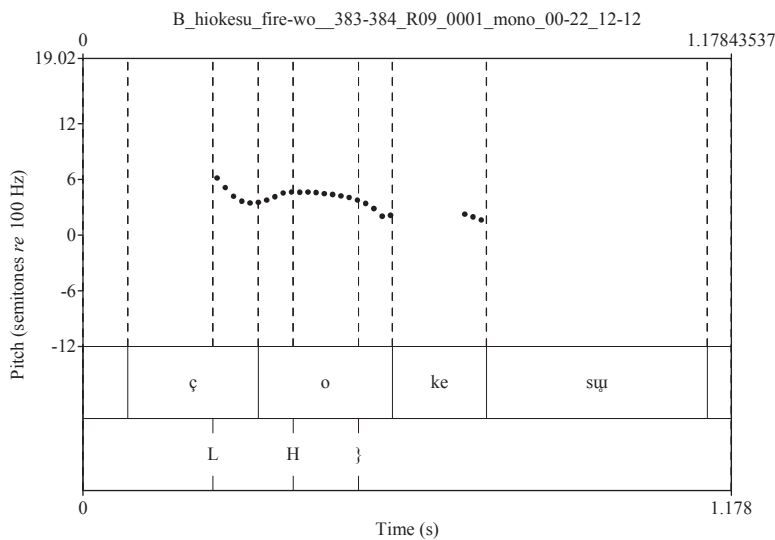


図 4-35. ヒ[オ]ケ]ス「火を消す」

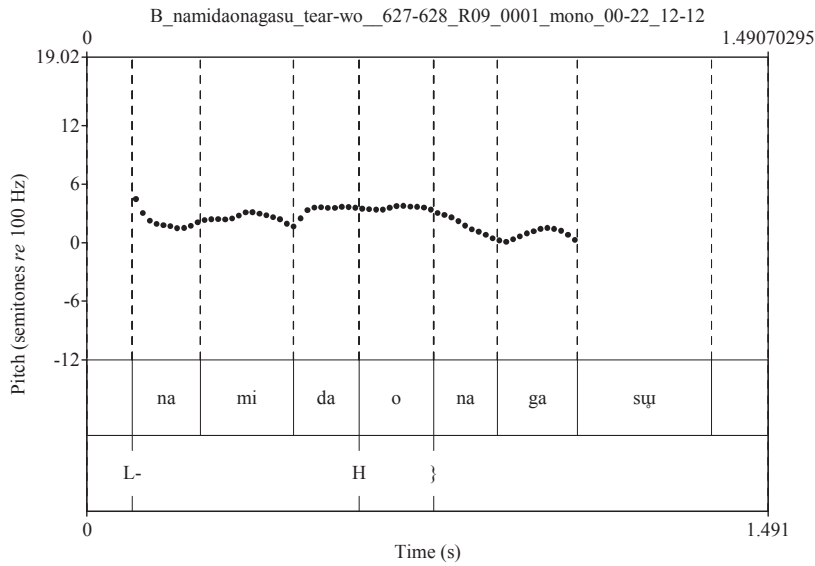


図 4-36. <ナミダ[オ]ナガス

以上が、上深水方言アクセントの解釈である。

5. 氷川町野津方言の分析

本章では、氷川町野津方言のアクセントの特徴を記述していく。筆者の調査の結果、野津方言は二つのアクセント型の対立を持つ明瞭な二型アクセント体系であった。以下では、まず A 型、次いで B 型の音声的特徴を記述したのち、それらをもとに野津方言アクセントの解釈を行う。

5.1 A 型の音声実現の分析

5.1.1 語末・文節末のピッチ下降

A 型の 1 音節語は、音節全体でピッチが下降する。これは後述する B 型 1 音節語の音節内上昇調あるいは平調と対立する。

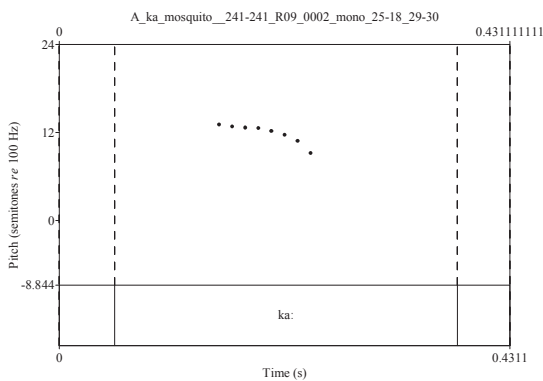


図 5-1. カー]]「蚊」

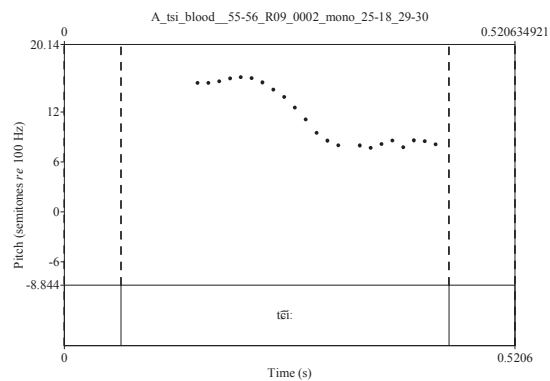


図 5-2. チー]]「血」

2音節語では、1音節目から2音節目にかけてピッチの下降が生じる。音声波形を見ると、下降開始位置は必ずしも固定しておらず、1音節目内で下降が始まっているものと音節境界から2音節目にかけて下降するものなど、いくつかのヴァリエーションがある。ただし、末音節の母音が無声化する場合は、ピッチの下降は頭音節内で実現する（○]||○）。逆に、頭音節の母音が無声化する場合は、末音節内にピッチ下降が実現する（○|○]||）

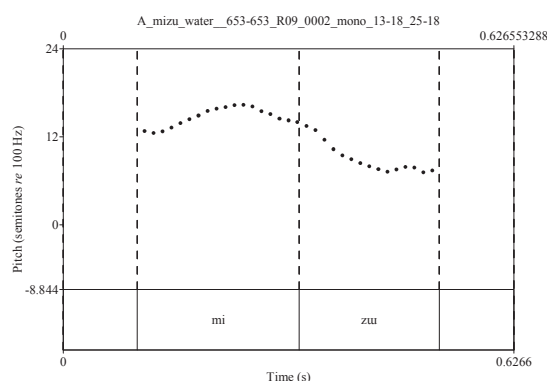


図 5-3. ミ]ズ「水」

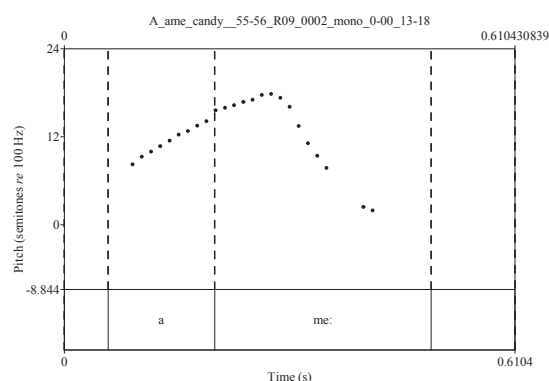


図 5-4. [[アメ]]「飴」

3音節語では、ピッチ下降が1音節目の後にあるもの（○]○○）と、2音節目の後にあるもの（○|○○）とでゆれが見られる。どちらのパターンで出るかは末音節の母音の広狭によってある程度予測することが可能であり、調査票調査のデータの限り、○]○○で実現するものは末音節の母音が /i/ で終わる語に偏っている¹³ (1)。対して、○|○○で実現するものの多くが語末の音節が広母音 /a, e, o/ で終わるものであった。ただし、/i/ 終わりの語でも○|○○で発音される場合がある。

(1) ○]○○で実現する語

ア]ズキ「小豆」、カ]ザリ「飾り」、ケ]ムリ「煙」、イ]ワシ「鰯」、タ]タミ「畳」、ア]ワビ「鮑」、コ]ムギ「小麦」、ワ]サビ「山葵」

※ イ]ワシ ~ イ[ワ]シ、タ]タミ ~ タ[タ]ミ

¹³ このことから、/u/ で終わる語（つまり、末音節が狭母音である語）も○]○○で実現しうることが予測されるが、調査語彙に含んでいないため、今後の課題としたい。

・ ○|○○で知覚される 3 音節語

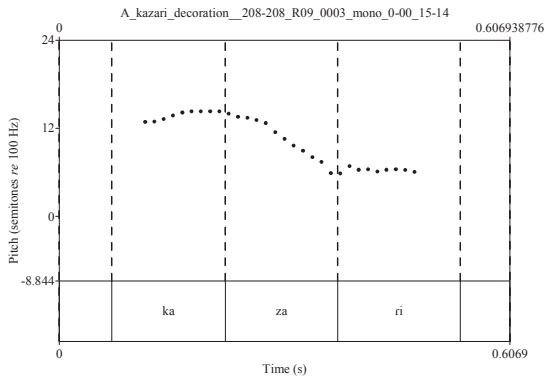


図 5-5. カ]ザリ「飾り」

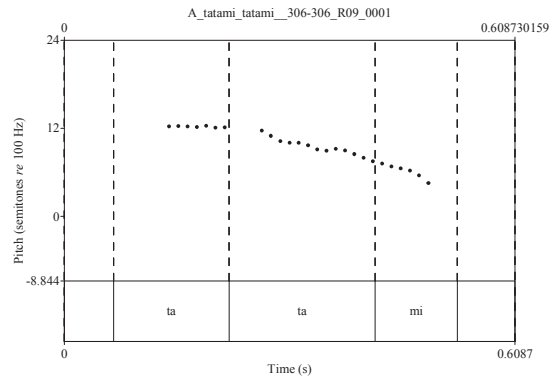


図 5-6. タ]タミ「畳」

・ ○|○|○で知覚される 3 音節語

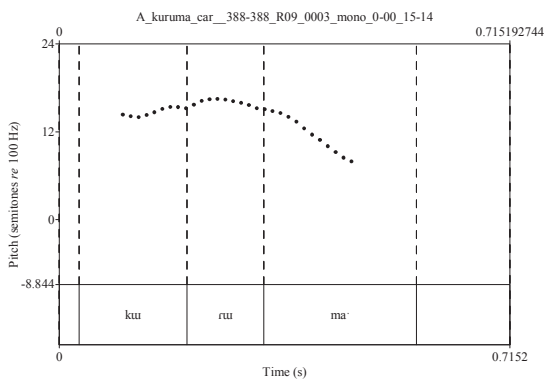


図 5-7. ク|ル]マ「車」

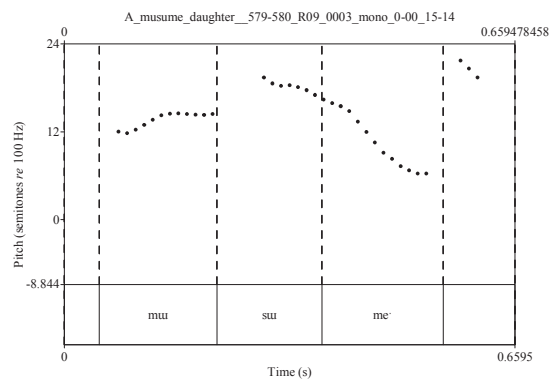


図 5-8. ム|ス]メ「娘」

4 音節以上の A 型では下降開始位置は 2 音節目以降に安定するようになる。

- (2) ハ[ザ]クラ「葉桜」、ア[メ]ダマ「飴玉」、ミ[ズ]マンジュー「水まんじゅう」、
 イ[セ]ジンダー「伊勢神宮」、[[メイジ]ジンダー「明治神宮」、ア[オ]ダイショー「青大将」

この長い A 型名詞のピッチ下降部についてももう少し詳しく見てみる。これらの語のピッチを観察すると、いずれも 2 音節目までにピッチのピークを迎えた後、末音節に向かって直線的にピッチが下降していることがわかる。したがって、音節数が増加するにつれて、下降の傾斜が緩やかになっていく。この事実から A 型の下降が、LHLLL…のような低平に続く下降、あるいは後述の B 型の下降 (○|○…○|○) とは異なる下降であるということが指摘できる。

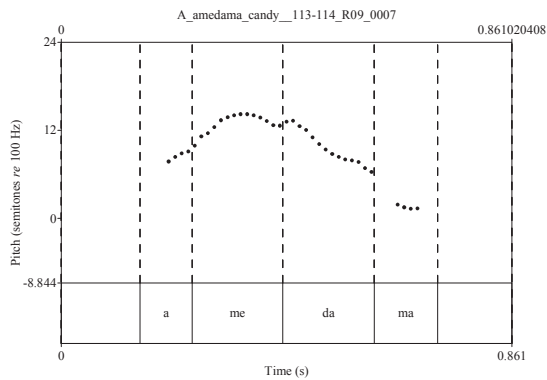


図 5-9. ア[メ]ダマ「飴玉」

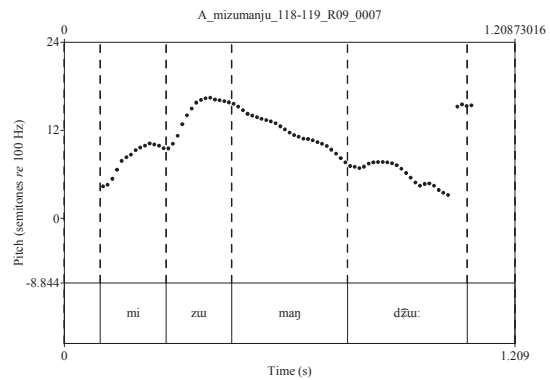


図 5-10. ミ[ズ]マンジュウ「水まんじゅう」

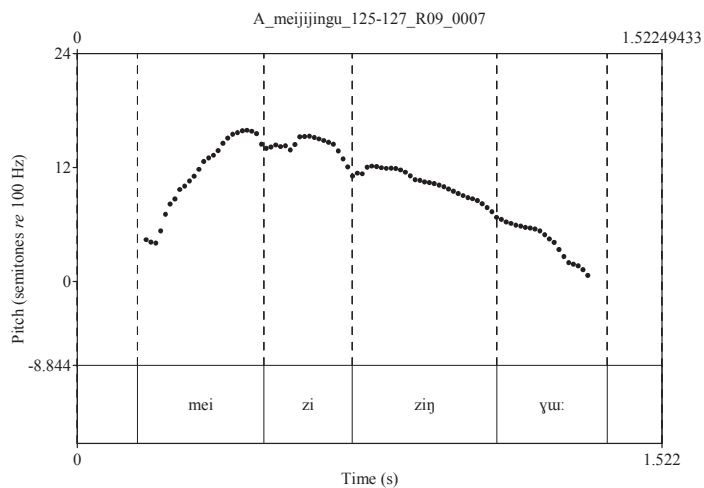


図 5-11. [[メイジ]ジングー「明治神宮」

以上、名詞単独形を中心に A 型のピッチ下降の特徴について記述した。

次に、付属語が接続した場合について。「A 型名詞単独形 + 1 音節付属語 (ガ、ノ、ニ、オ、バ、あるいはン)」では、下降は単独形と同様に文節頭 1 音節目から 2 音節目にかけて生じる。

(3) A 型名詞単独形 + 1 音節付属語

ハ]]、ハ]ガ、ハーン]] 「葉、葉が、葉の」 ハ]ナ、ハ[ナ]ガ 「鼻、鼻が」

タ]タミ、タ[タ]ミガ 「畳、畳が」 ガ[ソ]リン、ガ[ソ]リンオ 「ガソリン、ガソリンを」

2 音節付属語のカラ・マデが接続した場合も同様に、文節頭 2 音節目近傍に生じる。「A

型 3 音節語 + カラ・マデ」では時に下降が文節頭 2 音節目より後ろ（3 音節目付近）に知覚されることもあるが、これは母音の無声化、あるいは文節全体の音節数が長くなった（ために、下降の傾斜がゆるやかになり、下降開始位置が不明瞭になる）ことが影響していると考えられる。また、(4) にあるように、下降がカラやマデを含む文節全体で生じていることから、野津のカラ・マデは独自のアクセントを持たない従属式の付属語であることがわかる。

対して「A 型名詞 + バッカリ (バッカ)」は、名詞は名詞で A 型の下降が実現している一方で、「バッカリ (バッカ)」でも独自に下降や上昇が生じている。これは、野津方言のバッカリが直前の名詞から独立してアクセント単位を成す、独立式の付属語であることを示している。

(4) ・ A 型名詞単独形 + カラ

コー[カ]ラ「子から」 ア[ネ]カラ「姉から」 ヒ[ト]カラ「人から」
[[ムスメ]カラ「娘から」 コ[トシ]カラ「今年から」

・ A 型名詞単独形 + マデ

ハ[マ]デ「葉まで」 ア[ネ]マデ「姉まで」 カ[ワ]マデ「川まで」
[[ムスメ]マデ「娘まで」 キョ[ネン]マデ「去年まで」

・ A 型名詞単独形 + バッカリ

カ]] バッ[カ]リ「蚊ばかり」 ミ]ズ [バッカ「水ばかり」

更に、語あるいは文節に重音節を含む場合のピッチ下降について見てみたい。(5) に示すように、単語が重音節 (CVV, CVC) で始まる場合でも同様に、頭から数えて 1 音節目あるいは 2 音節目で下降が開始する。

(5) アクセント単位頭に重音節を持つ A 型

a. 重音節 + 軽音節で始まる例

[[パンフ]レット「パンフレット」
[[ブーメ]ラン～[[ブー]メラン「ブーメラン」

b. 重音節 + 重音節で始まる例

[[オーソー]]ジ、[[オーソー]]ジガ「大掃除、大掃除が」
 レッ]スン、レッスン]ニ「レッスンに」

5.1.2 語頭・文節頭のピッチ上昇

A型では、語頭・文節頭1音節目から2音節目にかけてピッチの上昇が聞かれる。頭音節が有声重音節の場合には、頭音節全体が上昇調となる。

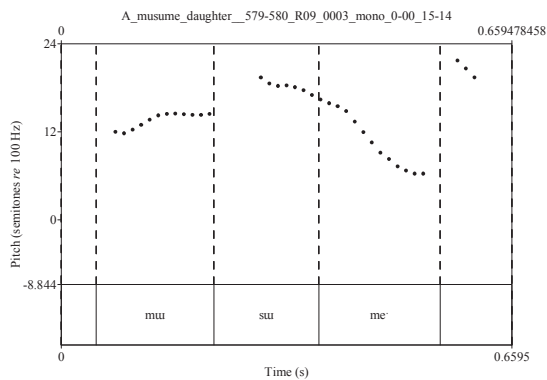


図 5-12. ム[ス]メ「娘」

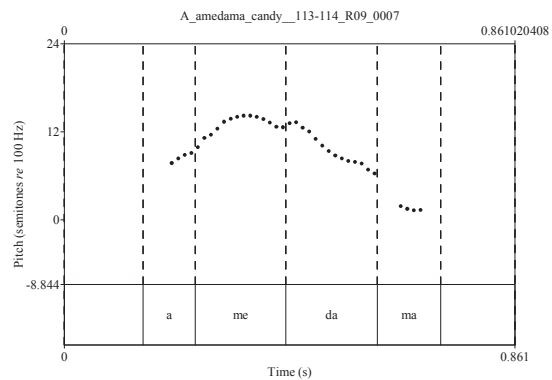


図 5-13. ア[メ]ダマ「飴玉」

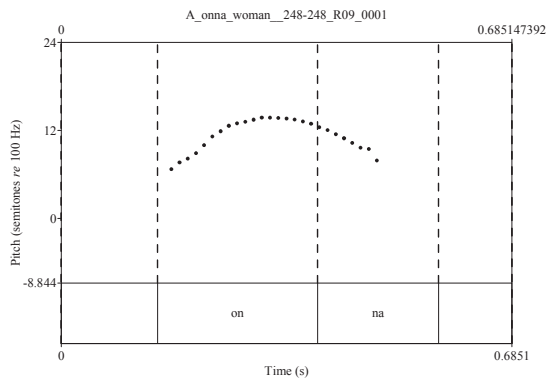


図 5-14. [[オン]ナ「女」

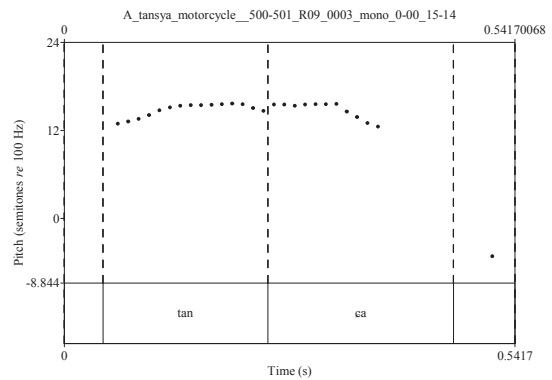


図 5-15. [[タン]シャ「単車」

A型1音節語(○])あるいは○]○○のような場合でも、下降の直前に短いピッチ上昇が生じていることが音声波形により確認できる。

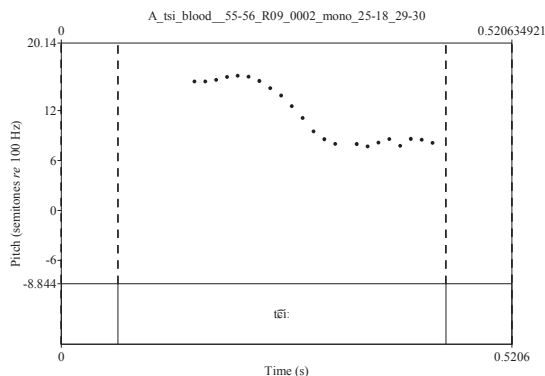


図 5-16. チー]]「血」(再掲)

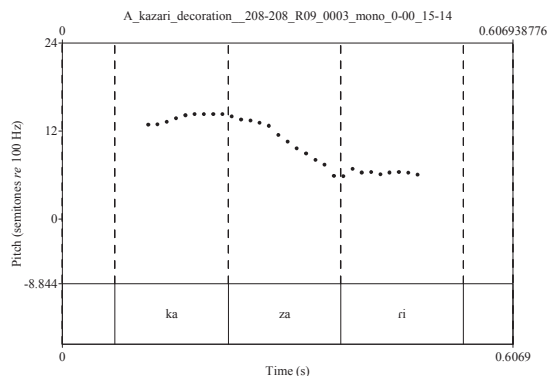


図 5-17. カ]ザリ「飾り」(再掲)

以上が野津方言の A 型の音声的特徴である。まとめると次のようになる。

・野津方言の A 型の音声的特徴

語頭・文節頭 1 音節目から 2 音節目にかけてピッチ上昇した後、そこをピークに末音節まで直線的にピッチ下降する。1 音節語では音節内下降調で実現する。

5.2 B 型の音声実現の解釈

5.2.1 語頭・文節頭のピッチ上昇

B 型の 1 音節語は、音節全体でピッチが上昇するか、あるいは目立った上昇が無く平らに実現するかのどちらかであり、先述の A 型 1 音節語の下降調と対立する。

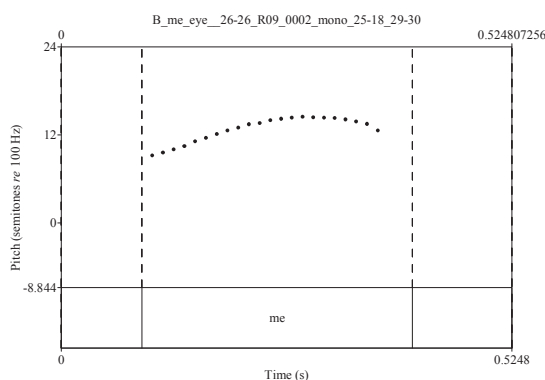


図 5-18. [[メー「目」

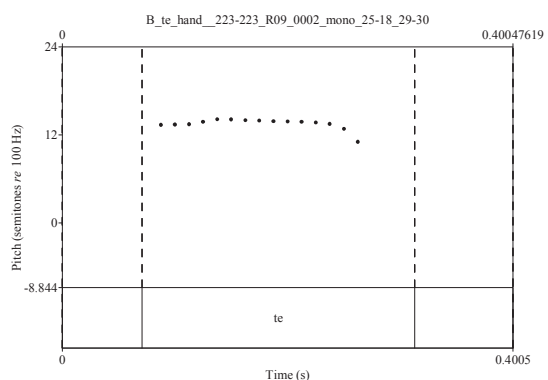


図 5-19. [[テー「手」

名詞単独形あるいは付属語接続形が 2 音節以上の長さになると、語頭あるいは文節頭にピッチ上昇、アクセント単位末にピッチ下降が見られるようになる。ピッチ下降については後述するとしてここではまずピッチ上昇の特徴について記述していく。

B型2音節語単独形では、語頭1音節目から2音節目の始端にかけてピッチの上昇が現れる(図5-20、5-21)。後述の下降するパターンのB型2音節語(○]○)でも、ピッチ下降の前に1音節分のピッチ上昇が観察される(図5-22、5-23)。

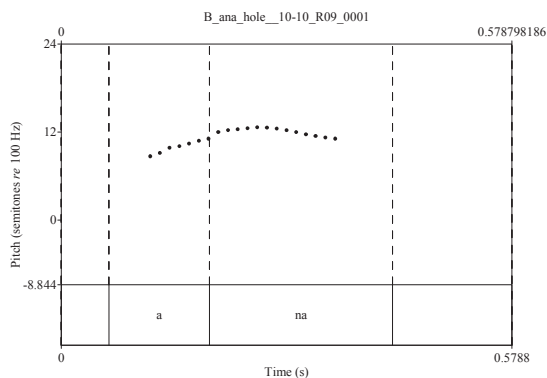


図 5-20. ア[ナ 「穴」

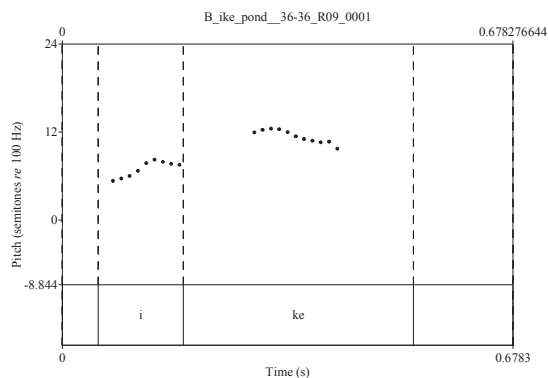


図 5-21. イ[ケ 「池」

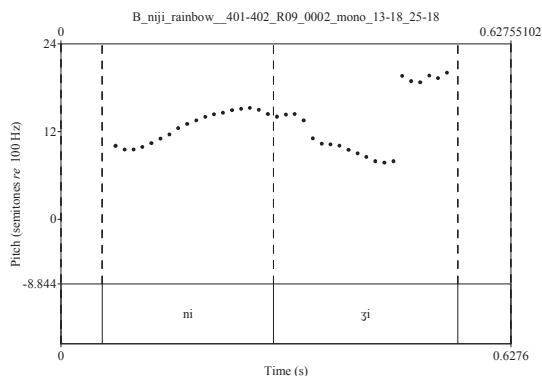


図 5-22. [[ニ]ジ 「虹」

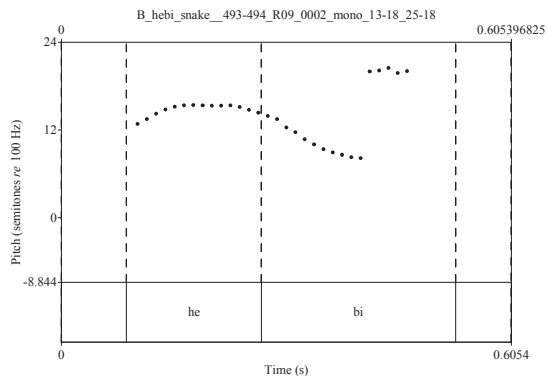


図 5-23. へ]ビ 「蛇」

「B型1音節語 + 1拍付属語」からなる2音節の文節の場合も上記と同様であり、語頭の音節冒頭に短いピッチ上昇が見られる。

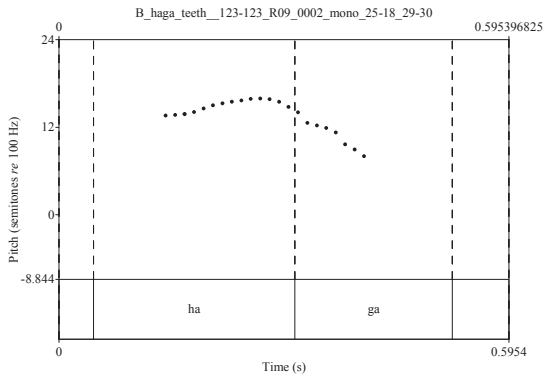


図 5-24. ハ]ガ 「歯が」

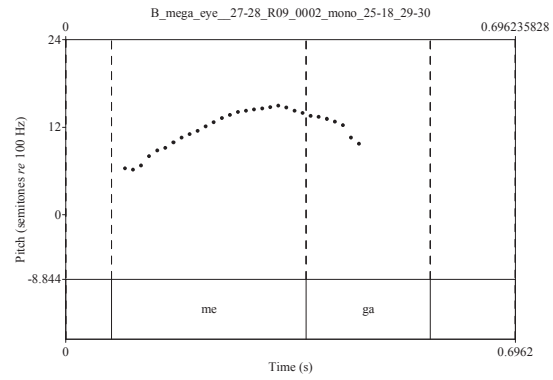


図 5-25. [[メ]ガ 「目が」

3音節以上のB型単独形、あるいは付属語接続形も同様に、語頭・文節頭1音節目から2音節目にかけて、ピッチの上昇が観察される。

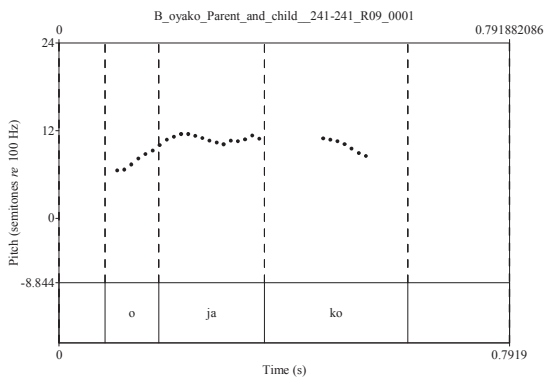


図 5-26. オ[ヤコ 「親子」

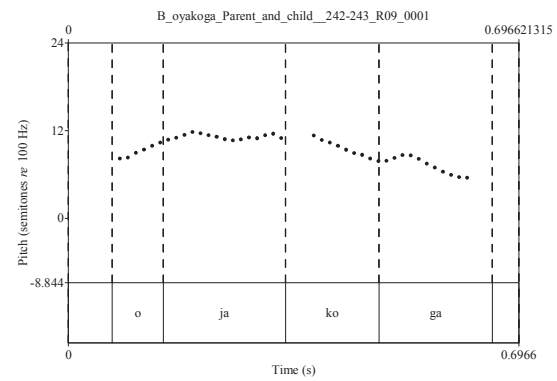


図 5-27. オ[ヤコ]ガ 「親子が」

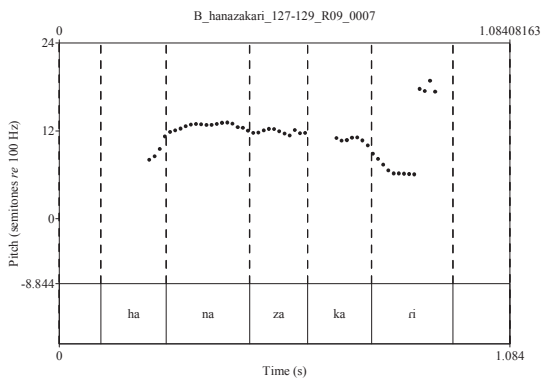


図 5-28. ハ[ナザカ]リ 「花盛り」

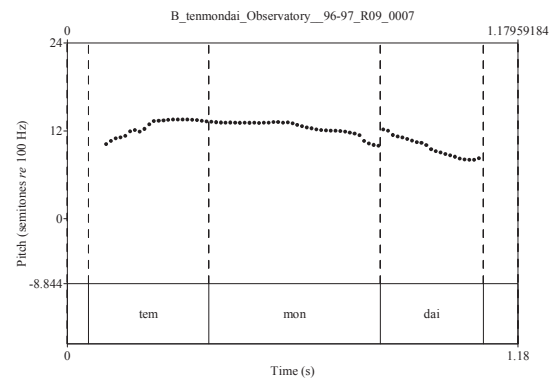


図 5-29. [[テンモンダイ] 「天文台」

3音節以上の比較的長い語あるいは文節のピッチを観察すると、語頭・文節頭1音節～2音節で上昇したピッチは、語末・文節末に向けて急激なピッチ下降を伴わずに、高くほぼ平らに続いている。語末・文節末にピッチ下降が見られる場合もある（詳しくは後述）が、下降開始位置は次末音節から末音節にかけての区間にある。この点、同じく語頭・文節頭1音節～2音節でピッチ上昇した後、語末・文節末に向けて漸次的にピッチ下降するA型とは異なる特徴を有する。

5.2.2 語末・文節末のピッチ下降

5.2.2.1 語末のピッチ下降

1音節名詞単独形は音節内で上昇調あるいは平調として実現することは先に見たが、2音節以上の名詞単独形では、語末までピッチ下降が出ないパターン（図5-30、5-31）と、末音節でピッチが下降するパターン（図5-32、5-33）の二つのパターンが聞かれるようになる。後者の場合、下降開始位置は次末音節の終端から末音節の始端にかけてあり、末音節全体が下降調として実現し、聴覚的には末音節全体が低く知覚される。

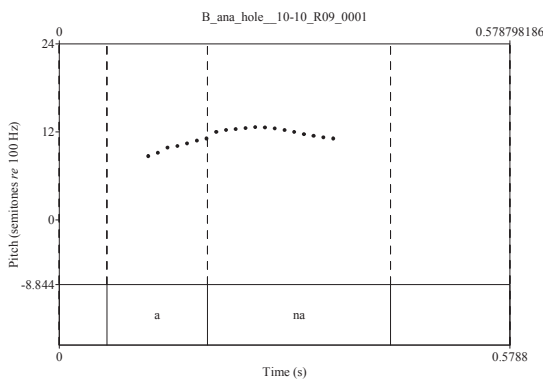


図 5-30. ア[ナ] 「穴」

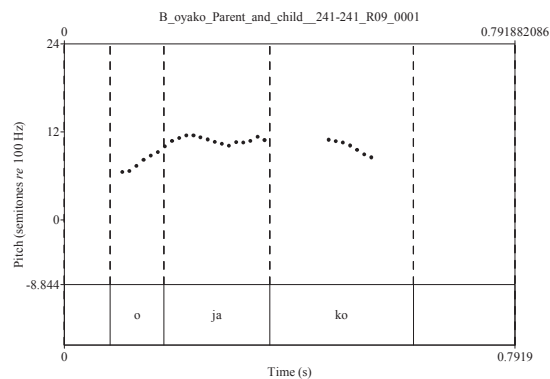


図 5-31. オ[ヤコ] 「親子」

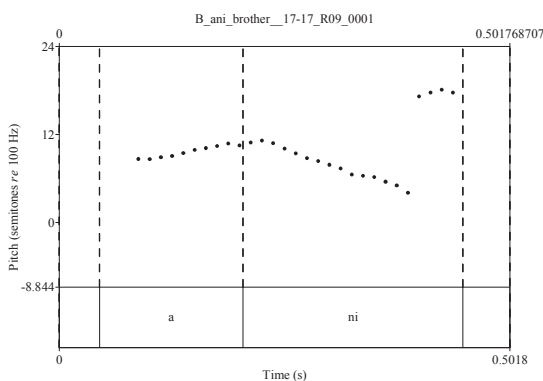


図 5-32. ([ア]ニ) 「兄」(再掲)

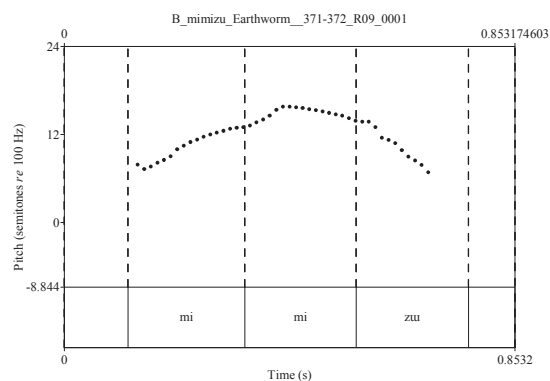


図 5-33. ミ[ミ]ズ 「蚯蚓」

B型の単語がどちらのパターンを取るかの条件には、末音節の母音の広狭が関わっていると考えられる。つまり、(6) に示すように末音節が広母音 /a, e, o/ であれば、語末までピッチ下降が出ないパターンをとる。

(6) 野津方言の B 型単独形：語末の音節が広母音の場合

ハ[ナ「花」、オ[ヤ「親」、ゴ[マ「胡麻」、ア[タマ「頭」、ア[ブラ「油」、マ[クラ「枕」
ア[メ「雨」、イ[エ「家」、イ[ケ「池」、タ[ネ「種」、ス[ズメ「雀」、ツク[エ「机」
イ[モ「芋」、イ[チゴ「莓」、マ[ド「窓」、オ[トコ「男」、コ[コロ「心」、タ[マゴ「卵」
サ[トイモ「里芋」、カ[ライモ「さつま芋」、[[サンダジガワ (川の名)
ガ[ソリンスタンド「ガソリンスタンド」

一方、(7) に示すように、末音節が狭母音 /i, u/ であれば、末音節でピッチ下降が出るパターンを取る。

(7) 野津方言の B 型単独形：語末の音節が狭母音の語の場合

ア[キ「秋」、ア[シ「足」ア[リ「蟻」、ウ[ミ「海」、ニ[ジ「虹」、へ[ビ「蛇」、ア[ルジ「主」、
[[オー]ギ「扇」、カ[ガ]ミ「鏡」、クスリ「薬」、ソー]ジ「掃除」
ア[ユ「鮎」、ク]ズ「屑」、サ]ル「猿」、カ[エ]ル「蛙」、ミ[ミ]ズ「蚯蚓」
ハナラ]ビ「齒並び」、ハ[ナザカ]リ「花盛り」、オ[トコトモダ]チ「男友達」
ク[リスマスケー]キ「クリスマスケーキ」

ただし、末音節が狭母音の場合でも、当該音節が /k, t, s/ などの無声子音であり、かつ母音の無声化が起きた場合にはピッチ下降が出ず、(6) のようなパターンを取る。

(例. ア]キ～アキ「秋」、ア]シ～アシ「足」、オ[トコトモダ]チ～オ[トコトモダチ「男友達」、
タ[マゴヤ]キ～タ[マゴヤキ「卵焼き」)

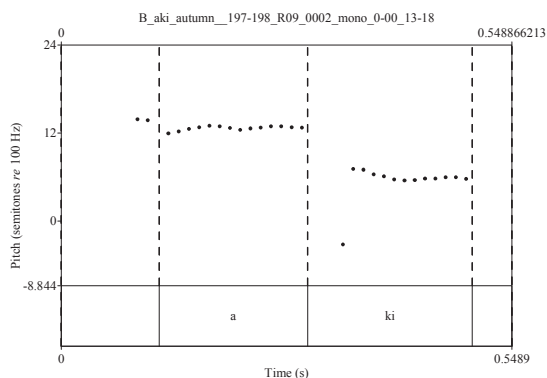


図 5-34. アシ「足」

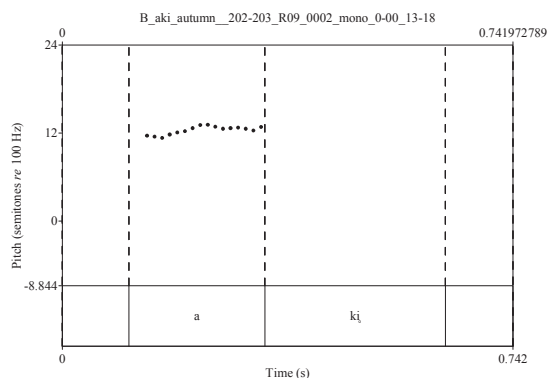


図 5-35. アシ「足」

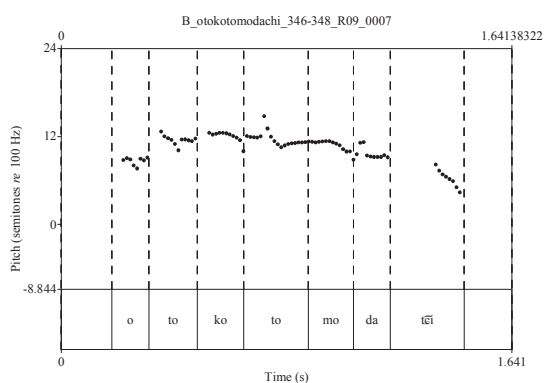


図 5-36. オ[トコトモダ]チ「男友達」

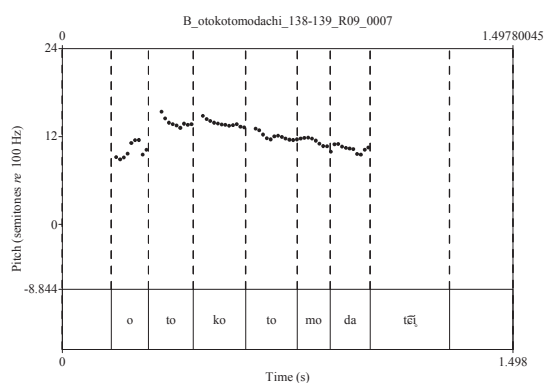


図 5-37. オ[トコトモダ]チ「男友達」

以上示した「末音節の母音の広狭によるピッチ下降の有無」は被調査者の FS 氏、KY 氏ともに観察され、且つ、ほぼ例外なく上記のように実現する。表 5-1、5-2 は、調査票調査で得られた FS・KY 両氏の B 型 2、3 拍名詞単独形のアクセントデータを、「末音節の母音の広狭」と「下降の有無」で分類したものである。表を見ると、両氏ともに末音節が広母音の場合には一貫して下降が出ないパターンで実現していることが分かる。一方で、末音節が狭母音の場合にはその多くが下降があるパターンで実現している。下降が出ないパターンで出たデータを個別に見ると、母音の無声化などによるものがほとんどであった。

表 5-1. FS 氏による B 型名詞単独形のアクセント

	下降あり	下降なし
末音節が広母音 32 語	0 (0%)	32 (100%)
末音節が狭母音 22 語	17 (77.27%)	5 (22.72%)
計 54 語		

表 5-2. KY 氏による B 型名詞単独形のアクセント

	下降あり	下降なし
末音節が広母音 31 語	0 (0%)	31 (100%)
末音節が狭母音 23 語	21 (91.30%)	2 (8.69%)
計 54 語		

5.2.2.2 文節末のピッチ下降

B 型名詞単独形に種々の付属語が接続した場合にも、聴覚的に文節末までにピッチ下降知覚されないパターンと、文節末にピッチ下降が知覚されるパターンの二つのパターンが聞かれる。以下では、B 型名詞単独形に「1 音節付属語」「ン」「2 音節付属語」「バッカリ」それぞれが接続した場合の音声実現について記述していく。

1. B 型名詞単独形 + 1 音節付属語

2 音節以上の B 型名詞に 1 音節付属語（ガ、ノ、ニ、バ、オ etc.）が接続する場合、以下に示すように、聴覚的には文節末まで平板に知覚されるパターン（助詞が低く聞こえないパターン）と、文節末でピッチ下降が知覚されるパターン（助詞が低く聞こえるパターン）の二つのパターンが観察される。ここで、前者を「非下降パターン」、後者を「下降パターン」と呼ぶことにする。

「非下降パターン」の音声波形を見ると、文節の次末音節内では有意味なピッチ下降は見られず、且つ末音節内でも急激なピッチ下降は無い。次に文節が続く場合は、文節境界でピッチ下降が見られる（連文節環境のアクセントについては後述）。対して、後者の「下降パターン」の音声波形を見ると、文節の次末音節冒頭あるいは内部から末音節にかけて連続的にピッチが下降して現れていることが確認できる。次末音節からの連続的なピッチ下降は、後続する文節がある場合、文節境界まで続く。

- ・文節末まで平板に知覚される「非下降パターン」

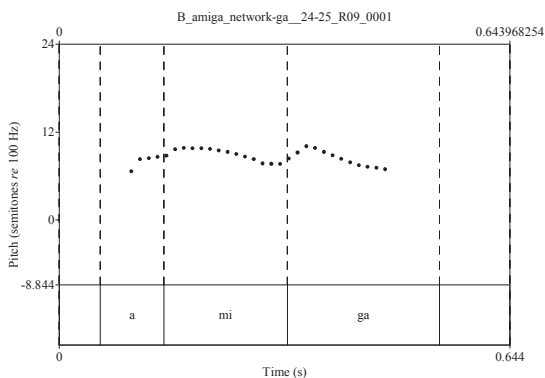


図 5-38. ア[ミガ]「網が」

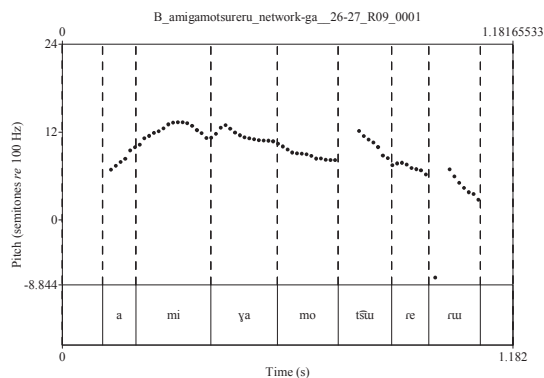


図 5-39. ア[ミガ]|モツ]レル「網が絡まる」

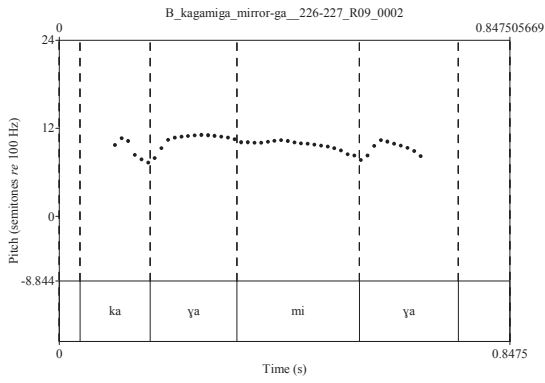


図 5-40. カ[ガミガ 「鏡が」

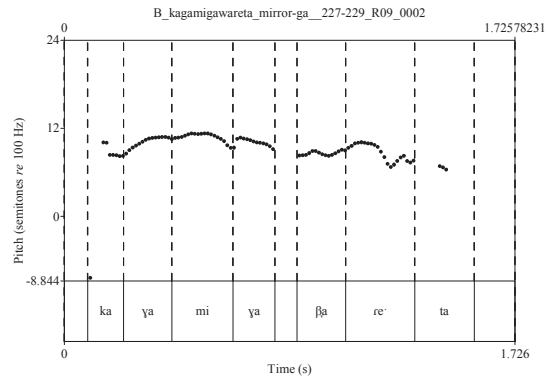


図 5-41. カ[ガミガ ワ[レ]]タ 「鏡が割れた」

・文節末にピッチの下降が知覚される「下降パターン」

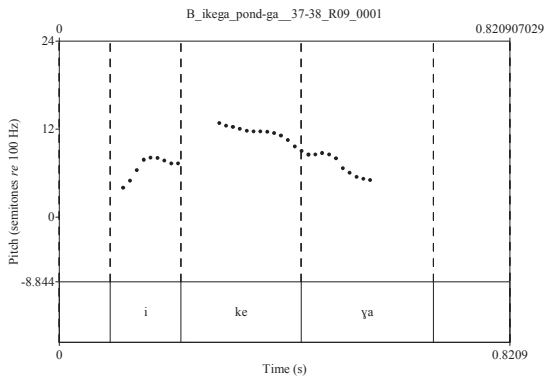


図 5-42. イ[ケガ 「池が」

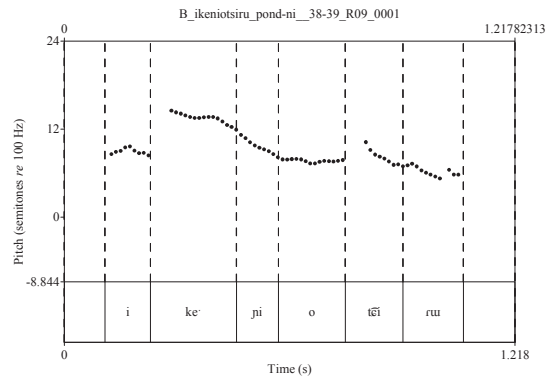


図 5-43. イ[ケニ|オチ]ル 「池に落ちる」

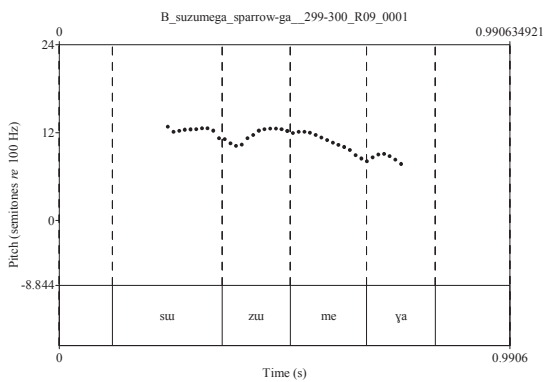


図 5-44. ス[ズメ]ガ 「雀が」

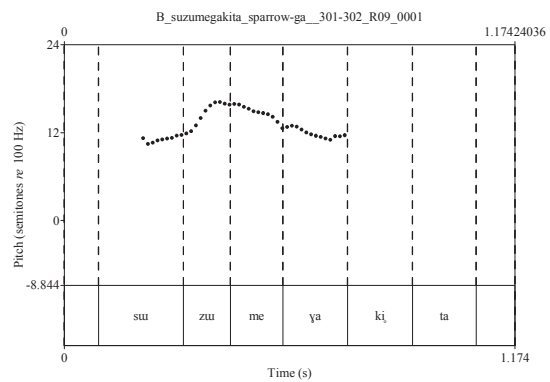


図 5-45. ス[ズメ]ガ|キタ 「雀が来た」

これら二つのパターンは、4音節以上のB型名詞にも見られる。一方で、「1音節のB型名詞 + 1音節付属語」の文節では、以下に示すように下降パターン（○]▽）のみが聞かれる。

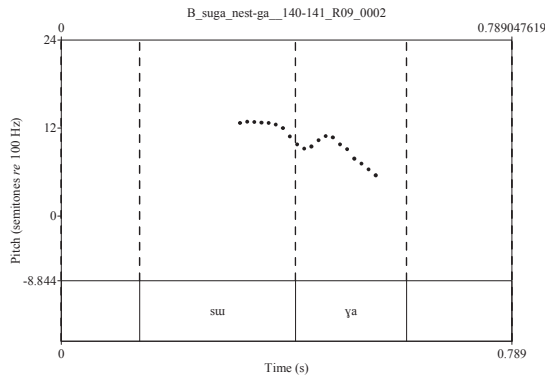


図 5-46. ス]ガ 「巣が」

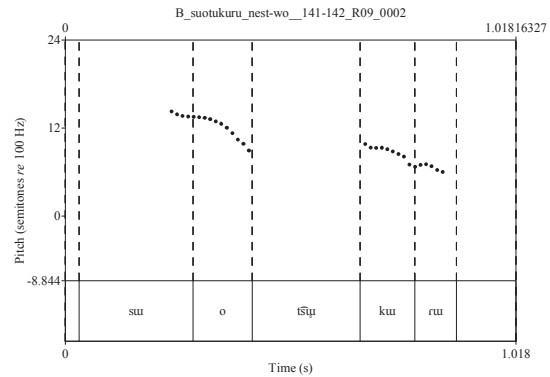


図 5-47. ス]オ|ツク]ル 「巣を作る」

以上、野津方言の「2音節以上のB型名詞単独形 + 1音節付属語」では、文節末の下降の有無に関する二つのパターンが見られること、「B型1音節語 + 1音節付属語」は下降するパターン（○]▽）のみが見られることを示した。それでは、前者に見られる二つのパターンの出方にはどのような要因が関わっているのだろうか。以下では、「付属語の種類」「言い切り形か接続形か」「語末の母音の広狭」の三点に着目して考察してみたい。

まず、「付属語の種類」だが、調査で用いた付属語ガ・ノ・ニ・バ・オそれぞれについて、以下に示すように下降パターン・非下降パターンが見られる。従って、特定の付属語が接続するとき特定のパターンが現れる、つまり、付属語の種類がパターンの出現に関与しているということは考えにくい。

- (8) ガ (主格・属格) : ア[メ]ガ 「雨が」 vs. ア[ニ]ガ 「兄が」
 ノ (主格・属格) : コ[メ]ノ 「米が」 vs. サ[ル]ガ 「猿が」
 ニ (与格) : ウ[マ]ニ 「馬に」 vs. ウ[ミ]ニ 「海に」
 バ (対格) : ア[ナ]バ 「穴を」 vs. サ[ル]バ 「猿を」
 オ (対格) : ア[ナ]オ 「穴を」 vs. サ[ル]オ 「猿を」

次に、「言い切り形か接続形か」について検証してみたい。表 5-3 および表 5-4 は、調査票調査によって得られた SF・KY 両氏の「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」のアクセントデータを、「言い切り形か接続形か」と下降の有無によってまとめたものである。表中のパーセンテージは、各語形におけるそのパターンのデータの割合を示している。

表 5-3 SF 氏の「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」のアクセント

SF 氏	下降パターン	非下降パターン
言い切り形 41 例	27 (65.85%)	14 (34.14%)
接続形 57 例	43 (75.43%)	14 (24.56%)

表 5-4 KY 氏の「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」のアクセント

KY	下降パターン	非下降パターン
言い切り形 41 例	27 (65.85%)	14 (34.14%)
接続形 57 例	30 (52.63%)	27 (47.36%)

もし、下降パターン・非下降パターンの出現が「言い切り形か接続形か」によって決定されているのであれば、例えば「言い切り形：下降パターン>非下降パターン」「接続形：下降パターン<非下降パターン」(逆も然り)といった関係になっていることが予想される。しかし実際には、上の表からはそのような関係は見出すことはできない。SF 氏は言い切り形・接続形ともに「下降パターン>非下降パターン」となっており、KY 氏は言い切り形が同じく「下降パターン>非下降パターン」、接続形が「下降パターン≒非下降パターン」という関係である。従って、個人差を考慮しても、「言い切り形か接続形か」が下降パターン・非下降パターンの出現の要因になっているとは考えにくい。

最後に、「語末の母音の広狭」について検証する。表 5-5 および表 5-6 は、前記と同じく調査票調査によって得られた SF・KY 両氏の「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」のアクセントデータを、語末の母音の広狭と下降の有無によってまとめたものである。表中のパーセンテージは、各母音環境におけるそのパターンのデータの割合を示している。

表 5-5 SF 氏の「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」のアクセント

	下降パターン	非下降パターン
語末が狭母音 45 例	15 (33.33%)	30 (66.66%)
語末が広母音 53 例	53 (100%)	0 (0%)

表 5-6 KY 氏の「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」のアクセント

	下降パターン	非下降パターン
語末が狭母音 45 例	16 (35.55%)	29 (64.44%)
語末が広母音 53 例	43 (81.13%)	10 (18.86%)

上表からまず分かるのは、語末の音節が広母音 /a, e, o/ である語に 1 音節付属語が接続するときに下降パターン (○[○]▽、○[○○]▽) を取ることが多いことである。KY 氏のデータでは非下降パターンのデータも多少見られるが、下降パターンの割合が 8 割を超えており、大きな差と言えるであろう。一方で、語末が狭母音 /i, u/ の語に 1 音節付属語が接続するときに非下降パターン (○[○▽、○[○○▽) を取りやすいという傾向も見出すことができる。両者ともに 6 割程度で、「広母音 — 下降パターン」と比較すると幾分割合は落ちるものの、看過できない差であろう。

以上を勘案すると、「B 型 2、3 音節名詞 + 1 音節付属語」に見られる二つのパターンの出現には語末の音節の母音の広狭が関与している、と考えられる。

2. B 型名詞単独形 + ン

野津方言には他九州諸方言同様、主格あるいは属格のノ、与格のニの異形態にンがある。ンは単独では音節を成さず、先行する（語末）音節と融合して重音節あるいは超重音節を形成する。B 型名詞単独形にンが接続するときも、ノあるいはニが接続するときと同様に、文節末に下降するもの (○[○…○ン])、もしくは○○…○ン) と文節内では下降しないもの (○[○…○ン) の二つのパターンが観察される。

(9) B 型 2、3 音節名詞単独形 + ン

ウ[マン]] vs. ウ[マン 「馬に」、マ[ドン]] vs. マ[ドン 「窓が」

ス[ズメン]] vs. ス[ズメン 「雀の」、ス[ガタン]] vs. ス[ガタン 「姿が」

一方で、1 音節名詞にンが接続するときには、下降しないパターン ([[○ン) のみが聞かれる。

(10) B 型 1 音節名詞 + ン

[[メン]]|イタカ 「目が痛い」

[[ハーン]]|イタカ 「歯が痛い」

[[テン]]|イタカ 「手が痛い」

2. B型名詞単独形 + 2音節付属語

最後に、2音節付属語のカラ・マデ、およびがB型名詞に接続する場合の音調を記述する。カラ・マデは、西南部九州二型アクセント諸方言においては単独でアクセント単位を成さない従属式の付属語であることが多い（木部 2012 参照）。

野津方言において「B型名詞 + カラ/マデ」は、1音節付属語接続形と同様、下降パターンと非下降パターンの二つのパターンで実現する。下降パターンは、文節の次末音節から末音節にかけて連続的にピッチが下降する。一方で、非下降パターンは文節頭でピッチ上昇した後、文節末まで高平に続き、文節内で急激なピッチの下降はない。次の文節との境界にピッチの下降が見られる。

先に記述したように、この二つのパターン自体は「B型名詞 + 1音節付属語」でも見られたものだが、2音節付属語接続形が異なる点として以下の2点が挙げられる。

1. 語末の母音の広狭がパターンの出現に関わらない

1音節名詞付属語接続形の場合は、付属語の直前、つまり語末の音節の母音の広狭によって二つのパターンの出現がある程度予想できた（広母音であれば下降パターン、狭母音であれば非下降パターンの出現が多くなる傾向にある）が、カラ・マデが接続する場合には、そのような傾向は見られない。

ex.) カ[ミマ]デ vs. カ[ミマデ]「髪まで」、コ[メカ]ラ vs. コ[メカラ]「米から」

2. 1音節語にも2パターンが聞かれる。

「1音節語 + 1音節付属語」の場合、調査票調査では一貫して下降パターン（○]▽）のみが聞かれたが、「1音節語 + カラ・マデ」では下降パターン（○▽]▽）、非下降パターン（○[▽▽）ともに聞かれる。

ex.) タ[マ]デ「田まで」 vs. テ[マデ]「手まで」、ス[カ]ラ vs. ス[カラ]「巢から」

・文節末まで平板に知覚される「非下降パターン」

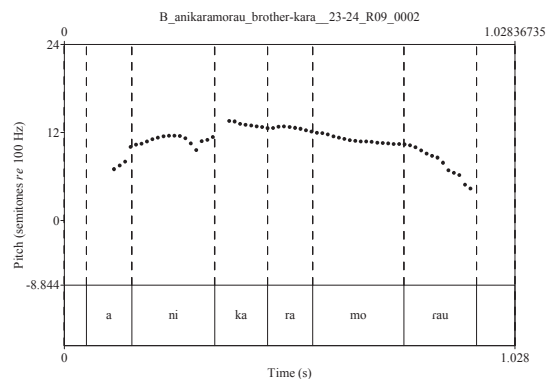
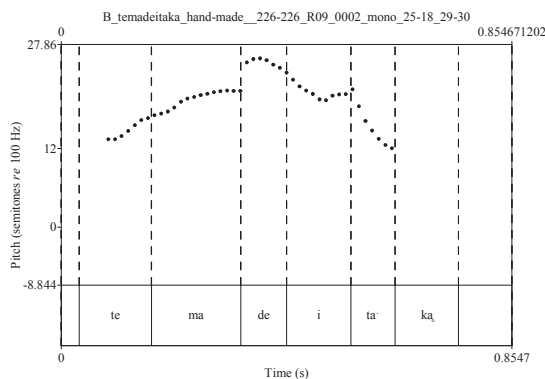


図 5-48. テ[マデ]|イター]]カ「手まで痛い」

図 5-49. ア[ニカラ]|モ]ラウ「兄から貰う」

- ・文節末にピッチの下降が知覚される「下降パターン」

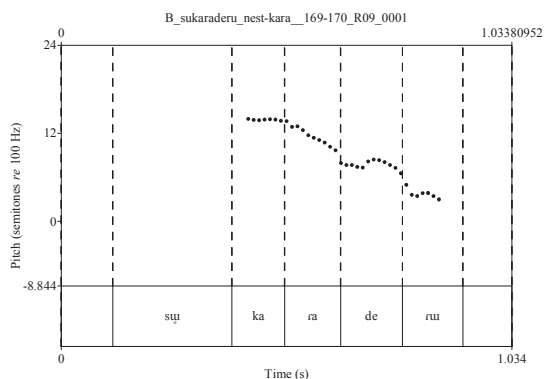


図 5-50. スカ|ラ|デル 「巣から出る」

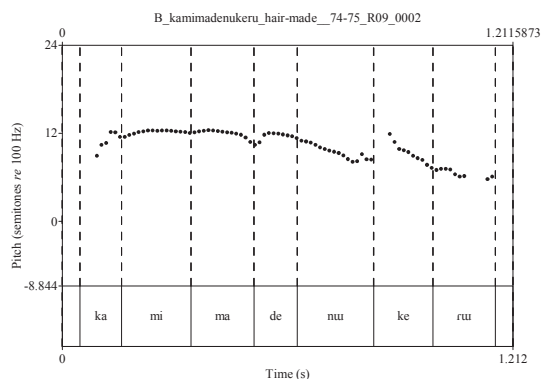


図 5-51. カ|ミマ|デ|ヌケル 「髪まで抜ける」

以上が、野津方言の B 型の音声的特徴である。まとめると次のようになる。

- ・野津方言の B 型の音声的特徴

語頭・文節頭 1 音節目から 2 音節目にかけてピッチ上昇した後、末音節までピッチ下降を伴わず平進（非下降パターン）。あるいは、ピッチ上昇し平進した後、次末音節から末音節にかけてピッチ下降（下降パターン）。1 音節語では音節内上昇調あるいは平調で実現する。

5.3 野津方言アクセントの解釈

5.3.1 文節性

以上示したように、野津方言は二つの型が対立する明瞭な二型アクセント体系である。この二つの型が付与されるアクセント上のドメイン（アクセント単位）について考えてみたい。A 型は語頭・文節頭 2 音節目から末音節にかけて連続的にピッチが下降する型であったが、(3) (4) で示したように語に付属語が接続してもその特徴（どこで下降が開始し、その下降がどこまで続くか）は同様である。これらのデータから野津方言の A 型は「文節性」を有するとひとまず考えられる。また、「p 拍の自立語（名詞）に q 拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の (p+q) 拍名詞の音調型と同じになる ($Np+Pq=Np+q$)」（上野 2012, p.48）が成り立つ（ハ]ガ「葉が」 = ハ]ナ「鼻」ハ[ナ]ガ「鼻が」、=ム[ス]メ「娘」、ム[ス]メガ「娘が」 = ア[メ]ダマ「飴玉」）ことから、「系列化」も成立するといえる。

(3) A 型名詞単独形 + 1 音節付属語

ハ]], ハ]ガ、ハーン]] 「葉、葉が、葉の」 ハ]ナ、ハ[ナ]ガ 「鼻、鼻が」

タ]タミ、タ[タ]ミガ 「畳、畳が」 ガ[ソ]リン、ガ[ソ]リンオ 「ガソリン、ガソリンを」

(4) A 型名詞単独形 + カラ

コー[カ]ラ「子から」 ア[ネ]カラ「姉から」 ヒ[ト]カラ「人から」
[[ムスメ]カラ「娘から」 コ[トシ]カラ「今年から」

A 型名詞単独形 + マデ

ハ[マ]デ「葉まで」 ア[ネ]マデ「姉まで」 カ[ワ]マデ「川まで」
[[ムスメ]マデ「娘まで」 キョ[ネン]マデ「去年まで」

次に B 型だが、野津方言の B 型は語単独形、付属語接続形それぞれ末音節までピッチ下降しない「非下降パターン」と、次末音節から末音節でピッチが下降する「下降パターン」とがあり、単独形の環境と付属語接続形の環境とで両者が複雑に交替しうる。その様相を再度以下に示す。表 5-7 は、1～3 音節名詞に 1 音節付属語、音節未満の付属語ン、2 音節付属語がそれぞれ後接したときの「非下降パターン」「下降パターン」の出現の状況を表している。灰色で網掛けをした「2 音節名詞 + 1 音節付属語」「3 音節名詞 + 1 音節付属語」では、下降パターン、非下降パターンの出現に関して語末の（付属語の直前の）音節の母音の広狭が関わっている。

表 5-7 各付属語接続形における「下降パターン」「非下降パターン」の分布

	1 音節付属語	ン	2 音節付属語
1 音節名詞	下降のみ	非下降のみ	下降、非下降
2 音節名詞	下降、非下降	下降、非下降	下降、非下降
3 音節名詞	下降、非下降	下降、非下降	下降、非下降

(11) B 型名詞単独形 + 1 音節付属語

[[ハー、ハ]ガ「歯、歯が、歯の」 [[キ、キ]ガ「木、木が」
ハ[ナ、ハ[ナ]ガ「花、花が」 ア[ニ、ア[ニガ～ア[ニ]ガ「兄、兄が」
オ[トコ、オ[トコ]ガ「男、男が」 ミ[ミ]ズ、ミ[ミズガ～ミ[ミズ]ガ「蚯蚓、蚯蚓が」

(12) B 型名詞単独形 + ン

[[メン「目が」 [[テン「手が」
ウ[マン]]～ウ[マン「馬に」 マ[ドン]]～マ[ドン「窓が」
ス[ズメン]]～ス[ズメン「雀の」 ス[ガタン]]～ス[ガタン「姿が」

(13) B 型名詞単独形 + カラ

ス[カラ～ス[カ]ラ「巢から」　コ[メカラ～コ[メカ]ラ「米から」

オ[トコカラ～オ[トコカ]ラ「男から」

B 型名詞単独形 + マデ

タ[マデ～タ[マ]デ「田まで」　カ[ミマデ～カ[ミマ]デ「髪まで」

ア[ブラマデ～ア[ブラマ]デ「油まで」

以上のような言語事実を踏まえて、野津方言の B 型に文節性が認められるか否かを検討してみたい。まず、下降・非下降がどちらも現れ、且つ語末の母音の影響を受けない「2、3 音節名詞 + ン」「1～3 音節名詞 + 2 音節付属語」について。これらの付属語（ン、カラ、マデ）が仮に固有のアクセントを有しており、直前の語とは独立してアクセント単位を成すのであれば、常に同じ音調が現れなければならない。例えば、長崎市の二型アクセントにおける断定のジャ・バイ・タイ・丁寧のデスなどは、語とは独立してアクセント単位を形成する付属語であり、B 型ではア[メ]ジャ「雨だ」、ア[メ]バイ「雨だよ」、ア[メ]タイ「雨だよ」、ア[メ]デス「雨です」のように常に付属語境界でピッチ下降を伴う音調を取る。一方で、野津方言のンやカラ・マデはそれぞれ下降パターン、非下降パターンの二つが現れ、また、マ[ドン] vs. マ[ドン「窓の」、カ[ミマ]デ vs. カ[ミマデ「髪まで」のような同じ語と付属語による下降・非下降の揺れも観察される。これに A 型のデータも合わせて考えると、野津方言のン・カラ・マデは独立したアクセント単位を形成しているとは言えず、それらを含めた**文節**が一つのアクセント単位になっていると考えられる。下降パターン、非下降パターンのゆれ、言い換えると、文節末に現れうるピッチ下降というのは、後述するが、アクセント単位末に実現する境界特徴によるものであると考える。

続けて、1 音節付属語について検討する。上に示したように、1 音節付属語は 1 音節語に付く場合には常に下降パターン（○]▽）、2～3 音節語に付くときに語末が広母音の場合には下降パターン（○[○]▽、○[○○]▽）、狭母音の場合には非下降パターン（○[○▽、○[○○▽）になる傾向にある（話者 FS 氏の場合、調査票調査では常に語末が広母音の時に下降パターンを取る）。これについては、1 音節付属語が独立したアクセント単位を形成していて、この環境においては文節性が認められないとする分析も可能ではあるが、本論文では 1 音節付属語でも文節性が成立しているという分析を採る。つまり、文節がアクセント単位であり、付属語境界に見られるピッチ下降の有無はアクセント単位末に設定され

る境界特徴（後述）の「実現する位置が必ずしも固定」しない（児玉 2014, p.28）という性質に起因するものとみなす分析である。より具体的に言うと、ヒ[ガ「火が」、ア[ナ]ガ「穴が」、オ[トコ]ガ「男が」などの「下降パターン」はアクセント単位（文節）末の境界下降が末音節の前で実現したものであり、ア[ニガ「兄が」、ミ[ミズガ「蚯蚓が」のような「非下降パターン」は境界下降が末音節の後、つまりアクセント単位の境界で実現したものであると考える。この分析が、例えば「B 型のトーンを LH+} と設定して、かつ、1 音節付属語がアクセントの指定が無い独立式の付属語とする」というような 1 音節付属語を独立したアクセント単位とする分析よりも優れている点は、1 音節付属語の「下降」「非下降」と 2 音節語や音節未満のンにおける「下降」「非下降」を同様に扱える点、それと同時に、2 音節付属語や音節未満のンが独立したアクセント単位を形成しない一方で 1 音節付属語だけが独立するという典型的にあまり見られない体系を想定せずに済む点にある。以上をまとめると、野津方言において「文節性」は成立すると考えられる。

また、「p 拍の自立語（名詞）に q 拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の (p+q) 拍名詞の音調型と同じになる (Np+Pq=Np+q)」（上野 2012, p.48）という「系列化」は、A 型アクセント単位においては成立する（カ[ガ「蚊が」 = ア[ネ「姉」、ア[ネ]ガ「姉が」 = ム[ス]メ「娘」、ム[ス]メガ「娘が」 = ア[メ]ダマ「飴玉」）が、B 型においては一部成立しないことがある（ヒ[ガ「火が」 ≠ ア[ナ]「穴」、ア[ナ]ガ「穴が」 ≠ オ[トコ「男」、ア[ニガ ≠ ミ[ミ]ズ「蚯蚓」）。

5.3.2 トーンを担う単位

(5) でみたように、野津方言の A 型はアクセント単位頭に重音節がある場合、ピッチ下降は頭音節あるいはその次の音節に生じる。([[ブーメ]ラン～[[ブー]メラン「ブーメラ」)、[[パンフ]レット「パンフレット」、[[オーソー]]ジ「大掃除」)。一方で、軽音節 + 軽音節で始まる場合は 1 音節目もしくは 2 音節目の後で下降する（イ]ワシ「鯛」、ア[メ]ダマ「飴玉」)。長崎方言と同じようにトーンを担う単位 (TBU) をモーラと設定すると、下降する位置が 1 モーラ目（イ]ワシ）から 3 モーラ目（[[パンフ]レット）までであることになる。音節を単位とすると、どの例も「アクセント単位頭 1 音節目から 2 音節目で下降」と捉えることが可能である。

従って、野津方言の TBU は音節とするのが妥当である。

5.3.3 野津方言のトーン

以上の分析をまとめて、野津方言の二型アクセントの解釈を示す。野津方言において基底で指定されているのは次の二つのトーンであると考えられる。"}はアクセント単位末に設定

される下降境界特徴、また、H-L は連続的なピッチ下降、+は音節数が増えるに従って直前の声調が伸びる（自律分節音韻論にいう「声調拡散」）ことを表す（児玉 2014）。

(14) A 型 : LH-L / B 型 : LH+}

A 型アクセント単位頭の LH は、アクセント単位が CVCV（軽音節 + 軽音節）で始まるならば段階的な上昇調（○[○…）として、頭音節が重音節であればその音節の上昇調（[[コー]リ「氷」、[[ゲンバ]ク「原爆」etc.）として実現する。A 型 1 音節語や A 型 3 音節語の「頭高型」の頭音節始端に見られる短いピッチ上昇は、この LH が圧縮して実現したものだといえる。A 型に見られる直線的なピッチ下降は、次末音節に配分された H から末音節に配分された L まで連続的にピッチ下降することで実現する、と解釈する。

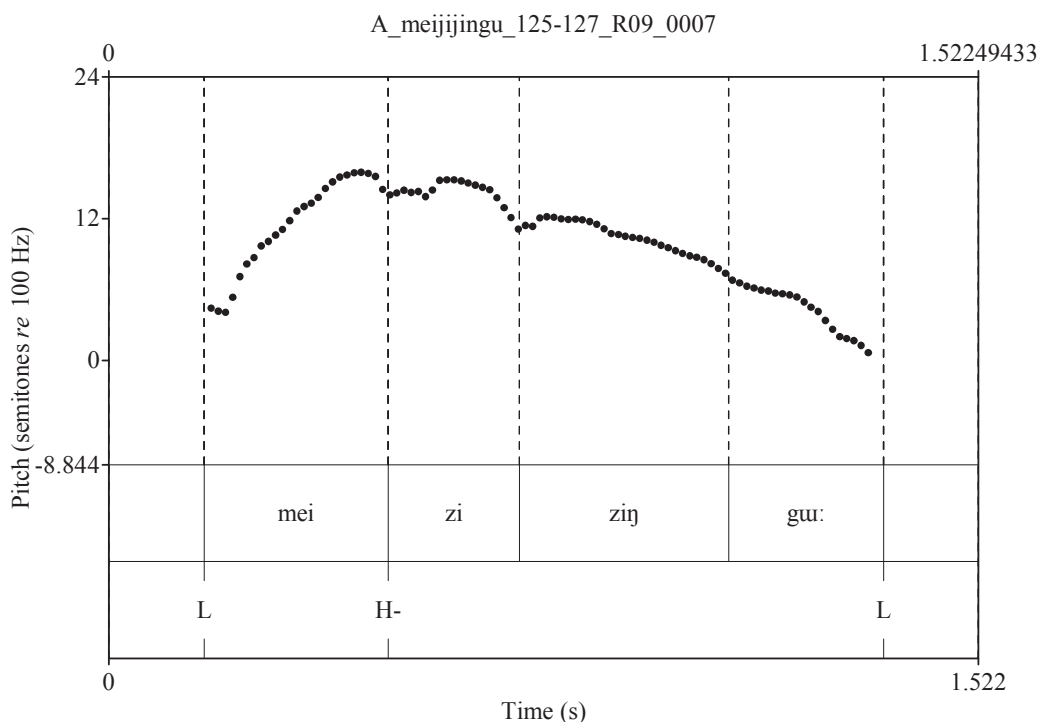


図 3-52. [[メイジ]ジングー「明治神宮」

B 型のアクセント単位頭の LH も A 型同様、アクセント単位が CVCV（軽音節 + 軽音節）で始まるならば段階的な上昇調（○[○…）として、頭音節が重音節であればその音節の上昇調（[[テンモンダイ]「天文台」etc.）として実現する。また、LH によりピッチ上昇した後の高平調の連続は、H がアクセント単位末の境界下降の直前まで拡散（spread）

することで実現する。本論文では、B型アクセント単位末に見られるピッチ下降の有無を、アクセント単位境界の下降境界特徴 “?” の実現のゆれとしてとらえる¹⁴ということは先にも少し触れた。児玉によると、境界特徴はアクセント単位の境界部に現れ、かつ、「実現する位置が必ずしも固定せず、アクセント核とはみなしがたい」（児玉 2014）という性質を持つ。

この下降境界特徴を野津方言の B 型アクセント単位末に設定すると、例えば、B 型 2～3 お音節語単独形に見られる「下降パターン」「非下降パターン」の違いは、下降境界特徴の実現の差で説明可能である。つまり、ア[ナ「穴」やオ[トコ「男」といった非下降パターンは音韻論的には末音節の後ろに境界特徴 “?” があり、それが音声として現れていない（東京方言の語末核と同じような捉え方）とする（ア[ナ}、オ[トコ} etc.）。一方で、ア[ミ「網」やミ[ミ]ズ「蚯蚓」の語末の下降は、音韻論的には下降境界特徴が早まったものであると考える¹⁵（ア}ミ、ミ[ミ}ズ etc.）。

¹⁴ これ以外の解釈として、例えば B 型の基底の声調配列に下降を想定しないもの (ex. LH+)、あるいはアクセント単位末に L 声調を想定するもの (ex. LH+L) も考えられるが、両者いずれの場合にせよ、下降がアクセント単位内に出ること、あるいは下降が出ないことに対する有効な説明が難しい。例えば、長崎方言 B 型の LH+(H) (松浦 2014) のようにメロディ末尾に下降を想定しないとすると、野津方言の狭母音に終わる語の下降（ア[ミ「網」、ミ[ミ]ズ「蚯蚓」）、あるいは文節末の下降（イ[ト]ガ「糸が」、オ[トコ]ガ「男が」）を説明できない。一方、LH+L を想定すると、逆に広母音で終わる語のアクセント単位内での非下降（ア[ナ「穴」、オ[トコ「男」、あるいは文節末の非下降（ア[ミガ「網が」、ミ[ミズガ「蚯蚓が」）が説明できなくなる。

¹⁵ 境界特徴について「実現する位置が必ずしも固定しない」とあるが、野津方言 B 型単独形の下降・非下降の出現が語末の音節の母音の広狭によってかなり規則的に決定していることは看過できない。これについては、狭母音が音声的な理由（聞こえ度、母音の持続時間 etc.）により直後にピッチ下降を担いにくいという制約が野津方言にあって、そのために下降境界特徴が前に動いた、と筆者は現段階では考えている。同様の事例が他九州諸方言にも見られる。例えば博多方言や対馬豆鞆方言では、2 拍名詞 1・2 類について、語末が広母音の場合には直後にピッチ下降があるアクセント型 (○[○]-▽)、狭母音の場合には 1 拍目にピッチ下降があるアクセント型 (○)○-▽) に分裂するということが知られている (岡野 1983, 添田 1996)。

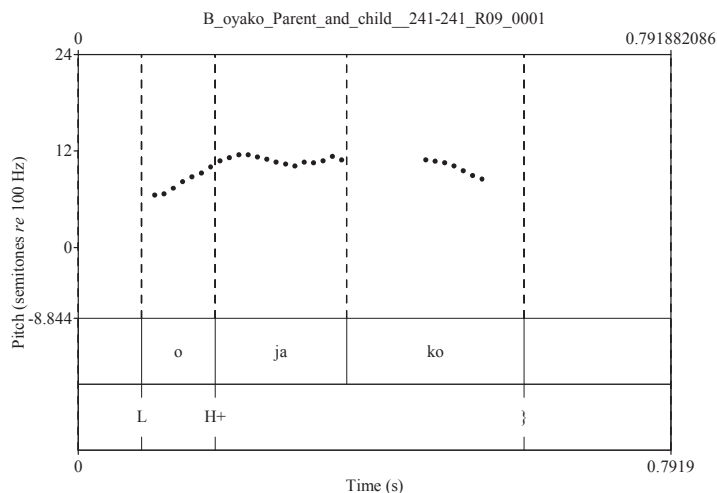


図 3-53. オ[ヤコ「親子」

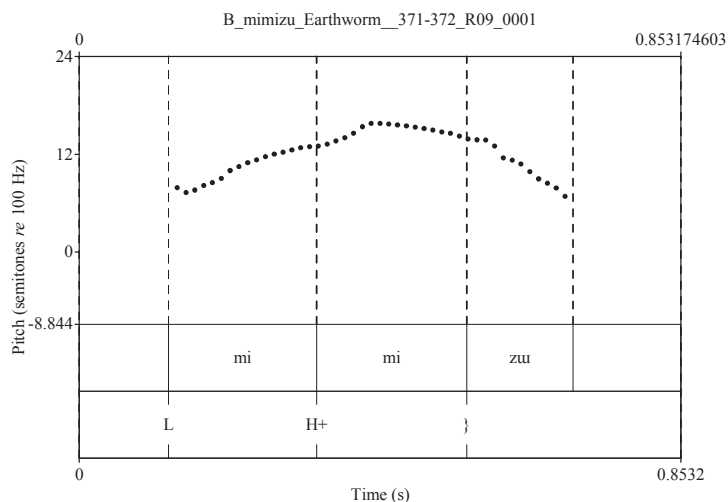


図 3-54. ミ[ミ]ズ「蚯蚓」

同様に、種々の付属語接続形に見られる下降・非下降の交替も、下降境界特徴の実現の差と解釈する。つまり、ア[ニガ「兄が」やミ[ミズガ「蚯蚓が」、[[タンボマデ「田んぼまで」といった非下降パターンは音韻論的には末音節の後ろに境界特徴“}”があり、それは後続する文節がある場合には文節境界のピッチ下降として実現する（ア[ニガ}キタ「兄が来た」、[[タンボマデ}イク「田んぼまで行く」 etc.）。一方で、ヒ}ガ「火が」やア[ナ}バ「穴を」、カ[ミマ}デ「髪まで」などの文節末の下降は、音韻論的には下降境界特徴が早まったものであると解釈する（ヒ}ガ|ツク「火が付く」、カ[ミマ}デ|ヌクル「髪まで抜ける」 etc.）。

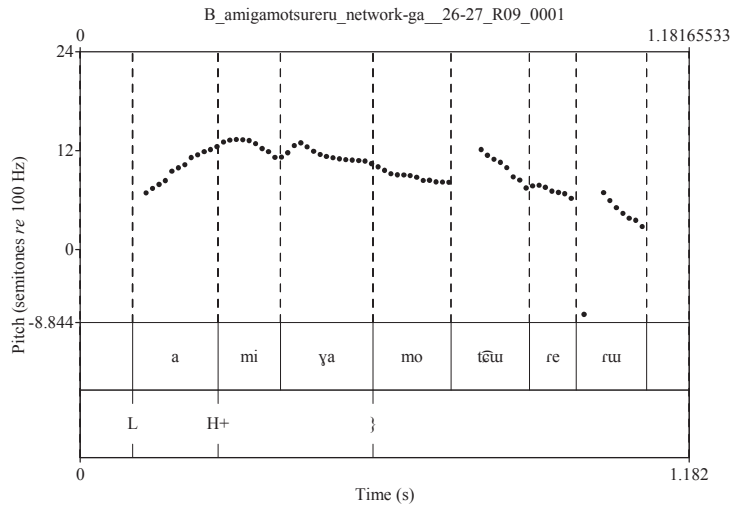


図 3-55. ア[ミガ}|モツ]レル

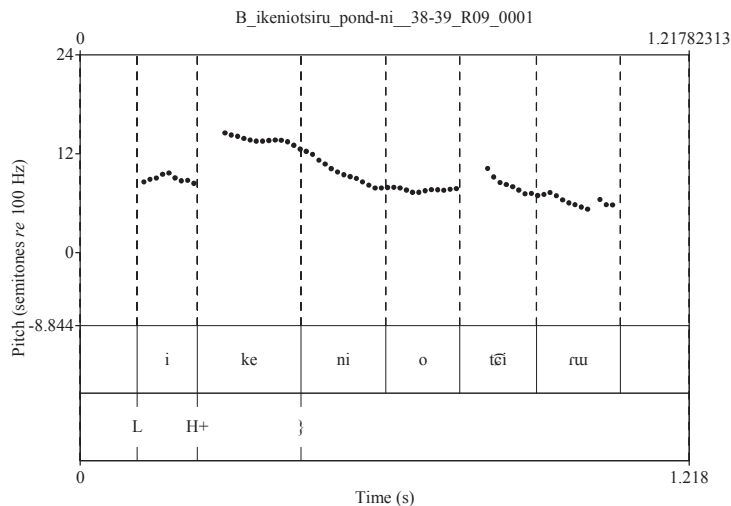


図 3-56. イ[ケニ}|オチ]ル

以上が、野津方言の二型アクセントの解釈である。

6. 八代地域諸方言に見られる特徴・特性の検討

6.1 トーンの特徴

木部（2000, 2012）は西南部九州二型アクセント諸方言を、その音調型に見られるピッチ上昇・下降位置を基準として、大きく二つのタイプに分けている。つまり、「アクセント単位の末尾部分にピッチの下降や上昇」（木部 2012, p.80）が現れる「**鹿児島タイプ**」（木部 2012）あるいは「**南部タイプ**」（木部 2000）と呼ばれるもの、もう一方が、「アクセント単位の最初の部分に下降」（木部 2012, p.80）が現れる「**長崎タイプ**」（木部 2012）ある

いは「北西部タイプ」(木部 2000) と呼ばれるものである。前者の典型例が鹿児島市方言やその周辺の諸方言、後者の典型例が長崎市方言や佐賀県藤津方言(平山 1951)である¹⁶。

八代諸方言について見てみると、前章の分析の結果、旧八代市方言(大村、古麓)・坂本町上深水方言、また本論文では扱わなかったが坂本町木々子方言(山田 2016a) および坂本町大門瀬方言(山田 2016b) が、A型がアクセント単位の末尾にピッチ下降を有していることが明らかになった。一方で、氷川町野津方言はA型がアクセント単位頭にピッチ下降を有していることも明らかになった。

木部の分類を八代諸方言に適用するならば、旧八代市方言・坂本町上深水方言・坂本町木々子方言・坂本町大門瀬方言が「鹿児島タイプ」の二型アクセント、氷川町野津方言が「長崎タイプ」の二型アクセントになる。奇しくも、このトーンの特徴による分類の結果と各方言の地理的分布にはある程度の対応が認められる。つまり、八代地域の中でも「鹿児島タイプ」に分類される方言は中南部地域に、「長崎タイプ」に分類される方言は北部地域に分布している(図 6-1.) また、この分析結果は平山(1951)の指摘¹⁷を追認するものでもある。

野津から有明海の海岸線に沿って更に北上した宇城市三角方言(平山 1951, 崎村 2006) や熊本県玉名市方言(平子・五十嵐 2016b)、佐賀県旧杵島郡北方町方言・江北村方言(平子・五十嵐 2016a) が一様に「長崎タイプ」に分類されていること、一方で八代市から南に下って熊本と県境を接する鹿児島県出水市方言(児玉 2009) や鹿児島県長島町方言(児玉 2010) が「鹿児島タイプ」であることを考えると、野津方言は九州本土側の「長崎タイプ」方言の連続体の一部(あるいはその南端)、旧八代市方言などは九州本土側の「鹿児島タイプ」方言の連続体の一部(あるいはその北端)と捉えることもできよう。「八代地域において異なる二型アクセント体系の境界がある」ということが通時的あるいは共時的にどのような意味を持ちうるのかは今後の研究を俟たねばならないが、興味深い事実である。

¹⁶ ただし、この分類は必ずしも西南部九州諸方言を截然と分けうるものではなく、例えば熊本県天草諸方言では両者の中間のような音調も聞かれる(松浦 2015 など)。また、鹿児島県の中でも枕崎方言などはB型がアクセント単位頭にピッチ下降を有する(木部 2000 など)。

¹⁷ 「九州西南部の二型音調地方全体を眺める時、最も大きくは本県(引用者注:熊本県)北方は佐賀音調式に、本県南半は鹿児島式に(一部地方は長崎式にも)、帰納される可能性がある。しかも、その境は前記鏡町以北に認められるのである」(平山 1951, p.55、旧字体は新字体に直した)

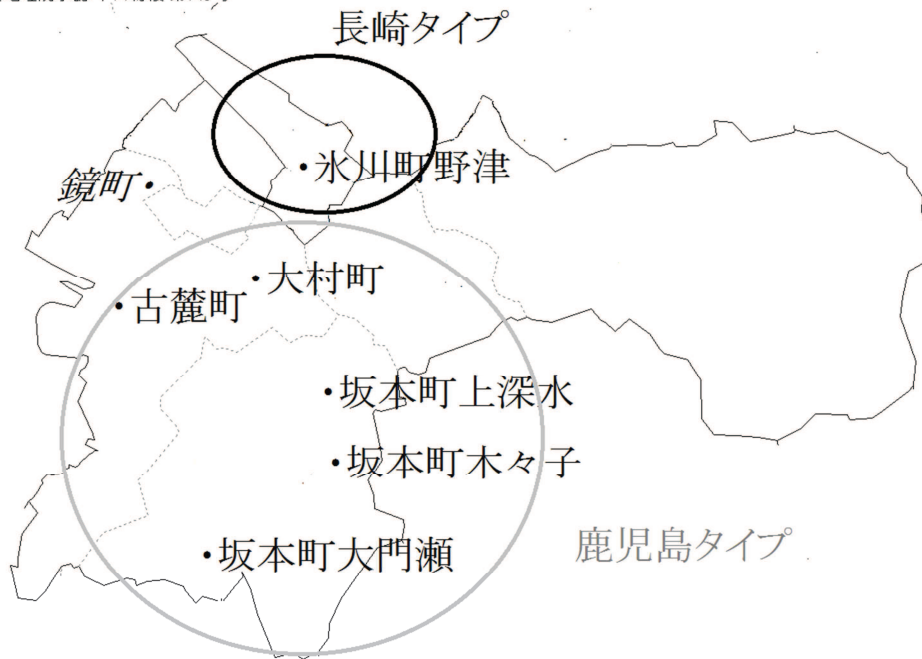


図 6-1. 八代地域における「鹿児島タイプ」「長崎タイプ」の地理的分布

6.2 文節性

「文節性」は「N型アクセントの一般特性」（上野 1984, 2012）の一つで、「助詞・助動詞（まとめて「助動詞類」と呼ぶ）およびそれらの連続が固有のアクセントをもたず、それらが自立語に接合した文節全体で 1 つのアクセント単位になって音調型が定まること」（上野 2012, p.47）と定義される。上野（2012）によれば、N型アクセントに見られる諸特性の内、最も広く認められるものである。例えば、鹿児島市方言では次のように成立する。

(1) 鹿児島市方言の文節性（木部 2012）

	A 型「鼻」	B 型「花」
< 単語 >	[ハ]ナ	ハ[ナ]
< ~が >	ハ[ナ]ガ	ハナ[ガ]
< ~から >	ハナ[カ]ラ	ハナカ[ラ]
< ~ばかり >	ハナ[バツ]カイ	ハナバツ[カイ]

八代諸方言の文節性については、前章の分析で示した通りで、全ての方言において文節性が成立する。つまり、八代諸方言においては文節がアクセント単位（アクセント付与のドメイン）であり、付属語に先行する自立語が文節全体の音調型を決定する。野津方言の B 型は、ア[メ - ア[メ]ガ「雨-雨が」、ア[ニ - ア[ニ]ガ「兄-兄が」、オ[トコ - オ[トコ]

ガ「男一男が」、ミ[ミ]ズ - ミ[ミ]ズガ「蚯蚓一蚯蚓が」と実現することがあることから、一見文節性が成立しないようにも解釈できるが、本論文では野津方言 B 型の語・文節の末音節に現れるピッチ下降は、アクセント単位末にある下降境界特徴が早く実現したものであり、この場合でも文節性は成立すると解釈した。

今回は複数の付属語の連続については未調査であるため、今後は付属語の種類や組み合わせを増やした調査を行う必要がある。

6.3 系列化

「系列化」も「N 型アクセントの一般特性」の一つであり、「p 拍の自立語（名詞）に q 拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の (p+q) 拍名詞の音調型と同じになる (Np+Pq=Np+q) 現象」（上野 2012, p.48）と定義される。例えば、鹿児島市方言では次のように成立する。

(2) 鹿児島市方言の系列化（木部 2012）

A 型

[ハ]ガ（葉が）= [ハ]ナ（鼻）

ハ[ナ]ガ（鼻が）= サ[ク]ラ（桜）

サク[ラ]ガ（桜が）= カマ[ボ]コ（蒲鉾）

カマボ[コ]ガ（蒲鉾が）= アバラ[ボ]ネ（肋骨）

B 型

ハ[ガ]（歯が）= ハ[ナ]（花）

ハナ[ガ]（花が）= ココ[ロ]（心）

ココロ[ガ]（心が）= アサガ[オ]（朝顔）

アサガオ[ガ]（朝顔が）= ハルヤス[ミ]（春休み）

系列化は文節性を背景に成立する特性ではあるが、常に成立するとは限らず、上野 (2012) では「その成否は、自立語自身のアクセント特徴に依存する」（上野 2012, p.48）、「名詞の型自体も文節単位で決まる場合は系列化するが、名詞側に単語レベルで後ろから核の位置指定がなされる場合はその位置が文節でも保持されるために成立しない」（同, p.49）として、喜界島湾方言 β 系列の例を挙げている。

八代諸方言の系列化については、前章で示した分析の通りで、旧八代市方言、坂本町上深水方言、および氷川町野津方言 A 型については系列化が成立する。たとえば、旧八代市方言 A 型 3 音節アクセント単位では〇|〇〇~〇[〇]〇~〇〇〇]]（付属語が付くと、

○○○]▽～○○○▽]]) など、下降開始位置（あるいは上昇開始位置）について複数のパターンが観察されるが、これは自由変異的なもの（同じ語を同じ話者が発音してもゆれが見られる）であって、本論文ではこれをもって系列化の例外とは見做さない。

一方で、氷川町野津方言の B 型 1～3 音節語およびそれらに 1 音節付属語が接続する場合にも複数の音調のパターン（「下降パターン」と「非下降パターン」）が見られ、このパターンの交替は自立語の末音節の母音の広狭によってかなり規則的に決定されている。つまり、2 音節以上の単独形では語末の音節の母音が広母音であると「非下降パターン」、狭母音であると「下降パターン」をとり、付属語接続形の場合は語末（付属語の直前）の音節が広母音であると「下降パターン」を、狭母音であると「非下降パターン」をとるといふ傾向がある。また、1 音節語 + 1 音節付属語は必ず「下降パターン」をとる。

(3) 野津方言の B 型

キ]ガ（木が）	≠	ハ[ナ（花）
	=	ア]ミ（網）
ハ[ナ]ガ（花が）	≠	オ[トコ（男）
ア[ミ]ガ（網が）	≠	ミ[ミ]ズ（蚯蚓）
オ[トコ]ガ（男が）	≠	ヤ[マイモ（山芋）
ミ[ミズ]ガ（蚯蚓が）	≠	ハ[ナラ]ビ（歯並び）

そうすると、キ]ガ「木が」とハ[ナ「花」では系列化は成り立たず、また語末が同じ母音の広狭の語同士でも系列化は成立しなくなる。こういった現象は、自由変異的なゆれではないため、系列化の例外とみなしてもよいだろう。

以上をまとめると、旧八代市方言、坂本町上深水方言、および氷川町野津方言 A 型については系列化が成立するが、野津方言の B 型では一部成立しない。

7. 結論

- 1) 調査地とした八代西部地域全域に二型アクセントが分布しており、特に一型アクセント化の報告のあった八代市坂本町においても明瞭な二型アクセント体系が分布しており、一型化傾向は認められなかった。
- 2) 旧大村町方言、坂本町上深水方言、氷川町野津方言はそれぞれ境界特徴をもつ語声調方言として解釈できる。
- 3) 旧大村町方言、坂本町上深水方言、氷川町野津方言のトーンを担う単位はそれぞれ音節として解釈できる。

- 4) 旧大村町方言は、アクセント単位頭からアクセント単位末までに漸次的なピッチ上昇（「早上がり」「遅上がり」）、アクセント単位末尾にピッチ下降を持つ「鹿児島タイプ」の二型アクセントであり、基底において定められているトーンは次の通り：A型：LHL / B型：LH}
- 5) 坂本町上深水方言は、アクセント単位頭からアクセント単位末までに漸次的なピッチ上昇（「早上がり」「遅上がり」）、アクセント単位末尾にピッチ下降を持つ「鹿児島タイプ」の二型アクセントである。旧大村町方言と異なる点は、アクセント単位末尾のピッチ下降開始位置直前に卓立上昇が聞かれる点、卓立上昇の直前にピッチの半下降が聞かれる点である。上深水方言で基底において定められているトーンは次の通り：A型：LHL / B型：LH}
- 6) 氷川町野津方言は、アクセント単位頭に短いピッチ上昇を持ち、A型がアクセント単位1～2音節目にピッチ下降開始位置がある「長崎タイプ」の二型アクセントである。B型には、アクセント単位末までピッチ下降しない「非下降パターン」とアクセント単位の次末音節から末音節にかけてピッチの下降が見られる「下降パターン」の二つのパターンが聞かれる。野津方言で基底において定められているトーンは次の通り：A型：LH・L / B型：LH+}
- 7) 西南部九州二型アクセント諸方言に見られる諸特性の内、文節性は八代諸方言においても認められる。系列化は、旧八代市方言、坂本町上深水方言、および氷川町野津方言のA型には認められるが、野津方言のB型では一部成立しない。

本稿では、主に八代諸方言の音調型に注目しその多様性を示すことができたが、複合語アクセント規則をはじめ、漢語や外来語のアクセントなどまだ明らかになっていない点は多く残っている。また、様々な種類の付属語、あるいはその組み合わせのアクセント実現も明らかにする必要がある。

また、野津方言のような「長崎タイプ」の二型アクセントが八代の他の地域においても聞かれるのか、八代東部の東陽町や泉町においても二型アクセントが分布しているのか、など調査地域の拡充も今後の課題として挙げられる。先述したように、八代地域には異なる二型アクセント体系の境界が存在し、そのような地域のデータの蓄積・拡充は西南部九州二型アクセント研究全体に新たな通時的・共時的知見を与える可能性がある。一方で、若年層を中心に八代地域でも急速に伝統的な方言アクセントは失われてきており、早急な調査が必要である。

参考文献

- 秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』 熊本日日新聞社.
- 上野善道（1984）「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 2 記述的研究 篇』 167-209, 明治書院.
- 上野善道（2011）「故 川上夔先生追悼文」『音声研究』 15(3), 44-62.
- 上野善道（2012）「N型アクセントとはなにか」『音声研究』 16(1), 1-4.
- 上野善道（2013）「N型アクセントの諸相 総論と各論（喜界島・与論島方言）」第27回日本音声学会全国大会 公開シンポジウム「N型アクセントの諸相」 発表スライド.
- 岡野信子（1983）「壱岐・対馬の方言」『講座方言学 9 九州地方の方言』 国書刊行会 143-172.
- 川上夔（1965）「いわゆる低低低型から高高低型への変化」『音声学会会報』 118. （再録：川上夔（1995）『日本語アクセント論集』 汲古書院 434-441.）
- 木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』 勉誠出版.
- 木部暢子（2012）「西南部九州2型アクセントの特性の比較 —助詞・助動詞のアクセントを中心として—」『音声研究』 16(1), 80-92.
- 九州方言学会（1969）『九州方言の基礎的研究』 風間書房.
- 児玉望（2009）「出水方言のモーラ声調単位とイントネーション」『熊本大学言語学論集』 8, 1-26.
- 児玉望（2010）「方言音声コーパスの韻律構造表示 —鹿児島県立図書館方言採録テープの分析—」『熊本大学言語学論集』 9, 1-28.
- 児玉望（2012）「屋久島の二型アクセント：自発談話音声資料の韻律分析」『音声研究』 16(1) 119-133.
- 児玉望（2014）「九州におけるアクセント変化の再建：境界特徴に着目して」『音声研究』 18(3), 27-42.
- 児玉望（2015）「隠岐三型アクセントの再検討」『熊本大学言語学論集』 14, 1-36.
- 児玉望（2016）「天草本渡二型アクセント：自発談話資料の分析」『熊本大学言語学論集』 15, 59-82.
- 坂口至（2001）「長崎方言のアクセント」『音声研究』 5(3), 33-41.
- 崎村弘文（2006）『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』 明治書院.
- 添田建治郎（1996）『日本語アクセント史の諸問題』 武蔵野書院.

- 早田輝洋 (1977) 「生成アクセント論」『岩波講座 日本語 5 音韻』 岩波書店 323-360.
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』 大修館書店.
- 平子達也・五十嵐陽介 (2016a) 「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践国文学』 89, 107-69.
- 平子達也・五十嵐陽介 (2016b) 「熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告」『実践女子大学文学部 紀要』 58, 1-22.
- 平山輝男 (1937) 「熊南アクセントと熊・鹿アクセント境界線」『コトバ』 7(3). (再録：井上史雄他編 (1997) 『九州方言考 1』 ゆまに書房 113-131.)
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』 学界之指針社.
- 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』 ひつじ書房.
- 松浦年男 (2015) 「天草二型アクセントの諸問題」『筑紫日本語研究 2014』 51-59.
- 山田高明 (2016a) 「熊本県八代市坂本町方言のアクセント体系」九州方言研究会第 41 回研究発表会発表資料.
- 山田高明 (2016b) 「熊本県八代地域の二型アクセント」日本方言研究会第 103 回研究発表会発表資料.
- Pierrehumbert, Janet B. and Mary Beckman E. (1988) *Japanese Tone Structure*. MA:MIT Press

※本論文の地図は、白地図 KenMap Ver9.11 で作成した。

(やまだたかあき、熊本大学社会文化科学研究科博士前期課程)